少女無惨　ー処刑される少女たちー

暗闇魍魎

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。

このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
少女無惨　ー処刑される少女たちー

【Ｎコード】
Ｎ３０９５ＪＡ

【作者名】
暗闇魍魎

【あらすじ】
少女たちが処刑されていく救いのないお話ばかりです。性器拷問、性器破壊された挙げ句、許される事なく残酷に処刑されていきます。ストーリーらしきものも特に無く、唐突に理不尽に処刑されます。少女が徹底的に痛めつけられる描写ばかりなので苦手な方は注意して下さい。
以前書いた物を読み易いように修正した物を集めた小説になりますので、お話毎に設定や主人公、視点など変わっていますので、ご了承下さい。

例によって酷い内容ですので苦手な方は読まないようお願いします。

性器切断

白い不気味な仮面に黒いマントで身を隠した数人の執行人が幼い少女を運んでいく。白いレオタードに白いストッキングで包まれた少女の身体は、その柔らかな曲線故に清楚な中にも強烈な女の子の匂いを放っていた。

「助けてくださいぃーーっ」

両腕を後ろ手に拘束されたまま処刑場へ運ばれる少女は叫び続けていた。

「まだ死にたくないですぅーっ」

涙を流し救いを求める少女の前で処刑室の重い扉が開けられ、その中へまるで汚い物でも捨てるように少女の身体が投げ込まれた。

「痛いっ・・」

床に身体を打ちつけ小さく悲鳴を上げた少女の背後で扉が堅く閉められた。そしてモーターの回る音が聞こえ始める。少女は恐る恐る身体を起こし音のする方向に目を向けた。

「ひぃっ」

少女の目に床から一段高くなった場所で高速に回転するのこぎりが映る。その回転のこぎりの前にはカメラが設置されており、天井からは少女が苦痛に耐え舌を噛まないように噛む為の棒がぶら下がっ

ていた。

「そんな・・」

少女はその残酷な処刑装置を見つめ身体を硬直させた。

・・私、自分で自分のマンコを切り裂くの・・

涙を流し震える少女の前の壁に突然数字が映し出され、その数字がどんどん減っていく。

・・カウントダウン？・・

少女は慌てて立ち上がり、回転するのこぎりを跨ぎ、棒をくわえた。もしも時間内に自分で性器を切り裂かなかった場合、遥かに残酷で苦しい処刑が自分を待っている事を少女は身に染みてわかっていた。

・・怖い、怖いよぉ・・

少女は少しずつ足を曲げ、性器をのこぎりに近づけていく。

「いやぁーーっ」

のこぎりが少女の股間に触れレオタードが簡単に裂けた瞬間、少女は後ろに尻餅を着いていた。そして、微かにレオタードが裂けた少女の股間から湯気を立てて小便が溢れ出す。

「あ・あ・あ・あ・・」

少女は小便を漏らし尻餅を着いたまま震えていた。それでも少女は

泣きながらよろよろと立ち上がり再びノコギリを跨ぎ、噛み棒を噛んだ。少女の漏らす小便が回転するノコギリに当たりキラキラと飛び散る。

・・怖い、怖い、怖いよぉ・・

少女は固く目を閉じ、噛み棒を思い切り噛み締めながらゆっくりと震えながら腰を下ろしていった。

「おぉぉーーーーーーーっ」

歯が砕けるほど噛み棒を噛み締めながら絶叫する少女の股間で血が飛び散る。少女の大切な性器は回転ノコギリで簡単に切り裂かれ大量の血を辺りに撒き散らしていた。

・・私、自分で性器切っちゃった・・

少女は痛みと精神的ショックで気が遠くなりそのまま後ろに倒れていった。切り裂かれた少女の股間からは、ドクドクと血が溢れ体はビクビクと痙攣している。
自分で自分の性器を切断した事が評価され、少女は楽に処刑されることとなった。少女の首にロープが巻かれ吊るされていく。そして、足首にも５０ｋｇもあるオモリが下げられる。腕を縛られ首を吊られた少女の体がピーンと一直線に伸び切る。

「あぼぅぅーーっ」

首を吊られた少女は呻き声を上げるが、その内にぶくぶくと泡を吹き舌を突き出すと白眼を剥いて静かになっていった。

恥丘釘打ち

天井からのロープで両手を頭上で縛りつけられてしまった順子は怖くて声も出せずにいた。順子の回りに仮面を付けた黒い影のような人影が三つ見える。その仮面の奥の冷たい眼は順子の身体は舐めるように見つめ、一つの影が順子に近づくと手にしたハサミをセーラー服の裾に当てた。そして別の影がスカートにもハサミを当てる。

「あっ」

小さな声を上げた順子にお構いなくシャキシャキとセーラー服とスカートが切り裂かれていく。そして忽ち順子の身体から切り裂かれた制服が剥ぎ取られた。三つの影は制服の下から現れた順子の身体に見入っている。順子は恥ずかしさのあまり眼を閉じ俯いた。しかしそんな順子の背後から髪の毛を乱暴に捕まれ顔を上げさせられ無理矢理眼を開かされてしまった。

「あっ嫌です・・」

何時の間にか順子の前には姿見が置かれており、その姿見に順子の全身が映っていた。長袖の黒いレオタードに黒いパンティストッキング。そしてパンティストッキングの上に太ももまでの白いオーバーニーソックスを穿き、レオタードの上に白いブラとパンティを身に付けた順子の姿がはっきりと映っている。どれも本来の順子のサイズより小さなものを身に付けているので、順子の身体を締め付け、そして食い込んでいる。どうしてそんな格好をしているのか問われたら、処刑していただく時のためと答えるしかない。この拘束感がたまらなく順子を魅了すると同時に、処刑していただく際にはこの

無様な格好が気に入っていただけると思うのだ。そして、順子の思惑通り、順子の胸、順子の下腹部、順子の太ももが舐めるように見つめられる。

「恥ずかしいです・・」

順子は自分の性器から恥ずかしい液が溢れだしたのを感じ思わず小さな声を上げる。

「足を開け。」

順子の声の意味を察し耳元で命令が告げられた。

「はい」

順子はおずおずと少しづつ足を開いていく。鏡の中で露になっていく股間。白いパンティの股間中心に恥ずかしい染みがはっきりと浮かび上がる。

「う・・」

突然順子は背後から口を塞がれ呻いた。同時に順子の太ももも開いたまま拘束具が深く食い込み押さえ付けられる。そして、逆Yの字に拘束された順子の眼前に細く長い処刑用ニードルが示された。今日、順子は処刑される。順子の性器は徹底的に痛めつけられた挙句、二度と使用できないよう容赦なく壊される。そして、順子は苦痛と絶望に泣き叫びながら死んでいくのだ。まだ幼い順子がなぜ処刑されなければならないのか不思議に思う人もいるだろう。それは順子自身が残酷に処刑されることを望んだからだ。女の子の一番大切な性器を辱められ痛めつけられ、そして容赦なく壊される。それ

こそ順子が生きてきた、たった一つの理由だった。

「おっおっ・・」

自分の性器を貫くニードルの鋭く凶悪な光に口を塞がれたまま順子は泣き出していた。しっかりと拘束されてしまった順子はもはや逃げることはおろか身動き一つできない。そんな順子の股間に電動ローターが当てられる。

「おうっおうっ・・」

ローターの振動が順子のクリトリスを刺激し、順子は泣きながら快感に呻いていた。もちろんローターは順子に快感を与えるためではなく、目標をはっきり目立たせるための手段だ。思惑通り順子のクリトリスは固く勃起し、パンティ越しにもポッチリとその存在を示しはじめた。そして、そのクリトリスが摘まれ、順子の悲鳴と哀願を楽しむために口を塞いでいた拘束具が取り払われる。口からよだれを垂れ流し震える順子は摘まれたクリトリスにチクッとした痛みを感じた。

「ひっ・・!」

順子は声にならない悲鳴を上げ身体を硬直させる。クリトリスに感じた痛みは徐々に耐え難い激痛へと変わっていった。

「あぁぁーーーーーーっ」

順子はありったけの声で悲鳴を上げ必死に腰を動かそうとしたが、しっかり拘束された順子の下腹部は意志に反して身動き一つ出来ない。ニードルが順子の性器に突き刺さるにつれ、順子は下腹部に強

烈な痛みと熱さを感じていた。

「助けてくださいぃーーーっ」

順子は性器に二本目のニードルを突き刺され泣きながら哀願した。しかし、容赦なく順子の性器にニードルは突き立てられていく。女子の大切な性器にニードルを突き刺すという行為が気に入ったようでさらに三本目のニードルが順子の性器に当てられた。すると、順子の恥丘にも何かが当てられる。順子は涙で滲む目で自分の恥丘に当てられた物を確認した。

「嫌ぁーっ怖いぃーーーっ」

泣き叫ぶ順子の形の良い恥丘中心に拳銃に似た電動釘打ち機が当てられていた。そして、何の躊躇(ためら)いもなくスイッチが押される。

「あーーーーーーっ」

順子は悲鳴を上げながらおしっこを漏らしていた。恥丘に打ち込まれた釘は、恥骨を貫通し深々と順子の下腹部に突き刺さっている。その焼け付く痛みに順子は発狂したように泣き叫んだ。そんな順子の惨めな姿が楽しかったのか、順子の恥丘に続けて釘が打ち込まれる。

「あぁぁーーーーーーっ」

絶叫する順子の恥丘に2本目の釘が打ち込まれた。当然それで終わりではない。順子の恥丘は上から一直線に6本もの釘が打ち込まれた。夥しい涙と鼻水とよだれを流し号泣する順子が最後に見たのは、自分の恥丘に当てられる直径２０センチはある太い杭だった。そし

て、巨大なハンマーがその太い杭を順子の恥丘に打ち込もうとしている。

「いやぁーっ、許してくださいっ。誰か助けてぇーーっ」

しかし、ハンマーは思い切り振られる。

バキョバキョバキョ

「あびょ、あびょ、あびょ」

太い杭は容赦なく打ち込まれ順子の性器は破壊された。恥骨は砕け、子宮も卵巣も膣もグチャグチャに壊される。順子は恥丘から太い杭を容赦なく打ち込まれ、大小便を漏らしながら静かになっていった。

性器鞭打ち1（前書き）

今回登場する“ゆかり“は連載中の「ゆかりの記録」の原型となった“ゆかり“です。
この頃から変態で頭のおかしい女子ですね。

性器鞭打ち1

「ゆかりの性器を処刑してください……」

濃紺のスクール水着に黒いパンティストッキング。さらにその上に黒いオーバーニーソックスを穿いたゆかりは私の前で震えていた。

「手を上げて足を開け、ゆかり。」

「はい……。」

私の命令にゆかりは両手を高く上げ脚を大きく開いた。私はそんなゆかりの姿を舐めるように見つめる。ゆかりは私の視線に頬を赤らめ顔を伏せながらも、命令された姿勢のまま動かずにいた。三つ編みお下げにきちんと揃えた前髪、太い眉に眼鏡をかけたゆかりの顔は真面目で従順で大人しい娘という印象を与えるが、お世辞にも可愛いとは言えなかった。さらに小学生よりも貧弱なほとんど膨らみのない小さな胸に腰の括れのない寸胴の幼児体型。出っ尻に太い足首、そして百五十ｃｍに満たない身長から、二十を過ぎた今でもゆかりは遠目では小学生のように見えた。ゆかりはそんな自分の身体にコンプレックスを持ち、自分の身体をさらに無様に見せるため腋毛を生やし逆に陰毛は永久脱毛処理を施しつるつるの恥丘に処置していた

私はしばらくゆかりを観察した後、乗馬用の鞭を手に取った。

「どこを鞭打たれるかわかるな、ゆかり。」

「はい……。」

ゆかりは私の持つ凶悪な鞭を震えながら見つめ答える。

「ゆ、ゆかりの性器です……。」

ゆかりは脚を広げ無防備に晒す自分の股間に鞭が叩き込まれる姿を想像し息が荒くなってきていた。

「よし。」

私はゆかりの前で鞭を構える。ゆかりは性器を鞭打たれるためさらに大きく脚を開き、私が自分の性器を鞭で打ちやすいよう腰を突き出した。

「女の子の一番大切な性器を鞭で打たれる無様なゆかりの姿をお楽しみ下さい……。」

上気した顔で呟くゆかりは自分の三つの突起が痛いほど固く勃起し股間が熱く火照っているのに気が付いた。

「頭のおかしなゆかりはこれから性器を鞭で打っていただく事を想像しただけで乳首とクリトリスを勃起させて恥ずかしい液を垂れ流しています……。」

ゆかりはさらに膝をかるく曲げ、その股間部分を無防備に晒す。私は染みが出来つつあるゆかりの股間に狙いをつけ鞭を振り上げた。

「顔を上げろ、ゆかり。苦痛に歪む顔をきちんと見せるのだ。」

「はい……。」

俯き気味だったゆかりが顔を上げた次の瞬間、私は思い切り鞭をゆかりの性器に叩き込んだ。

「おおおおおおおぉぉーーーー。」

ゆかりは絶叫し両手で股間を押さえ床を転げ回る。

「痛い、痛いです……。」

股間を押さえながら涙を流し震えるゆかりの姿を見つめながら私の股間でも私のモノが勃起していた。

「立て、ゆかり。」

私の命令に、泣きじゃくっていたゆかりはよろよろと立ち上がった。そして、両手を上げ足を大きく開く。私は立ち上がったゆかりの眼鏡を外すと、左手でゆかりの髪を掴み右手で思い切りゆかりの頬を打った。そして、続けてゆかりの頬を打ち続ける。ゆかりの頬は変色し口内を切ったゆかりは口から血を滲ませた。

「も、申し訳ありません……ゆかりの性器鞭打ちをお楽しみ下さい……。」

涙と鼻水で汚れた顔で口から血を流しゆかりは再び股間を晒し涙声で私に告げる。私はそんなゆかりにお構いなしに容赦なくゆかりの性器に鞭を叩き込んだ。

「お、おおおおおぉぉーーーーっ」

頭上で両手を握り締め必死に耐えたゆかりの性器に続けざまに鞭を叩き込む。

「おおおおおおおぉぉぉーーーーっ」

絶叫したゆかりの股間に黒い染みが出来たかと思うと透明な液体が湯気を立てて溢れ出した。容赦なく性器を鞭で打たれたゆかりは思わず失禁してしまっていた。しかし、私は構わず小便が溢れるゆかりの性器へ鞭を叩き込んだ。

「痛いいいぃぃぃーーーーっ」

泣き叫び小便を漏らしながらもゆかりは私が自分の性器を鞭で打ちやすいよう脚を大きく広げ腰を突き出し股間を晒し続けた。ゆかりの性器に鞭が叩き込まれる度に悲鳴と小便の飛沫が辺りに飛び散っていく。

「ゆかりは今、本当に性器を鞭で打たれていますっ……。」

ゆかりは私に性器を鞭打たれ泣きながら叫んだ。

「女の子の大切な性器を思い切り鞭で打って頂いているんですっ……」

私はそんなゆかりの姿に笑みを浮かべると、さらに激しくゆかりの性器に鞭を叩き込んだ。性器に鞭が叩き込まれる度に、その衝撃でゆかりの太ももの肉もぶるぶると震え、無意識のうちにゆかりの腰はだんだんと下がっていった。

「痛いぃぃ、痛いですぅぅーーーーっ」

涙と鼻水で汚れる顔を晒し歯を食い縛りながら必死に私の前に股間を晒し立ち続けるゆかりであったが、休みなく自分の性器に打ち込まれる鞭の凄まじい激痛に徐々に腰が引けてしまっていた。
私は鞭打つ手を一旦止め、ゆかりの両腕を後ろに回すと拘束具で後ろ手にきつく固定し、さらに首輪に天井からのロープを取り付けた。そして、ゆかりの背後から伸びる鉄製の拘束具に付いた皮のベルトでゆかりの腰と太ももを開いたまま固定する。

「おっ、おっ……」

ゆかりの太ももの肉に片側三本の皮のベルトがきつく食い込み、ゆかりはYの字を逆さまにした格好で完全に拘束されてしまった。さらに私は自由を奪われ嗚咽するゆかりの鼻にフックを掛けると思い切り引き上げ首輪に固定する。ゆかりの鼻の穴の中が丸見えになった。

「いい顔だぞ、ゆかり」

私はゆかりの無様な格好を見て笑いが止まらなかった。

性器鞭打ち2

ゆかりは鼻フックを装着され鼻の穴が丸見えになり上唇も引連れ前歯と歯茎が晒されていた。その状態から私はさらに左右からゆかりの鼻にフックを掛け思い切り引き伸ばす。

「うあ、い、痛いです……」

ゆかりが思わず呟く。私はまるで聞く耳持たずゆかりの豚のように拡がった鼻の穴の中に細い鎖を挿入し始めた。ゆかりは必死に逃れようとするが、私はゆかりの頭を押さえ付けゆかりの鼻の穴に鎖を押し込んでいく。しばらくして咽ていたゆかりの口から鎖の先端が現れた。私はゆかりの口から出てきた鎖を摘むとそのまま引っ張り、ある程度の長さがゆかりの口から出ると今度はまたもうひとつの鼻の穴から反対側の鎖を入れ、ゆかりの鼻の穴と口を鎖で繋いだ状態にした。

私はそのゆかりの無様な姿を眺めると満足気に頷き、今までの鞭から処刑用の棘鞭に持ち替えた。

「怖い、怖いですぅ……」

ゆかりは鞭の表面に無数に針が埋め込まれたその凶悪な鞭を目にし、歯が合わぬほど震えだした。

「どこを鞭打ってほしい、ゆかり?」

私はゆかりの身体の一点を見つめながら言う。

「ゆ、ゆかりの性器を鞭打ってお楽しみください……」

ゆかりは私の持つ棘鞭から目を離さずに泣きながら答えた。私が見つめる一点……。そして、ゆかりは厳重に拘束され無防備に晒された性器以外鞭打たれる場所を考えられなかった。

「よしっ」

私は棘鞭を構え、ゆかりの股間に思い切り鞭を叩き込んだ。

「お、おおおおぉぉーーーーーっ」

それは今までの乗馬鞭とは比べ物にならないほどの激痛だった。絶叫するゆかりの股間は棘鞭の一撃で水着が破れ性器が無様に露出していた。次の棘鞭の一撃は、直接ゆかりの性器に叩き込まれることになる。

「次は直接、この鞭が叩き込まれる。どういう意味か解るな、ゆかり」

私は泣きじゃくるゆかりに言った。

「はい……。」

ゆかりは顔を上げ泣き声で答えた。

「よし。心の準備が出来たら言いなさい。」

私の言葉にゆかりは大声を上げて泣き出した。しばらく号泣していたゆかりはようやく顔を上げ口を開いた。

「ど、どうぞ、ゆかりの性器処刑を執行してください……」

ゆかりは泣きながら震える声で答えた。いよいよ拘束され大きく開いたゆかりの股間に棘鞭が叩き込まれる。

「あっあっあっあっ……」

小さく泣き続けるゆかりの下腹部で、ブッという音がしたかと思うと悪臭が辺りに漂い始めた。

「あっ・あぁーーー」

声を上げたゆかりの下腹部でまたブブッと大きな音がし悪臭が拡がる。極度の緊張と恐怖で思わずゆかりは放屁してしまっていた。真面目で大人しいゆかりがスクール水着を着たまま拘束され、鼻フックで顔面が変形しスクール水着の股間部が破れ性器を露出させた状態で泣きながら放屁する。その無様なゆかりの姿に私は笑みを浮かべた。

「そのまま排便しろ、ゆかり」

私の命令にゆかりは下腹部に力を入れた。

「う、うん、うん……」

息むゆかりの肛門から黒く固い便が顔を出し床に落ちた。続けて今度は少し軟らかめの便が溢れるようにゆかりの肛門から排泄される。

「顔を上げろ、ゆかり」

私は排便するゆかりに命令し鞭を構えた。

「は、はい……」

ゆかりは大便を垂れ流したまま顔を上げた。

「覚悟するんだな、ゆかり」

私の言葉に再びゆかりの目から涙が溢れ出した。私はゆかりの股間から大便が落ちた瞬間を狙い、ゆかりの性器に思い切り鞭を叩き込んだ。凶悪な風切り音の後、大きく開いたゆかりの性器に棘鞭の針が突き刺さり肉を抉り血が飛び散った。

「お、あぁぁぁーーーーーーーっ」

絶叫するゆかりの性器は棘鞭の一撃で血塗れになっていた。私は屈みこみゆかりの性器の状態を確かめると、ナイフを取り出しゆかりの水着を切り裂き始めた。ゆかりはそのまま自分が切り裂かれるのではないかという恐怖で大声で泣き出す。

「心配するな、ゆかり。ゆかりを処刑するのはゆかりの性器を徹底的に壊してからだ。性器を処刑される苦しみを存分に味わってから絶命してもらうよ、ゆかり。」

私は残酷に言い放ち、ゆかりのスクール水着をきれいに剥ぎ取ると続けてストッキングも剥ぎ取った。これで、ゆかりは太ももに食い込むオーバーニーソックスだけの全裸姿で拘束されている形になる。

「せっかく処刑するのだからもっと無様な姿になってもらおうか、

ゆかり。」

私はゆかりの裸体を眺めながら考えた。そして、ゆかりの膨らみのない貧弱な胸で勃起している乳首を摘む。

「せっかく、つるぺたの胸なんだからこんなものは邪魔だな、ゆかり。」

私の言葉にゆかりは顔を強張らせ、嫌々というように首を振る。私は半田ゴテのスイッチを入れた後、ニッパーを手に取るとゆかりの乳首をニッパーで挟む。そして、ニッパーに力を込めた。

「ひぃぎぃぃーーーーっ」

バツンとゆかりの乳首が切断された。私はすかさず赤くなっている半田ゴテをゆかりの胸を当て止血する。

「ぶぎゃぁぁーーーっ」

また、ゆかりが絶叫するが、私はゆかりのもう片方の乳首も切断する。

「あうぅぅーー」

号泣するゆかりの太ももに私はベルトを巻きそのベルトに付いたクリップでゆかりの小陰唇を左右に開いた。これで、ゆかりは性器の中身も無防備に晒すことになる。私はゆかりの桜色の膣前庭窟に開く膣口と尿道口、そして、固く勃起したクリトリスを確認し満足気に頷いた。

「ひぃひぃひぃーー……」

自分の性器が次にどのような事になるのか理解したゆかりはさらに激しく号泣している。私はゆかりのその姿を楽しむと鞭を構えた。

「ひぃぃーーーーーーーーーーっ」

ゆかりが悲鳴を上げる。そして、必死に足を閉じようとするが厳重に拘束されたゆかりの太ももは僅かでも動かすことは出来なかった。

「さあ、ゆかり。ゆかりの性器にサヨナラだ……」

私の言葉にゆかりは凍りついたように泣き止み、涙の溜まった瞳で私の持つ棘鞭を見つめる。私はそのゆかりの顔を楽しみながら鞭を思い切り振った。

ギューン

激しい風切音の後、ゆかりの性器に棘鞭が叩き込まれる。

「あぴやぁあーーーーっ」

ゆかりの股間から血と肉片が飛び散る。ゆかりの性器はクリトリスも小陰唇も消滅していた。股間から血がボタボタと滴り落ち、ゆかりは天を仰ぎ目は飛び出さんばかりに見開かれ大きく開いた口からは舌を突き出したまま硬直していた。

「さあ、もう一発いこうか」

私の言葉にゆかりは反応しなかった。ゆかりは棘鞭の一撃で性器を

抉り取られ、そのショックで絶命していた。

優子は震えながら舞台の中央に進み出た。それと同時に舞台の照明が落とされ強力なスポットライトが優子に浴びせられる。

・・眩しい・・

優子は目を瞑りスポットライトの光の中両手を高く頭上に上げ足を大きく開いた。白い長袖ハイネックのレオタードは、優子の身体にピタリとフィットし、まるで何も身に付けていないかのように優子の小さな胸の膨らみ、なだらかな恥丘から股間の裂け目まで忠実に再現している。そして、太股に食い込む白いオーバーニーソックスがさらに優子の身体のまだ未成熟な女の子らしさを強調し、これから処刑される優子の哀れさを引き立てていた。

・・今ならまだ間に合うよ、優子・・

胸の膨らみと股間の割れ目。もっとも女の子らしく、女の子にとって大切で恥ずかしい部分を自ら強調し女の子としての価値を判断していただく姿勢を執りながら優子は自分自身に語りかけた。震え続ける優子の胸の膨らみの先端では二つの突起がこれ以上ないほど固く勃起し、大きく開いた股間の中心では恥ずかしい染みが広がりつつあった。

・・こんなに怖いのに嬉しいの、優子。恥ずかしい液、いっぱい出てるよ・・

優子は乳首以上に痛いほど固く勃起するクリトリスとだらしなく口

を開け愛液を垂れ流す膣口を感じ呼吸が早くなってきた。

「あっ・・・」

口を半開きにし顔を上気させる優子の腕が突然乱暴に掴まれ、優子は一瞬身体を硬直させた。しかし、すぐに力を抜いた優子の両腕は背中にまわされきつく縛り付けられていく。と同時に優子の目にも黒い布が巻き付けられ、首には黒い革の頑丈な首輪が付けられ天井からのロープで留められた。

・・もう後戻りできないよ、覚悟するのよ優子・・

息を荒くする優子の背後に巨大な拘束台が用意され、まず優子の腰に拘束台から伸びる拘束具が取り付けられる。冷たい拘束具の鉄の感触に優子の身体は大きく震えはじめる。

・・怖い、やっぱり怖いよ・・

ぶるぶると恐怖に震える優子の気持ちなどまるで関係なく、ニーソックスに包まれた優子の形の良い太ももがまるでモノを扱うかのように乱暴に掴まれさらに大きく開かされていく。

「あぁ、怖いぃーっ」

力尽くで太ももを開かされ、足が宙に浮いた優子は恐怖の悲鳴を上げる。

「あっあっあっあっ・・・」

恐怖で歯も合せられぬほど震えはじめた優子の太ももはこれ以上な

いほど無理矢理開かされ、そのまま太ももの付け根に拘束具が巻かれきつく固定される。そして、さらに優子の太ももは拘束具が二カ所に取り付けられ、優子の柔らかな太ももに容赦なく食い込むほど厳重に拘束された。

・・怖い、怖いよぅ・・

女の子の大切な性器をまるで無防備に晒され優子は、自分を処刑するための準備が着実に調っていくのを感じ、とうとう小さな声で泣き出した。しかし、泣き続ける優子のふくらはぎと足首にも拘束具が取り付けられ、優子の下半身はもはや優子の意志では動かせないほど固く厳重に拘束されていく。

「あああああ・・・・」

黒い目隠しから涙が滲み出し泣き続ける優子の両腕を拘束しているロープが腰の拘束具に結びつけられ、優子は胸を突き出し足を限界まで開かされたまま完全に身体を固定されてしまった。目隠しされ、両腕を後ろ手に縛られ、両足を大きく開かされたまま拘束され泣き続けている優子の哀れな姿がスポットライトの中浮かび上がる。

・・動けない、もう私、動けないよぅ・・

優子はあまりの恐怖で失神しそうになっていた。すると、その時頭上に設置されたスピーカーから女の子の声が流れはじめた。

「本日、処刑していただく吉田優子と申します。十五歳です。」

それは優子がこの処刑が執行される舞台に上がる前に自分の意思で吹き込んだテープだった。

「女の子の象徴といえる性器を徹底的に壊して処刑していただくのが私の夢でした。私の性器、まだオナニーしか経験ありませんので、何も知らない女の子の性器が痛めつけられ残酷に壊されていく様子をお楽しみいただけると思います。」

スピーカーから流れる優子の声は、これから処刑していただく興奮のため上擦っていた。

「ここでこれから私の性器が処刑前に受ける拷問を簡単に御紹介致します。まず、性器への鞭打ちから始まり、針責め、再び鞭打ち、そして尿道責めと続きます。この尿道責めの際に私の尿道と膀胱は壊していただく予定ですのでお見逃しなくお楽しみください。」

・・い、いや、いやぁ・・

現実に処刑されるために厳重に拘束されてしまった優子は、すでに興奮よりも恐怖に支配されただ泣きながら自分の声を聞いていた。

「次にクリトリス責めに移ります。女の子の大切で敏感な突起を様々な方法で集中的に痛めつけ壊していきます。私の苦しむ姿も存分にお楽しみいただけると思います。」

・・やめて、もう言わないでぇ・・

優子は拘束から逃れようと身体を必死に動かしたが、上半身が僅かに動いただけで下半身はしっかり固定され微動だにしなかった。

「そして、最後に私の僅かに残った希望を残酷に奪うため膣と子宮、そして小陰唇などの外性器を含めた私の性器全てを原型すらなくな

るほど徹底的に容赦なく壊していただきます。拘束された女の子が泣き叫びながら大切な性器を跡形もなく壊されていく無様で哀れな様子はきっと御満足いただけることと思います。そして、性器を壊され瀕死の状態で拘束されている私の無様な姿をしばらく楽しんでいただいた後、いよいよ最後の処刑が開始されます。」

優子は興奮した口調で話す自分の声を聞きながら恐怖で失禁していた。

「私は壊された性器にさらに鉄槍を突き立てられ、そのまま身体を縦に貫かれます。もちろん、存分に苦痛を与えるためゆっくりと私の身体を性器から口まで串刺しにしていただきます。凄まじい苦しみと死の恐怖に絶叫しながら残酷に処刑されていく私の無様な姿をお楽しみください。そして性器から口まで貫いていただいた後、私がまだ絶命していない場合、もう一本の鉄槍が私の性器から再び打ち込まれます。この作業は女の子の私を死ぬまで徹底的に痛めつけ苦しめる事が目的ですので、私が完全に絶命するまで何本でも容赦なく打ち込まれます。」

・・絶命するまで・・

優子は自分自身から残酷な自分の最後をあらためて告げられ身体を硬直させ震えていた。処刑されるため自ら身体を厳重に拘束されてしまった優子には、もはやその残酷な運命から逃げる術はない。

「それでは、女の子の大切な性器を徹底的に容赦なく壊され、泣き叫び苦しみ後悔し絶望しながら絶命する私の無様で哀れな姿をごゆっくり最後までお楽しみください。」

「やめてぇっ許してくださいぃーーっ」

とうとう優子は絶叫し大声で泣き出した。目隠しをされ両腕を後ろ手に縛られ足を大きく開いたまま宙に浮いた形で完全に拘束された優子が大声で泣く哀れな姿がスポットライトの光の中浮かび上がる。これから優子は残された僅かな時間を凄まじい苦痛に苦しみながら処刑されていく。

・・こんな怖いことを私は夢見ていたの・・

優子は自分が何の抵抗も出来ない状態に拘束され初めて気が付き後悔した。

「助けてくださいぃ、処刑は怖いですぅーーーっ」

涙と鼻水で顔面を汚し、優子は泣きながら哀願する。しかし、目隠しされている優子には判らなかったが、すでに処刑は開始されていた。白い仮面を付けた黒尽くめの人物が鞭を手に優子の前に立っている。そして、大きく開かされた優子の股間に狙いをつけ鞭を構えた。

「あっあっあっ・・・」

周囲の雰囲気が変化したことに敏感に気付いた優子は恐怖で口が動かなくなり泣き声も小さくなった。優子は無防備に晒している自分の性器にこれからどれほどの苦痛が与えられるのか恐怖のため想像すら出来なかった。

・・お願い、お願い・これはオナニーする時のいつもの夢想でありますように・・

夢であるように願いながら優子は腰を引こうとした。しかし、優子の腰は当然固定されたまま動かず、優子の耳にはその儚い願いを破る鋭く凶悪な風切り音が聞こえた。そして、次の瞬間。

「あぁーーーーーーーーーっ」

敏感で柔らかな性器に激しく鞭を叩き込まれた優子は激痛に絶叫し、その鞭打たれた性器からはレオタードを突き抜け透明な液体が勢いよく溢れ出す。優子は経験したことのない凄まじい痛みに再び無様に失禁していた。しかし、優子自身は性器を襲った耐え難い痛みに自分が失禁したことさえ気付かずに大量の涙と鼻水を流し泣き続けていた。

「痛いぃっ、痛いよぅ・・」

泣きながら小便を漏らし続ける優子の性器に、間髪を入れず再び鋭い音を立てて鞭が叩き込まれる。

「あぁーーーーーーーーーっ」

鞭の打撃音と優子の悲鳴が響き渡り、小便の飛沫が辺りに飛び散った。

「やめてください、許してください・・」

泣きながら震える声で哀願する優子の性器に容赦なく鞭が思い切り叩き込まれていく。性器に鞭が叩き込まれる度に優子は絶叫し顔面は溢れる涙と鼻水で無様に汚れていた。そして、鞭打ち開始から十分も経たないうちに優子の白いレオタードの股間部は赤く変色しはじめた。

「痛い、痛い、痛いよぉーーーっ・・」

号泣する優子の性器はすでに激しい鞭打ちで皮膚が破れレオタードを染めるほど無残に出血している。もし優子がレオタードを着用していなければクリトリスや小陰唇など外性器が簡単に千切れてしまうほどの激しい鞭を優子は受けていた。

「あぁーーーーーーーーーーーっ」

性器から出血し泣き叫ぶ優子の赤く染まる股間に鞭は容赦なく今まで以上に激しく叩き込まれ、情け容赦のない激しい打撃音が連続で響き渡る。

「もう性器は許してくださいぃぃ・・」

優子は泣きながら震える声で哀願する。

「他の所を鞭で打ってくださいぃ・・もう性器は・あぁーーーーーーーーっ」

優子の哀願など何の意味も成さず、さらに激しく優子の性器に鞭が叩き込まれていく。優子は鞭で性器を打たれる度に、性器が抉り取られるような恐怖と激痛に襲われていた。

・・痛い、痛いよぉ・鞭でこんなに苦しくて辛いのに、処刑されるときは私どうなっちゃうの?・・

優子が想像すら出来ない凄まじい苦痛のなか処刑されていくのは僅か数時間後。それは優子がどんなに泣き叫んで哀願しても変更されることのない残酷な事実だった。

正確に激しく性器を鞭打たれ号泣していた優子は、自分の性器に嵐のように叩き込まれていた鞭の動きが止まったのを感じた。と思っ

たのも束の間、今度は自分の膣口と尿道の間に耐え難い痛みが走り抜けた。

「あぁーーーーーーーーーっ」

絶叫する優子の性器に無残にも針が突き立てられていた。二センチの円筒形をした柄の先に三センチ程の針が突き出た拷問用ニードルは、容易に抜くことが出来ぬよう先端に釣り針のようなかえしが付いていた。その凶悪な針がレオタードに包まれた優子の股間にゆっくりと根元まで深く刺されていく。

「ひぃぃーーーーーーーーっ」

鞭とは違う性器内部の焼け付く痛みに優子は悲鳴を上げ続け、顔面は夥しい涙と鼻水で汚れていた。そして、瞬く間に優子の股間に百本以上の針が突き刺され、優子の性器は無様な針山と化していく。その容赦のない針責めに優子は失神寸前だった。しかし、皮肉にも性器に突き刺されていく針の凄まじい激痛が優子の意識を再び覚醒させる。優子は休みなく拷問を受け続けた場合、失神することすら出来ないという事実に気が付いた。

・・私、このまま死ぬまで苦しみ続けるんだ・・

優子は今更ながらその恐ろしい事実に気が狂いそうだった。そして、この後自分の性器に加えられる拷問を思い出した時、思わず優子は絶叫していた。

「許してくださいっ鞭で叩かないでぇ・・」

優子は性器に突き立てられた無数の針の激痛に耐えながら、次に自

分の性器に加えられる恐ろしい拷問に恐怖し泣きながら必死に哀願した。しかし、そんな優子の口に優子のパンティが押し込められ、その上から布が巻かれていく。目も口も塞がれ拘束されている優子はもはや女の子の形をしたモノといってよかった。哀願することさえ出来なくなった優子もはっきりと自分がモノとして扱われていることを認識した。

・・私、もう絶対助からない・・

優子は自分の最後がすぐそこまで近付いてきていることを感じ、塞がれた口で必死に叫び続けていた。涙と鼻水も止まることなく流れ続けている。そんな優子の股間は恥骨の下を底辺に肛門を頂点にした三角形の形に無数の針がびっしりと突き刺されていた。そして、優子の耳に先程と同じ凶悪な風切り音が聞こえた。

「おぉぉーーーーーーーーーーっ」

猿轡をされた優子の口から凄まじい絶叫が漏れ、鞭を叩き込まれた性器からは血が飛び散った。そして、悲痛な叫び声をあげる優子の性器に鞭はさらに激しく連続して叩き込まれていく。

・・誰かぁ助けてぇーっ・・

無数の針を刺されたままの性器を鞭打たれ優子はとうとう大便まで漏らしはじめた。悪臭を放つ固形物が優子の股間から床にぼとぼとこぼれ落ちる。優子のその無様な姿は、優子が凄まじい苦痛を受けていることの証明だった。鞭打たれる度、突き立てられた針はさらに深く優子の性器を抉り傷つけ、夥しい涙と鼻水とよだれを垂れ流す優子は塞がれた口から言葉にならない悲鳴を上げ続けている。そして、針山にされた性器を鞭打たれるという凄まじい拷問を三十

分以上受け続けた優子の股間から針が抜かれはじめた。

「おっおぉーーーーっ」

針は抜かれる際に新たに優子の性器を傷つけていく。そして、ゆっくりと全ての針が抜かれた後、優子のレオタードの股間部分が切り裂かれ性器が露出させられる。それはこれから行なわれる性器破壊の目標を露に晒すためだった。レオタードの下から現われた優子の股間はすでに血と小便と大便、そして愛液が混ざりあい酷い状態に変わり果てている。しかし優子はこれからさらに凄まじい苦痛の中、女の子の大切な性器を形すら残らないほど徹底的に容赦なく壊され処刑されていく運命だった。

性器破壊願望少女3

いよいよ優子の性器破壊が本格的に開始される。まず優子の尿道を破壊するため、導尿に使用するカテーテルの三倍程太さのある尿道管が用意された。この尿道管の先端には放射状に鋭い刃が取り付けられ表面には無数のガラス片が埋め込まれており、挿入しただけで優子の尿道は二度と使用することが出来ないようずたずたに切り裂かれていく。

・・あぁ、おしっこの穴に何か入ってくる？・・

優子は自分の尿道に挿入されようとしている尿道管に気付き恐怖した。

・・これから、私のおしっこの穴、壊されるんだ・・

優子は猿轡をかけられた口で必死に哀願したが、それは無様な呻き声にしかならなかった。そんな哀れな優子の尿道に躊躇なく凶悪な尿道管がゆっくりと差し込まれていく。

「おっびゃぁぁぁーーーーーーーっ！！」

今までの拷問と比較にならない尿道を破壊される凄まじい激痛に優子は塞がれた口で絶叫した。その優子の哀れな姿を楽しむため膀胱まで突き入れられた尿道管は一旦抜かれ、その後何度も何度も繰り返し優子の尿道に差し込まれ抜かれていく。その度に優子は発狂したように絶叫した。そして、優子の悲鳴に力がなくなってきた頃ようやくこの残酷な作業が停止され、尿道管は優子の尿道に深く差し

込まれたまま次の膀胱を破壊するための用意がはじめられた。ずたずたに切り裂かれた優子の尿道からは血が滴り、目と口を塞がれた優子が激しく号泣しているのがわかる。

・・助けて、誰か助けてぇ・・

夥しい涙と鼻水とよだれで顔面を汚し泣き続ける優子の尿道から突き出た尿道管にシリンジが取り付けられ、そこから沸騰した熱湯が優子の膀胱に容赦なく注入された。

「お、ぎゃぁぁーーーーーーーーーっ!!」

優子は何が起こったのか分らなかった。自分の身体の中で何かが爆発したようなとても耐えられない痛みが優子を襲う。注入された熱湯は冷める前にすぐ抜かれ、再びぐらぐらと沸騰した熱湯が優子の膀胱に注入される。そして、この膀胱破壊の最中、優子のクリトリスは包皮を剥かれ強力な媚薬が塗られ強制的に勃起させられていた。優子の意思とは無関係に固く勃起したクリトリスの頂点に細く長い針が当てられる。そして、ゆっくりと優子のクリトリスに突き立てられていった。

・・いやぁーーっもう許してくださいぃぃぃっ・・

針は優子に苦痛を与えるためゆっくりと身体の奥深く突き刺されていく。そして、二度と抜けないよう根元まで深く押し込まれる。それでも勃起したままの優子のクリトリスに針は続けて突き刺され、優子の敏感な突起は針を刺す場所がなくなるまで無数の針で貫かれていった。

そして、次にカッターナイフが当てられ優子の勃起したクリトリスは縦に切り裂かれはじめた。

「お、ばぁぁっーーーーーーーっ！！」

ゆっくりと根元まで切り裂かれていくクリトリスの想像を絶する痛みに優子は発狂したように絶叫した。その凄まじい痛みから優子は自分の性器が確実に壊されているという事だけは自覚できた。

・・私の性器壊されてる・・

恐怖と苦痛で発狂寸前の優子の縦に割られ血を流すクリトリスが今度はクランプで挟まれ締め付けられていく。クランプのネジが回されるにつれ優子のクリトリスは無残に潰れていった。

「おっおっおっおっ・・・」

そして、プチッという音と共に血が飛び出し、クランプはピタリと閉じられ優子のクリトリスは完全に潰された。

さらに悲しげに声を漏らす優子の膣口に表面がやすり状に加工された直径五センチ程の鉄棒が無理矢理挿入され膣が裂けていく。すでに優子は生まれて初めて自分の性器に入ってきたものが、その性器を壊すための処刑具だということさえ気付かぬほど何も考えられなくなっていた。子宮手前まで膣を裂きながら挿入された鉄棒は高速に回転をはじめ、優子の一度も使われなかった膣内壁を無残に削り取っていく。

「おびゃびゃびゃびゃっ！！」

絶叫する優子の股間から血と肉片が飛び散り、いよいよ優子の最後が近付いたことを感じさせた。

鉄棒が抜かれぽっかりと空いた穴からチューブが入れられ先端が子

宮口に挿入されると、チューブから子宮内に直径一センチ程のガラス球がどんどん注入されていく。たちまち優子の子宮はガラス球で一杯になり、それでも後から後から押し込まれるガラス球のためとうとうガラス球は子宮内で割れ優子の子宮に突き刺さる。そして、ガラス球内に入れられていた塩酸が優子の子宮を内部から溶かしはじめた。
優子はまるで人間のものとは思えない絶叫を上げ続けている。

・・やめてぇ、もう嫌ぁっ!!　もう早く殺してくださいぃぃっ!!・・・

優子の子宮は塩酸でドロドロに溶け、膣があった穴から流れ出していた。子宮も膣も失くなった優子に、いよいよ最後の時が訪れる。
優子の股間下に優子を貫く鉄槍が準備される。そして、容赦なく突き入れられた。

「おびゃぁぁーーーっ」

優子の最後の絶叫が響き渡り、優子の口から鉄槍が飛び出した。優子は性器を破壊され、串刺しにされ苦しみながら絶命した。
そして、優子の処刑は滞りなく終了した。

ある少女の日記

いつの頃からか私は自分が処刑される事を夢見るようになっていた。毎日オナニーするときも、パンティの上からクリトリスを擦りながら自分のこの性器が拷問を受けている様子を想像して恥ずかしい液を流している。私は女の子は飼育され処刑されることを本能的に望んでいる、と思っている。そして、そのために女の子の性器は裂けて穴が空いているに違いない。世界の拷問史を見ても、三角木馬や股裂き・串刺し等女の子の性器に対する拷問が圧倒的に多い。女の子は昔から性器を拷問され処刑されることに喜びを感じていたんだと思う。私は現代に生まれてしまった自分が悲しい。中世に私が生まれていれば、毎日私の性器を拷問して、私が恐怖と苦痛と絶望で泣き叫び狂っていく様子を楽しんでいただけたのに・・
それでも私は希望を捨てずにいる。私が二十歳になる前に処刑されることを信じて・・

一月二十三日・更新

★　★　★　★

私が前回ホームページに掲載した告白に対したくさんのメールを頂き有り難うございます。全ての方にお返事を差し上げることは困難なので、ここで御質問に答えたいと思います。
私は現在十六歳、高校生です。
髪は三つ編みにし束ねています。
そして、もちろん処女です。何も知らない無垢な性器を壊して楽しんで頂く事が出来ます。

性器については傷を付けないよう注意し大切に扱っています。オナニーの際も直接触れることも器具を使用することもありません。また、固いトイレットペーパーで擦ることを避けるため、柔らかいナプキンを当ておしっこはそのまますることにしています。
私の好みの性器拷問については処刑される私が言うべき事ではないので控えさせてください。執行人の方が楽しい方法で拷問し処刑してくだされればよろしいと思います。
それと私は性交は望んでいません。ＳＭチックな性交をお望みの方は他の女の子をお捜しになるようお願いします。
また、処刑は現代社会においては許されない禁断の楽しみですので覚悟のある方以外は傍観していただくようお願いします。

二月五日・更新

★　★　★　★

私との性交について御質問受けましたのでお答えします。
先日、性交は望まないと書きましたが、それは私が生きている間ということです。私を処刑後は存分に屍姦を楽しんでください。いや、むしろ屍姦していただきたいです。性器は破壊され尽くしているでしょうが、お尻の穴、口、鼻など、いくつか使用に耐える私の穴も残っているでしょうし、お好きな所へ穴を空けていただくのも楽しめると思います。

二月八日・更新

★　★　★　★

ようやく私の処刑を現実に執行してくれる方が現れました。嬉しいです。信頼出来そうな方ですので、きっと私の性器を徹底的に壊して処刑してくれるでしょう。このホームページの書き込みもこれが最後になります。どんな風に私のマンコ壊されていくのかな？想像すると今からワクワクしています。きっと無様に泣き叫んで許しを乞いながらマンコ破壊されるんだろうな。馬鹿な私は後悔しながら絶望の中、処刑されるんだ。あぁ、もうマンコ凄いことになってる。こんなにビショビショになって喜んでる。興奮して文章もおかしいかも知れない。これをご覧の皆さん、応援して下さい。出来るだけ私が発狂しないで、苦痛に泣き喚き続けられる事を。

二月十三日・更新

★
★
★
★

さっき最後の更新といったけど追記しておきます。私の処刑方法の概要を教えてくれたので書いておきます。本当は教えないでという事だけど、嬉しくて仕方ないので書いちゃいます。私は、こんな風に処刑されるんだよ。と大声で叫びたい。皆さんもこれを見て私の処刑される姿を想像してくれたら嬉しいな。まず、マンコ破壊。簡単に書くと、クリトリスと小陰唇は切除、マンコの穴は焼きごてで焼き尽くされて、子宮はマンコの穴から抜かれます。その後、手足を切断されて、首を吊られます。そして、首を吊られたまま、マンコの穴、おしっこの穴、おしりの穴、女の子の３つの穴から口まで串刺しにされます。もう、そこで私は絶命しているのは間違いないので（もし生きていてもここまでされれば私は満足なので）私の頭に穴を空けて脳みそを犯して、中に放尿もしてくれるそうです。もう、興奮以外の何者でもないよね。それでは皆さん、本当にサヨナラです。私が後悔して無様に命乞いしながら処刑される姿を想像し

てね。

二月十三日・更新

★　★　★　★

その後、このホームページが更新される事はなかった。そして、ある地方都市で十六歳の女子高校生が行方不明になり現在も発見されていない。同級生のコメントが載っていた。

・・あんな真面目で大人しい女の子が家出なんて考えられない。きっと何か事件に巻き込まれたに違いないです・・

「ねえ、優子ちゃん。なかなか言えなかったんだけど・・今日で優子ちゃんとお別れなんだ。」

「えっ・・」

優子と呼ばれた少女は驚いたように立ち止まりもう一人の少女を振り向く。

「どうしてぇ?美奈子ちゃん、引っ越しちゃうのぉ・・」

「ううん・・・でもお別れなの・・」

美奈子は優子の隣に並ぶと思い切り背伸びする。短い丈のセーラー服が捲(まく)れ、美奈子の綺麗なへそが優子の目に入った。一瞬目を奪われた優子が我に返るとミニスカートの裾を翻(ひるがえ)して走っていく美奈子の姿が見えた。

「待ってよぉ、美奈子ちゃん。」

急いで駆け出した優子は交差点で信号を待っている美奈子にようやく追いついた。

「もお、どうして行っちゃうのぉ」

優子は息を切らしながら美奈子を見つめ文句を言った。

「だって優子ちゃんは真面目だから知らない方がいいよ・・」

そう言うと美奈子は優子の姿を見つめた。三つ編みにした長い髪、ようやく胸が膨らみはじめた幼児体型。そして幼い顔立ちということもあってとても美奈子と同じ十五歳には見えなかった。もっとも美奈子自身も実年齢より幼く見られることは日常茶飯事だったが、優子は美奈子よりもさらに幼く見える。

「そんなぁ・・」

優子は訴えるような目で美奈子を見つめている。

「わかりましたぁ・・」

美奈子はため息をつくと優子の顔を笑いながら見つめた。そして耳元に口を近づける。

「えっ教えてくれるのぉ」

「うん、でも今はダメ・・どうしても優子ちゃんが知りたいなら今夜十時に第四公園まで来て。」

「えっ、十時・・・」

優子が聞き返すと美奈子は大きく頷き、信号が青になった交差点を渡り始めた。

・・でも、門限九時だよぉ・・

一人取り残された優子は、遠ざかっていく美奈子の後ろ姿をぼんや

りと眺めていた。

★　★　★　★

散々悩んだ挙げ句、優子は女子寮をこっそりと抜け出し公園に向かった。

「美奈子ちゃん、いないのぉーっ」

公園の門の陰から小さな声で美奈子を呼んでみた優子は人の気配のない夜の公園に逃げ出したいほど恐怖を感じていた。

「美奈子ちゃんーーっ」

恐る恐る公園の中へ入り再び優子が小さな声で呼んだとき・・

「ほんとに来たんだ、優子ちゃん・・」

優子のすぐ近くから声が聞こえ、優子は口に手を当て身体を硬直させていた。

「ごめん、ごめん。びっくりした?」

「当たり前じゃない、もお。こんなに怖い思いしたんだからちゃんと話してよね。」

美奈子は肯くと傍らのベンチに腰掛けた。優子も隣に腰を下ろす。

「私ね、頭がおかしいの・・」

美奈子は突然優子に向かって話し出した。

「えっ・・」

優子は怪訝な顔で美奈子を見つめる。

「私、毎日オナニーしてるの。時間があれば一日に何回も・・・」

「でも、私だってオナニーしてるよ。女の子なら誰でもするんじゃないのぉ・・」

優子は顔を赤らめながら言った。

「優子ちゃんはどんなふうにオナニーしてるの?」

「ど、どんなふうにって・・・」

優子は耳まで真っ赤にし美奈子を見つめた。そんな優子を美奈子も見つめ返す。

「ふ、普通だよぉ。恥ずかしいこと考えながらアソコを擦ったり摘んだり、胸を揉んだりするの・・」

「もっと詳しく教えて、優子ちゃん」

「えっ、だ・だって・・・」

顔を真っ赤にし口ごもる優子は自分を真剣に見つめる美奈子の視線

を外らすように俯くと息を飲みぽつりぽつり話し始めた。

「詳しくって言ったって・・あ・あの・・ベッドに仰向けになって・・」

「服は脱ぐの?」

「えっ・・あっ私いつも着たままだよ・・スカート捲ってパンティの上からアソコ触るの・・」

「それから・・」

「そ・それから・・恥ずかしいこと考えながらクリトリス擦ったり摘んだりして、アソコから恥ずかしい液が出てきたらパンティのわきから指入れて・・アソコやおしりの穴に指入れちゃうの・・・そうすると私気持ちよくなってパンティ穿いたままお漏らししちゃうの・・・」

そこまで言って優子は俯いたまま黙り込んでしまった。小柄な身体が小刻みに震えている。

「ごめん・・泣かないで優子ちゃん・・」

美奈子は優子を抱き締めながら言った。

「美奈子ちゃんだから話したんだよ・・」

優子は顔を上げると潤んだ目で美奈子を見つめた。

「ありがとう、優子ちゃん・・」

美奈子は立ち上がると優子に小型のペンライトを渡した。そして、優子の前で足を開きミニスカートをまくり上げる。優子は目の前に美奈子の白いパンティに包まれた股間を突きつけられ驚いた表情をしている。

「私のマンコ、ライトで見てみて・・」

美奈子は目を瞑ると優子に言った。

「えっ・・でもぉ・・・」

優子はペンライトを手にしたまま戸惑っていた。

「私、優子ちゃんだから見せられるの・・私のマンコを見てもらえば本当の私が分ってもらえるから・・・」

優子は美奈子の言葉に頷きライトを点けると美奈子の前にしゃがみ込み股間を覗き込んだ。白いパンティの股間部に赤い染みが出来、生臭い匂いが優子の鼻に飛び込む。

「美奈子ちゃん、生理中なの・・・」

何気なく呟きパンティを捲った優子は、ライトに照らされた美奈子の性器を見た瞬間息を飲み尻餅をついていた。

「ひ・ひぃー・・」

優子は幽霊でも見たかのように表情を強張らせ、そして失禁していた。優子のパンティを濡らし、地面に水溜まりが出来ていく。

「大丈夫？優子ちゃん・・」

美奈子は慌てて屈み込み、優子の肩を揺すった。優子は小便を垂れ流しながら放心したように震えている。美奈子は優子を仰向けに寝かせると両足を開かせミニスカートを捲り小便が溢れる股間に顔を近付けていった。そして、パンティを捲り小便を顔に浴びながら優子の桜色の幼い性器を左右に拡げ尿道口に口をつけていく。

「んっんっ・・」

美奈子は優子の小便を残さず飲み干すと、そのまま優子の性器を優しく嘗め始めた。

「あっ・・んーっ・・・」

しばらくすると優子の敏感な突起が固く勃起しはじめ膣口から愛液が溢れ出した。そして、仰向けに寝た優子が小さく声を出し始める。

「あっ・あっ・・・」

優子は足を大きく開きはじめ、何時しか腰を高く持ち上げていた。

「あぁーーっ気持ちいいよぉぉーーっ・・」

優子の足の間で美奈子は小便と愛液まみれになりながら優子の性器をなめ続けていた。そして、優子の声が一段と高まった瞬間、美奈子は優子の膣と肛門に指を突き入れた。

「おぉぉーーーっ」

その瞬間、優子は爪先立ちになり腰を高く突き上げると大量に潮を吹き出していた。

・・酷い・・どんな拷問をすれば女の子の大切なマンコをこんなひどい状態に出来るの？・・

改めて美奈子の性器を観察しながら優子は思った。美奈子の外性器はボロボロだった。大陰唇には焼き印が捺され、小陰唇は何をされたのか所々欠損しており、ピアスが幾つも装着されている。クリトリスもそうだ。色が変わり見るからに痛々しい。

「美奈子ちゃん、痛くないの？」

優子は美奈子の性器に目が釘付けになったまま尋ねた。

「痛いよ。でもそれが気持ちいいの・」

美奈子は目を瞑ったまま答えた。優子は美奈子の股間に顔を近付けると舌を出し、血塗れの性器を舐めはじめた。

「ありがとう、優子ちゃん。こんな私のマンコ舐めてくれて・・でももう私、痛めつけていただく以外何も感じなくなっちゃったの・・だから、マンコを処刑して貰う事にしたんだ・・」

「しょ、処刑？・・」

「うん、だからお別れなの・・」

「えっ、えっ、どうしてお別れなの？」

「だって、私、マンコ全部壊してもらって死んじゃうから・・」

優子は絶句していた。性器を破壊されて殺される。それを嬉々として言う美奈子を信じられない顔で見ていた。

「私ね、マンコ壊されて女の子じゃなくなって死ぬんだよ・・私の夢なんだ・・」

「・・・・」

優子は声が出なかった。

「こうして、最後に優子ちゃん会いに来てくれたから、私のクリトリス、記念にあげる・・噛み千切って食べて・・」

美奈子はパンティを脱いで、大声を出してしまわないよう自分の口に詰めた。そして、大きく股を開く。優子は目を見開き戸惑っていたが、美奈子は、早く噛み千切れと目で催促する。優子は恐る恐る美奈子の性器に顔を近付けると、勃起しているクリトリスを噛んだ。美奈子は優子の頭を自分の性器に押し付けるように押さえ付け、早く噛み千切ってくれというように性器を激しく濡らし始めていた。

・・いくよ、美奈子ちゃん・・

優子は思い知り美奈子のクリトリスを噛む。

ブチィッ！！

「おごぉぉぉーーーっ！！！」

美奈子のくぐもった悲鳴が響き、体をビクビクと痙攣させると激しく潮を吹く。美奈子はクリトリスを噛み千切られイッてしまったようだった。そして、優子も美奈子のクリトリスを食い千切り、潮を顔面に浴びて性器を大量に濡らしていた。その優子の様子を見た美奈子は、優子にメモを渡すと笑ってサヨナラと歩いていった。その後、美奈子の姿を見た者はいなかった。

★　★　★　★

優子は悶々とした日々を過ごしていた。普通に自慰するだけでは以前のように気持ち良くならない。

・・マンコ、壊してもらいたい・・

優子は、もうはっきりと自分の気持ちが分かっていた。そして、美奈子が残していったメモを見る。そこにはメールアドレスが一つ書いてあるだけだった。意味も分からず怖かったので今まで触れずにいたが、それが何故か今は自分の救いになる様な気がしていた。

★　★　★　★

優子はメールで送られてきた場所に一人で出向き、拘束されていた。もう、取り返しのつかない事になっているという自覚はあったが、これから自分の性器が破壊されるかと想像するだけで激しく性器を濡らしていた。今なら美奈子の気持ちがよくわかる。

・・アハハ、美奈子ちゃん。私もマンコ壊してもらうよ・・

優子は後ろ手に縛られ開脚されたまま、太い杭の上に吊られていた。これから優子の性器、膣にこの杭が押し込まれ膣が裂かれていく。その優子の膣を破壊する、膣処刑が開始された。股を広げた優子の体が下がってくる。そして、直径３０センチはある太い杭の鋭利な尖端が優子の膣に、ドプッと入っていく。

「はうっ」

思わず声を上げる優子。しかし、優子が興奮して性器を濡らしていられたのはここまでだった。次第に耐え難い激痛が優子の性器を襲う。そして……。

バリッバリッバリッ

「あぎゃあぁぁーーっ!!いだいぃぃーーっ!!」

絶叫する優子の膣が裂け、血が噴き出すと同時に小便と大便も噴き出していた。

「あびゃびゃびゃびゃびゃ」

優子の膣は裂け、もう肛門と繋がってしまっている。そして、ピクピクと痙攣する優子の膣から杭が抜かれ、残った子宮に火薬が詰められる。子宮一杯に火薬を詰められた優子の眼前で導火線に火が点けられた。

「ううううっ」

涙で滲む目でそれを見ていた優子は、次に自分に訪れる子宮を爆破される恐怖に半狂乱になっていた。

「ゆるじでぐだぢゃいぃぃーーっだれがだじげでぇぇーーっ!!」

この期に及んで無様に命乞いする優子だったが、勿論そんな事が聞き入れられる筈もなく。導火線はどんどん短くなっていく。

ボンッ!!

鈍い音が響き優子の下腹部が一瞬大きく膨らんだ。そして、間をおいて優子の絶叫が響き渡る。

「はっびゃぁぁーーーーっ!!」

優子の股間の穴から肉片となった子宮がボトボトと落ち、性器破壊が終了し用済みとなった優子は、そのまま焼却炉に投げ込まれた。

処刑ドライブ

私は運転していた赤い軽自動車を路肩に停め助手席のゆかりを確認した。アニメの全頭マスクを被ったゆかりは可愛く微笑んでいるように見えるが、小さく呻き声を上げている。黒いセーラー服を着た中学生のゆかりの両腕は背中に回され高手後手にきつく拘束され、動かす事は出来ない。黒のプリーツスカートの下は黒いパンティストッキングを穿き、その上に濃紺のローカットのブルマを穿いている。セーラー服のスカートの下にブルマ。中学生のゆかりに良く似合っていた。一見、ゆかりは腕を縛られている以外は普通に助手席に座っているように見えるが、ゆかりはすでに私に処刑を執行されており、もう絶命するのも時間の問題だった。私はゆかりを最後のドライブに連れていってあげているのだ。

全頭マスクの下のゆかりの顔は目隠しされ口には開口具が装着され口は閉じられずよだれを垂れ流し、鼻にはフックが取り付けられ鼻の穴が引きちぎれるほど引っ張り上げられている。その鼻の穴にはチェーンが入れられ、開口された口から出され重りが下げられている。さらに舌にも針が突き通され重りが下げられていた。そして、セーラー服の下では乳首に十字に針が貫通されたうえローターがテープで固定され常に敏感な乳首に振動が与えられている。下着の下では一番苦しいと云われるブランデーが三リッターも浣腸され、さらに肛門から直径5センチのアナルボールが五個入れられたうえアナル栓が装着され肛門を封印されていた。ゆかりは腸内に直接ブランデーを注入され、焼け付く激痛に苦しんでいるが、性器はさらに過酷な状態になっている。ゆかりの子宮内には塩酸を固めた直径一センチ程度のボールが五十個近く押し込められ、その塩酸ボールが溶けるのを補助するため、ゆかりの尿道から子宮口までカテーテルでつなげられゆかり自身の小便が子宮の中に入るようになっていた。

そして、溶けた塩酸や小便が子宮から漏れるのを防ぐため、ゆかりの膣は溶かされたハンダを流し込まれ埋め固められたうえ小陰唇を糸できつく何重にも縫い合わされていた。かなり時間が経過しているので、ゆかりの子宮内はおそらく大量の塩酸と小便で満たされている事だろう。それだけではない。ゆかりの敏感なクリトリスには針が何本も突き刺され、会陰に突き刺した針と電線でつなぎ、ゆかりの性器に電流を流されていた。

「・・おごっ・おごぉ・・・・」

子宮を溶かされる激痛と性器に通電される激痛にゆかりが号泣しているのが分かる。しかし、すぐにゆかりは絶命出来ない。ゆっくりとゆかりは苦しみぬいて苦痛と絶望の中絶命するのだ。私のこのドライブはゆかりが絶命するまで続く。なるべく長くゆかりを痛めつけ苦しめるのが私の狙いだった。薄めた塩酸のうえ、ゆかり自身の小便でさらに薄められるのですぐにゆかりの子宮が消滅するわけではなかった。とはいえ、ゆかりの子宮が塩酸で灼かれているのは間違いなく、その苦痛は凄まじいものであると想像できた。

「・おぉぉぉ・・おぉぉ・・・・」

私は泣き続けるゆかりのセーラー服を捲り上げると、ゆかりの乳首に取り付けてあったローターを外した。考えてみればゆかりに快感など与える必要はない。ゆかりには苦痛だけ与え絶望に沈めるのだ。ほとんど膨らみのない胸で桜色の乳首が勃起している。私はそのゆかりの右乳首に吸っていた煙草の火をぎゅっと押し付けた。

「おっごぉぉぉーーーーーーーー」

塞がれた口でゆかりが絶叫する。頭部・首・胸部・腹部・脚、全て

車のシートに丈夫な革のベルトで固定されてしまっているゆかりに逃れる術はない。さらに私はジッポーを取り出すと火を点けゆかりの乳首を燃やし始めた。乳首を貫通している針が真っ赤になり、ゆかりの乳首を中からも焼いていく。ゆかりの悲痛な声が心地よい。しかしやはり、ゆかりを痛めつけるのは性器に限る。今も酷い状態になっているゆかりの性器だが、私はさらにゆかりの性器を痛めつける為、ゆかりのブルマの中に性器に当たるように小型のアイロンを置きコンバーターのコンセントに接続し、温度を最強に設定した。暫くしてゆかりの絶叫が車内に響く。私はアニメマスクを捲ってみると、ゆかりの顔は目隠しから大量の涙が滲み出て、鼻水とよだれで無様に汚れていた。

・・良い顔だ、ゆかり・・

私はゆかりのその無様な顔を何枚も撮影すると、またアニメマスクを被せた。この状態ならゆかりが絶命するのも、もうそれほど時間はかからないだろう。私はモニターを見た。ゆかりに取り付けてある心電図だ。これがフラットになるまで、あと何キロくらい走れるだろうか。私はゆかりとの最後のドライブを楽しんでいた。

雫石八千代の最後

八千代は自分がごく普通の女の子だと思っていた。しかし、今では平凡な毎日を過ごす自分に我慢が出来ずにいる。
きっかけは高校入学時からはじめたインターネット。当初、電子メールと学問的な情報収集に有効と思い始めたインターネットだったが、偶然覗いてしまったＨＰが全ての始まりであった。
そこは、拘束した女の子を痛めつけ泣き叫ぶ姿を楽しんでいる、女の子の人格をまるで無視したサイトだった。女の子が辱められ痛めつけられ壊されていく残虐小説や泣きながら処刑されている残酷イラスト等が展示され、なかでも女の子が本当に痛めつけられている実写のデジタル画像に八千代は激しいショックを受けた。
ＳＭという言葉と性癖については八千代も多少知っていたが、その画像はＳＭというよりも拷問に近いと八千代は思った。拘束され胸に無数の針を突き刺された女の子。さらに衝撃だったのが乳首を釘で板に打ち付けられ涙を流す女の子だった。正面からバストアップで撮影されており、女の子は目隠しされ口にもガムテープが何重にも貼られている。その目隠しから涙が滲み出て、おそらく塞がれた口で絶叫しているのだろう。顔が酷く歪んでいる。右の乳首は板に完全に釘で固定されており、左の乳首も釘の半分が板に打ち付けられていた。

・・こんな可愛い女の子が、こんな酷い目にあっている・・

八千代は鼓動が早くなり目眩をおこしそうになっていた。そして、八千代が息を呑んだ一連の写真。それは、開脚され拘束された女の子の性器がクリップで拡げられ、女の子にとって大切な性器が針山にされている写真だった。目隠しされ猿轡を掛けられた女の子は顔

中、涙と鼻水とよだれで汚している。八千代は激しいショックを受けながらも無意識に次の写真を表示させていた。

・・本当に刺されてる・・

八千代は針山にされた少女の性器のアップの写真を見ているうちに、知らず知らず右手はスカートの中に入り自分の性器を激しく擦っていた。

それ以来、このホームページに毎日アクセスするうちに八千代は次第に眠っていた本当の自分が目覚めてくるのを感じていた。そして、本当の自分を取り戻した八千代は、逆に今の生活が苦痛以外の何者でもなくなっていた。

・・お漏らししてみる、八千代・・

下校途中、八千代は昨夜思いついた考えを実行しようとしていた。白い上着に紺の襟、プリーツの入った紺のミニスカートに同じく紺のオーバーニーソックス。清楚な制服に身を包んだ八千代は歩きながら放尿しようとしていた。制服姿の女子高校生が歩きながら放尿する。八千代は自分のその惨めな姿を想像し興奮を抑えられなかった。

・・おしっこ漏らすのよ、八千代・・

八千代は立ち止まると軽く足を広げ下腹部に力を入れた。

・・あっ・・

自分の尿道から小便が排出されだしたのを感じた八千代は再び歩き出す。

・・あっあっあっ・・

生暖かい小便がパンティを濡らし、太ももの内側を伝いニーソックスも濡らしていくにつれ八千代の割れ目は小便以外の液体も同時に溢れさせていた。

・・恥ずかしい液、出てる・・

八千代は二つの穴から液を漏らしながら寮の自分の部屋に入った。そして、そのままバスルームへ直行する。

・・残りのおしっこ全部出すのよ、八千代・・

八千代はバスルームで制服姿のまま両手を上げ洗面器を跨ぎ足を大きく開くと下腹部に力を込めた。

「あっ・・出ます・・・」

小さく呟く八千代の股間から勢いよく小便が飛び出し足下の洗面器に溜まっていく。

「あっあっあっあっ・・・」

八千代は制服姿のまま小便を漏らし極度に興奮していた。そして、昨夜、意を決して送信したメールを思い出す。

『 ドミネーター様

厳重に拘束され泣き叫ぶ女の子の性器を形すら残らないほど容赦なく残虐に壊していくのは最高に贅沢な楽しみだと思います。よろし

ければ私の性器を御提供いたしますので存分にお楽しみください。
私の夢は、目隠しされ口も塞がれ両腕は後ろ手にきつく縛りあげられてしまい、足は大きく開かされ股間を無防備に晒したまま腰と太ももも、特に太ももは何カ所も思い切り深く食い込む拘束具で厳重に固定され、女の子の一番大切で敏感な性器を辱め痛めつけ壊していただくことなんです。私、自分の性器が無様に壊されていく事を想像するだけで恥ずかしい液が溢れてしまいます。そして、性器を血塗れにされ泣き叫ぶ自分の姿を想像しながらオナニーしているんです。

こんな私ですので御遠慮なく思う存分、本当に私の性器の全てを原型すらなくなるほど徹底的に容赦なく壊していただければ嬉しいです。私に女の子に生まれたことを呪うほどの苦痛を与えてください。そして、性器を壊していただいた後はそのまま性器から串刺しにして私が絶命する姿をお楽しみください。命乞いする私を何度も何度も何度も残酷に串刺しにし身体を貫かれる苦しみを徹底的に味わわせてください。そして、最後は口から穂先が突き出るまで容赦なく貫いていただき、絶命寸前の私の顔におしっこを浴びせていただきたいです。

性器を徹底的に壊され、身体の中を槍でぐちゃぐちゃにされ、おしっこを浴びながら死んでいく無様で惨めな自分の姿を想像した時、私、興奮してお漏らししてしまいました。

私は現在十五歳、高校生、処女です。

身長一五二センチ、バスト六九、ウエスト五六、ヒップ七三のサイズで、顔が童顔のため小学生と間違われてしまいます。本当にロリータであればもっと楽しんでいただけたと思いますが、性的な経験は自慰以外ありませんし、アソコの毛も生えておりませんのでどうか御容赦ください。

それではよろしくお願い致します。

××県〇〇市在住

桜桃女子高等学校一年　雫石八千代

追伸・私の希望ばかり書いてしまいましたが、もちろん私の希望など無視してくださってかまいません。どうぞ、お好きなように私の性器と女の子の身体を御利用しお楽しみください。

』

放尿を終えた八千代は洗面器に溜まった自分の小便を見つめた。

・・舐めなさい、八千代・・

八千代は跪き洗面器に顔を埋め自分の小便を舐め始めた。

★
★
★
★

八千代の通っていた学校で、八千代の凄惨な遺体が発見されたのはそれから僅か一週間後だった。

八千代の遺体は校庭の外れの銀杏の木から逆さに吊されていた。太ももの付け根に食い込む黒いサイハイソックス以外全裸にされた八千代の身体は大きく開脚され性器部分を晒す状態で吊され、両腕と頭部は切断されていた。頭部がないこの死体が八千代であると判明したのは下腹部に焼き印された「やちよ」という文字と同じ名前の女子が学校も欠席し行方不明になっており、ＤＮＡ鑑定の結果この遺体が八千代であると確認されたのであった。その後、両腕と頭部は八千代がまだ息があるうちに切断されたものと判明し、八千代の死因はその性器部に加えられた残虐な破壊行為によるショックと失血はもちろんだが、最終的にトドメを刺されたのは首を切断された事と推測された。八千代の性器は全てが破壊されていた。外性器はクリトリス、小陰唇とも切除され尿道から太さ一センチもあるニー

ドルが突き刺され膀胱を串刺しにした後八千代の下腹部を突き破りその先端を見せている。股間の中心では膣壁が抉られたように無くなっておりポッカリと穴が開いていた。そして、その奥にあるべき子宮までも八千代の身体の中から無くなっていた。八千代は生きたまま残酷に容赦なく性器を破壊されていき、最後に子宮まで摘出されてしまったのだ。八千代の直接の死因は頭部切断に間違いないが、その他にも八千代の身体には執拗に残虐行為が加えられていた。身体全体、特に股間部分と太もも内側に顕著に残る蚯蚓腫れは八千代が鞭による激しい打撃を受けていた証拠であり、ほとんど膨らみのない八千代の胸は十字に切り裂かれ乳首は両方とも抉り取られていた。そして、恥丘には太い五寸釘が何本も打ち込まれ大陰唇や膣前庭窟には無数の針が根本まで突き刺されている。肛門も例外ではなく直径五センチ程もある木製の杭が深く打ち込まれ直腸を破壊されており肛門括約筋にも太い針がぐるりと突き刺されていた。その後、摘出されていたのは子宮だけではないと判明した。八千代の卵巣も二つとも摘出されていた。いや、摘出などという甘いものではない。股間から何かを突きいれられ抜き取られたのだ。

この八千代の惨殺事件は、その猟奇的な様相から前代未聞の事件として歴史に残る事となるが、八千代の頭部は、捜査過程で発見された腕とは別に現在も発見されていない。何故、頭部が切断され持ち去られたのか、その動機も当然不明だ。身元を隠したいなら、そもそもあんな所に遺体を吊るさなければいい。何か理由があっての事だと思うが、それは犯人が確保されるまで待たなければならないだろう。

★　★　★　★

ドミネーターと呼ばれる男の部屋にいくつかの硝子瓶が並んでいる。

それぞれの硝子瓶にはラベルが貼られていた。子宮、卵巣、膣、小陰唇、クリトリス。そして最後の大きな硝子瓶には、八千代と書かれたラベルが貼られていた。ホルマリン溶液の中に漬けられた八千代の頭部は、満足したように最高の笑顔を浮かべていた。

公開処刑執行　前編

優子は震えながら舞台の中央に進み出た。それと同時に舞台の照明が落とされ強力なスポットライトが優子に浴びせられる。大勢の観客の視線が自分に集中しているのがわかる。

・・眩しい・・

優子は目を瞑りスポットライトの光の中、両手を高く頭上に上げ足を大きく開いた。特殊な素材の白い長袖ハイネックのレオタードは、優子の身体にピタリとフィットし、まるで何も身に付けていないかのように優子の小さな胸の膨らみ、なだらかな恥丘から股間の裂け目まで忠実に再現している。そして、太股に食い込む白いオーバーニーソックスがさらに優子の身体のまだ未成熟な女の子らしさを強調し、これから処刑される優子の哀れさを引き立てていた。

・・今ならまだ間に合うよ、優子・・

胸の膨らみと股間の割れ目。もっとも女の子らしく、女の子にとって大切で恥ずかしい部分を自ら強調し女の子としての価値を判断していただく姿勢を執りながら優子は自分自身に語りかけた。震え続ける優子の胸の膨らみの先端では二つの突起がこれ以上ないほど固く勃起し、大きく開いた股間の中心では恥ずかしい染みが広がりつつあった。

・・こんなに怖いのに嬉しいの、優子。恥ずかしい液、いっぱい出てるよ・・

優子は乳首以上に痛いほど固く勃起するクリトリスとだらしなく口を開け愛液を垂れ流す膣口を感じ呼吸が早くなってきた。

「あっ・・・」

口を半開きにし顔を上気させる優子の腕が突然乱暴に掴まれ、優子は一瞬身体を硬直させた。しかし、すぐに力を抜いた優子の両腕は背中にまわされきつく縛り付けられていく。と同時に優子の目にも黒い布が巻き付けられ、首には黒い革の頑丈な首輪が付けられ天井からのロープで留められた。

・・もう後戻りできないよ、覚悟するのよ優子・・

息を荒くする優子の背後に巨大な拘束台が用意され、まず優子の腰に拘束台から伸びる拘束具が取り付けられる。冷たい拘束具の鉄の感触に優子の身体は大きく震えはじめる。

・・怖い、やっぱり怖いよ・・

ぶるぶると恐怖に震える優子の気持ちなどまるで関係なく、ニーソックスに包まれた優子の形の良い太ももがまるでモノを扱うかのように乱暴に掴まれさらに大きく開かされていく。

「あぁ、怖いぃーっ」

力尽くで太ももを開かされ、足が宙に浮いた優子は恐怖の悲鳴を上げる。

「あっあっあっあっ・・・」

恐怖で歯も合せられぬほど震えはじめた優子の太ももはこれ以上ないほど無理矢理開かされ、そのまま太ももの付け根に拘束具が巻かれきつく固定される。そして、さらに優子の太ももは拘束具が二カ所に取り付けられ、優子の柔らかな太ももに容赦なく食い込むほど厳重に拘束された。

・・怖い、怖いよぅ・・

女の子の大切な性器をまるで無防備に晒され優子は、自分を処刑するための準備が着実に調っていくのを感じ、とうとう小さな声で泣き出した。しかし、泣き続ける優子のふくらはぎと足首にも拘束具が取り付けられ、優子の下半身はもはや優子の意志では動かせないほど固く厳重に拘束されていく。

「あああああ・・・・」

黒い目隠しから涙が滲み出し泣き続ける優子の両腕を拘束しているロープが腰の拘束具に結びつけられ、優子は胸を突き出し足を限界まで開かされたまま完全に身体を固定されてしまった。目隠しされ、両腕を後ろ手に縛られ、両足を大きく開かされたまま拘束され泣き続けている優子の哀れな姿がスポットライトの中浮かび上がる。

・・動けない、もう私、動けないよぅ・・

優子はあまりの恐怖で失神しそうになっていた。すると、その時頭上に設置されたスピーカーから女の子の声が流れはじめた。

「本日、処刑していただく神森優子と申します。十五歳です。」

それは優子がこの処刑が執行される舞台に上がる前に自分の意思で

吹き込んだテープだった。

「女の子の象徴といえる性器を壊して処刑していただくのが私の夢でした。私の性器、まだオナニーしか経験ありませんので、何も知らない女の子の性器が痛めつけられ残酷に壊されていく様子をお楽しみいただけると思います。」

スピーカーから流れる優子の声は、これから処刑していただく興奮のため上擦っていた。

「ここでこれから私の性器が処刑前に受ける拷問を簡単に御紹介致します。まず、性器への鞭打ちから始まり、針責め、再び鞭打ち、そして尿道責めと続きます。この尿道責めの際に私の尿道と膀胱は壊していただく予定ですのでお見逃しなくお楽しみください。」

・・い、いや、いやぁ・・

現実に処刑されるために厳重に拘束されてしまった優子は、すでに興奮よりも恐怖に支配されただ泣きながら自分の声を聞いていた。

「次にクリトリス責めに移ります。女の子の大切で敏感な突起を様々な方法で集中的に痛めつけ壊していきます。私の苦しむ姿も存分にお楽しみいただけると思います。」

・・やめて、もう言わないでぇ・・

優子は拘束から逃れようと身体を必死に動かしたが、上半身が僅かに動いただけで下半身はしっかり固定され微動だにしなかった。

「そして、最後に私の僅かに残った希望を残酷に奪うため膣と子宮、

そして小陰唇などの外性器を含めた私の性器全てを原型すらなくなるほど徹底的に容赦なく壊していただきます。拘束された女の子が泣き叫びながら大切な性器を跡形もなく壊されていく無様な様子はきっと御満足いただけることと思います。そして、性器を壊され瀕死の状態で拘束されている私の無様な姿をしばらく楽しんでいただいた後、最後の処刑が執行されます。」

優子は興奮した口調で話す自分の声を聞きながら恐怖で失禁していた。

「私は壊された性器にさらに鉄串を突き立てられ、そのまま身体を縦に貫かれます。もちろん、存分に苦痛を与えるためゆっくりと私の身体を性器から口まで串刺しにしていただきます。凄まじい苦しみと死の恐怖に絶叫しながら残酷に処刑されていく私の無様な姿をお楽しみください。そして性器から口まで貫いていただいた後、私がまだ絶命していない場合、もう一本の鉄串が私の性器から再び打ち込まれます。この作業は女の子の私を死ぬまで徹底的に痛めつけ苦しめる事が目的ですので、私が完全に絶命するまで何本でも容赦なく打ち込まれます。」

・・絶命するまで・・

優子は自分自身から残酷な自分の最後をあらためて告げられ身体を硬直させ震えていた。処刑されるため自ら身体を厳重に拘束されてしまった優子には、もはやその残酷な運命から逃げる術はない。

「それでは、女の子の大切な性器を徹底的に容赦なく壊され、泣き叫び苦しみ後悔し絶望しながら絶命する私の無様で哀れな姿をごゆっくり最後までお楽しみください。」

「やめてぇっ許してくださいぃーーっ」

とうとう優子は絶叫し大声で泣き出した。目隠しをされ両腕を後ろ手に縛られ足を大きく開いたまま宙に浮いた形で完全に拘束された優子が大声で泣く哀れな姿がスポットライトの光の中浮かび上がる。これから優子は残された僅かな時間を凄まじい苦痛に苦しみながら処刑されていく。

・・こんな怖いことを私夢見ていたの・・

優子は自分が何の抵抗も出来ない状態に拘束され初めて気が付き後悔した。

「助けてくださいぃ、処刑は怖いですぅーーっ」

涙と鼻水で顔面を汚し、優子は泣きながら哀願する。しかし、目隠しされている優子には判らなかったが、すでに処刑は開始されていた。

公開処刑執行　中編

白い仮面を付けた黒尽くめの人物が鞭を手に優子の前に立っている。脚を開かされた優子の股間の中心に狙いをつけ鞭を構えた。

「あっあっあっ・・・」

周囲の雰囲気が変化したことに敏感に気付いた優子は恐怖で口が動かなくなり泣き声も小さくなった。優子は無防備に晒している自分の性器にこれからどれほどの苦痛が与えられるのか恐怖のため想像すら出来なかった。

・・お願い、お願い・これはオナニーする時のいつもの夢想でありますように・・

夢であるように願いながら優子は腰を引こうとした。しかし、優子の腰は当然固定されたまま動かず、優子の耳にはその儚い願いを破る鋭く凶悪な風切り音が聞こえた。そして、次の瞬間。

「あぁーーーーーーーーーーっ」

敏感で柔らかな性器に激しく鞭を叩き込まれた優子は激痛に絶叫し、その鞭打たれた性器からはレオタードを突き抜け透明な液体が勢いよく溢れ出す。優子は経験したことのない凄まじい痛みに再び無様に失禁していた。しかし、優子自身は性器を襲った耐え難い痛みに自分が失禁したことさえ気付かずに大量の涙と鼻水を流し泣き続けていた。

「痛いぃっ、痛いよぅ・・」

泣きながら小便を漏らし続ける優子の性器に、間髪を入れず再び鋭い音を立てて鞭が叩き込まれる。

「あぁーーーーーーーーーっ」

鞭の打撃音と優子の悲鳴が響き渡り、小便の飛沫が辺りに飛び散った。

「やめてください、許してください・・」

泣きながら震える声で哀願する優子の性器に容赦なく鞭が思い切り叩き込まれていく。性器に鞭が叩き込まれる度に優子は絶叫し顔面は溢れる涙と鼻水で無様に汚れていた。そして、鞭打ち開始から十分も経たないうちに優子の白いレオタードの股間部は赤く変色しはじめた。

「痛い、痛い、痛いよぉーーーっ・・」

号泣する優子の性器はすでに激しい鞭打ちで皮膚が破れレオタードを染めるほど無残に出血している。もし優子がレオタードを着用していなければクリトリスや小陰唇など外性器が簡単に千切れてしまうほどの激しい鞭の打撃を優子は受けていた。

「あぁーーーーーーーーーーっ」

性器から出血し泣き叫ぶ優子の赤く染まる股間に鞭は容赦なく今まで以上に激しく叩き込まれ、情け容赦のない激しい打撃音が連続で響き渡る。

「もう性器は許してくださいぃぃ・・」

優子は泣きながら震える声で哀願する。

「他の所を鞭で打ってくださいぃ・・もう性器は・あぁーーーーーーーっ」

優子の哀願など何の意味も成さず、さらに激しく優子の性器に鞭が叩き込まれていく。優子は鞭で性器を打たれる度に、性器が抉り取られるような恐怖と激痛に襲われていた。

・・痛い、痛いよぉ・鞭でこんなに苦しくて辛いのに、処刑されるときは私どうなっちゃうの?・・

優子が想像すら出来ない凄まじい苦痛のなか処刑されていくのは僅か数時間後。それは優子がどんなに泣き叫んで哀願しても変更されることのない残酷な事実だった。

正確に激しく性器を鞭打たれ号泣していた優子は、自分の性器に嵐のように叩き込まれていた鞭の動きが止まったのを感じた。と思ったのも束の間、今度は自分の膣口と尿道の間に耐え難い痛みが走り抜けた。

「あぁーーーーーーーーーっ」

絶叫する優子の性器に無残にも針が突き立てられていた。二センチの円筒形をした柄の先に三センチ程の針が突き出た拷問用ニードルは、容易に抜くことが出来ぬよう先端に釣り針のようなかえしが付いていた。その凶悪な針がレオタードに包まれた優子の股間にゆっくりと根元まで深く刺されていく。

「ひぃぃーーーーーーーーっ」

鞭とは違う性器内部の焼け付く痛みに優子は悲鳴を上げ続け、顔面は夥しい涙と鼻水で汚れていた。そして、瞬く間に優子の股間に百本以上の針が突き刺され、優子の性器は無様な針山と化していく。その容赦のない針責めに優子は失神寸前だった。しかし、皮肉にも性器に突き刺されていく針の凄まじい激痛が優子の意識を再び覚醒させる。優子は休みなく拷問を受け続けた場合、失神することすら出来ないという事実に気が付いた。

・・私、このまま死ぬまで苦しみ続けるんだ・・

優子は今更ながらその恐ろしい事実に気が狂いそうだった。そして、この後自分の性器に加えられる拷問を思い出した時、思わず優子は絶叫していた。

「許してくださいっ鞭で叩かないでぇ・・」

優子は性器に突き立てられた無数の針の激痛に耐えながら、次に自分の性器に加えられる恐ろしい拷問に恐怖し泣きながら必死に哀願した。しかし、そんな優子の口に優子のパンティが押し込められ、その上から布が巻かれていく。目も口も塞がれ拘束されている優子はもはや女の子の形をしたモノといってよかった。哀願することさえ出来なくなった優子もはっきりと自分がモノとして扱われていることを認識した。

・・私、もう絶対助からない・・

優子は自分の最後がすぐそこまで近付いてきていることを感じ、塞

がれた口で必死に叫び続けていた。涙と鼻水も止まることなく流れ続けている。そんな優子の股間は恥骨の下を底辺に肛門を頂点にした三角形の形に無数の針がびっしりと突き刺されていた。そして、優子の耳に先程と同じ凶悪な風切り音が聞こえた。

「おぉぉーーーーーーーーーーっ」

猿轡をされた優子の口から凄まじい絶叫が漏れ、鞭を叩き込まれた性器からは血が飛び散った。そして、悲痛な叫び声をあげる優子の性器に鞭はさらに激しく連続して叩き込まれていく。

・・誰かぁ助けてぇーっ・・

無数の針を刺されたままの性器を鞭打たれ優子はとうとう大便まで漏らしはじめた。悪臭を放つ固形物が優子の股間から床にぼとぼとこぼれ落ちる。優子のその無様な姿は、優子が凄まじい苦痛を受けていることの証明だった。鞭打たれる度、突き立てられた針はさらに深く優子の性器を抉り傷つけ、夥しい涙と鼻水とよだれを垂れ流す優子は塞がれた口から言葉にならない悲鳴を上げ続けている。そして、針山にされた性器を鞭打たれるという凄まじい拷問を三十分以上受け続けた優子の股間から針が抜かれはじめた。

「おっおぉーーーーっ」

針は抜かれる際に新たに優子の性器を傷つけていく。そして、ゆっくりと全ての針が抜かれた後、優子のレオタードの股間部分が切り裂かれ性器が露出させられる。それはこれから行なわれる性器破壊の目標を露に晒すためだった。

公開処刑執行　後編

レオタードの下から現われた優子の股間はすでに血と小便と大便、そして愛液が混ざりあい酷い状態に変わり果てている。しかし優子はこれからさらに凄まじい苦痛の中、女の子の大切な性器を形すら残らないほど徹底的に容赦なく壊され処刑されていく運命だった。まず優子の尿道を破壊するため、導尿に使用するカテーテルの三倍程太さのある尿道管が用意された。この尿道管の先端には放射状に鋭い刃が取り付けられ表面には無数のガラス片が埋め込まれており、挿入しただけで優子の尿道は二度と使用することが出来ないようずたずたに切り裂かれていく。

・・あぁ・おしっこの穴に何か入ってくる?・・

優子は自分の尿道に挿入されようとしている尿道管に気付き恐怖した。

・・私のおしっこの穴、壊されるんだ・・

優子は猿轡をかけられた口で必死に哀願したが、それは無様な呻き声にしかならなかった。そんな哀れな優子の尿道に躊躇なく尿道管がゆっくりと差し込まれていく。

「おっ・おぉぉーーーーーーーっ」

今までの拷問と比較にならない凄まじい激痛に優子は塞がれた口で絶叫した。その優子の哀れな姿を楽しむため膀胱まで突き入れられ

た尿道管は一旦抜かれ、その後何度も何度も繰り返し優子の尿道に差し込まれ抜かれていく。その度優子は発狂したように絶叫した。そして、優子の悲鳴に力がなくなってきた頃ようやくこの残酷な作業が停止され、尿道管は優子の尿道に差し込まれたまま次の膀胱を破壊するための用意がはじめられた。ずたずたに切り裂かれた優子の尿道からは血が滴り、目と口を塞がれた優子が号泣しているのがわかる。

・・助けて、誰か助けてぇ・・

夥しい涙と鼻水とよだれで顔面を汚し泣き続ける優子の尿道から突き出た尿道管に注入器が取り付けられ、そこから沸騰した熱湯が優子の膀胱に容赦なく注入される。

「おぉぉぉーーーーーーーーーーっ」

優子は何が起こったのか分らなかった。自分の身体の中で何かが爆発したようなとても耐えられない痛みが優子を襲う。注入された熱湯は冷める前にすぐ抜かれ、再びぐらぐらと沸騰した熱湯が優子の膀胱に注入される。そして、この膀胱破壊の最中、優子のクリトリスは包皮を剥かれ強力な媚薬が塗られ強制的に勃起させられていた。優子の意思とは無関係に固く勃起したクリトリスの頂点に細く長い針が当てられる。そして、ゆっくりと優子のクリトリスに突き立てられていった。

・・いやぁーーっもう許してぇぇ・・

針は優子に苦痛を与えるためゆっくりと身体の奥深く突き刺されていく。そして、二度と抜けないよう根元まで深く押し込まれる。それでも勃起したままの優子のクリトリスに針は続けて突き刺され、

優子の敏感な突起は針を刺す場所がなくなるまで無数の針で貫かれていった。そして、次にカッターナイフが当てられ優子の勃起したクリトリスは縦に切り裂かれはじめた。

「おぁーーーーーーーっ」

ゆっくりと根元まで切り裂かれていくクリトリスの想像を絶する痛みに優子は発狂したように絶叫した。その凄まじい痛みから優子は自分の性器が確実に壊されているという事だけは自覚できた。

・・私、性器壊されてる・・

恐怖と苦痛で発狂寸前の優子の縦に割られ血を流すクリトリスが今度はクランプで挟まれ締め付けられていく。クランプのネジが回されるにつれ優子のクリトリスは無残に潰れていった。

「おっおっおっおっ・・・」

悲しげに声を漏らす優子の膣口に表面がやすり状に加工された直径五センチ程の鉄棒が無理矢理挿入されていく。すでに優子は生まれて初めて自分の性器に入ってきたものが、その性器を壊すための処刑具だということさえ気付かぬほど何も考えられなくなっていた。子宮手前まで挿入された鉄棒は高速に回転をはじめ、優子の一度も使われなかった膣内壁を無残に削り取っていく。絶叫する優子の股間から血と肉片が飛び散り、いよいよ優子の最後が近付いたことを感じさせた。

鉄棒が抜かれぽっかりと空いた穴からチューブが入れられ先端が子宮口に挿入されると、チューブから子宮内に直径一センチ程のガラス球がどんどん注入されていく。たちまち優子の子宮はガラス球で一杯になり、それでも後から後から押し込まれるガラス球のためと

うとうガラス球は子宮内で割れ優子の子宮に突き刺さる。そして、ガラス球内に入れられていた塩酸が優子の子宮を内部から溶かしはじめた。

優子はまるで人間のものとは思えない絶叫を上げ続けている。子宮を破壊される。優子の公開処刑もクライマックスを迎え、大いに盛り上がっていた。優子の膣のあった穴から、ドロドロに溶けた子宮が流れ落ちていく。そして、最後の処刑が執行される。優子の大きく開いた股間の中心にステージの下からニードルが突き出てくると観客席が大いに盛り上がる。

「うっ、うっ、うっ、うっ」

号泣する優子の膣にニードルが突き刺さっていく。その冷たいニードルの感触に、自分の最後がすぐそこまで来ている事に気付いた優子は更に激しく号泣する。このステージ下から出ているニードルは観客席のボタンと連動していて、ボタンを押している観客が多いと早くなり、ボタンから指を離した観客が多くなると速度がゆっくりになるという仕掛けになっていた。今は早く優子を串刺しにしたいという観客が多いらしく、かなりの速度でニードルが伸び、優子の膣に突き刺さっていく。そして、ステージ横の巨大なモニターに優子の体とニードルが映し出された。透過線でニードルが優子のどこまで刺さっているのか一目瞭然で分かるようになっている。今、ニードルの先端は優子の溶け続けている子宮の中にあるのが確認出来る。すると急にニードルの動きが早くなり優子の子宮を串刺しにした。

「ひぎぃぃぃぃーーーっ！」

悲鳴を上げる優子の姿を楽しみながらボタンを操作する観客たち。モニターには優子の胃に迫るニードルが映っていた。

「もご、もご、もごぉぉぉーーーっ！」

ニードルのスピードが上がり優子の食道まで先端が突き進んできた。優子の口からニードルが突き出すように、優子の頭が捕まれ後ろに倒され猿轡が外される。口からニードルが突き出す瞬間が一番興奮する。それを楽しむ為にニードルのスピードが落ちていく。そして、ゆっくりと優子を串刺しにしていくニードルの先端がついに優子の口から顔を出す。

「ゴッパァァーーーッ！！」

優子が口から激しく血を吐き出しニードルがどんどん突き出てくる。優子は性器から口まで完全に串刺しにされ、ビクンビクンと体を痙攣させていた。しかし、優子に取り付けられたバイタルチェックの機器はまだ優子が生きている事を示している為、２本目のニードルがステージから突き出てくる。そして、優子は残酷に性器から口まで、また串刺しにされた。２本のニードルで串刺しにされた優子のバイタルサインはまだ消えていない。観客席から早く３本目を突き刺せと声が上がっていた。２本も串刺しにされて生きている女は珍しいので多少準備に手間取ったが３本目のニードルが突き出てきた。そして、それは優子の性器ではなく肛門に狙いを付けていた。観客席からも期待の声が上がる。

「今度は尻の穴からか　マンコもいいが、こっちも捨て難いな」

「ククク、ケツの穴か　これで、この女、死んだな」

「マンコとお尻、両方串刺しにされるなんて最高じゃない　もう、ボタン押してるのに早く進まないじゃない　誰よ、押してないのは

？」

様々な声が上がるなか優子は肛門から串刺しにされ口からニードルが突き出した。これで優子が絶命したと誰もが思っていたが、優子はまだ辛うじて生きていた。驚愕する観客に見守る中、４本目のニードルが突き出てきて優子の尿道に突き刺さった。そして、細い尿道を切り裂きながら優子の体を串刺しにしていく。

ズンッ！

優子の口から４本のニードルが突き出ていた。

ピィーーーッ

そして、優子のバイタルサインがフラットになり、優子は完全に絶命していた。

ゆかりの性器処刑・鞭編

ゆかりの性器処刑・鞭編

濃紺のスクール水着に黒いパンティストッキングを穿いたゆかりは、パンティストッキングの上にさらに太ももの付け根近くまである黒いサイハイソックスを穿いていた。

「両手を上げ足を開きなさい。」

ゆかりに命令が告げられ、ゆかりは命令通り頭上に手を挙げ足を開いた。

「もっと大きく。限界まで足を開きなさい。」

再び命令が告げられ、ゆかりは慌てて大きく足を開く。スポットライトの下、限界まで足を開き背筋を伸ばし両手を上げながら震えているゆかりの姿が浮かび上がる。その、ゆかりの前に覆面を着け鞭を手にした全裸の男が現れた。

「どこを鞭打たれるか答えなさい。」

「はい・ゆかりのマンコです・・」

初めて間近で見る異性の大きく勃起した性器に顔を紅潮させ俯き加減でいたゆかりは顔を上げると小さな声で答えた。

「もっと大きく。はっきり答えなさい。」

「は、はい。ゆかりのマンコです。」

今度は大きな声で叫ぶように答えたゆかりは自分の下腹部が熱くなっているのを感じた。と、その瞬間鋭い風切り音と共に無防備に大きく開いたゆかりの股間の中心に鞭が叩き込まれた。

「あぁぁぁーーーーーーっ」

悲鳴を上げるゆかりの股間に間髪を入れず二撃目の鞭が叩き込まれる。

「ひぃぃぃーーーーーーっ」

ゆかりは目から涙を溢れさせ頭上に上げた両手を固く握りしめながら、自分の性器を襲う激痛に必死に耐えていた。

「あひぃぃぃーーーーーーーっ」

涙と鼻水で顔を汚しながらゆかりは腰を突き出し自分の性器を晒していた。そんなゆかりの性器に情け容赦なく鞭が叩き込まれていく。

「おぉぉぉーーーーーーーーっ」

ゆかり自身は腰を突き出し自ら性器に鞭を受けている感覚であったが、実際は激しい性器への鞭打ちによりゆかりは徐々に腰を引き顔も俯いてしまっていた。

「あっあっあっあっ・・・・」

そこで、一時鞭打ちが中断されゆかりの身体を固定する作業が開始された。号泣するゆかりの両腕が背中にまわされ高手後手に拘束されると足首にも拘束具が着けられそのままゆかりは開脚逆さ吊りにされてしまった。さらに腰と首にも拘束具が着けられサイドからのステーで動けないように固定される。そして、Ｙの字の形に完全に拘束されたゆかりの無防備に晒された股間めがけ今まで以上に強力な一撃が叩き込まれる。

「あうぅぅぅーーーーーー」

悲痛な声を上げるゆかりに構わず容赦なくゆかりの性器に鞭が叩き込まれる。その連続して叩き込まれる鞭の激しい痛みにゆかりは失禁していた。大きく開かれた股間から小便が溢れ逆さ吊りにされたゆかりの身体を汚していく。それでも性器に叩き込まれる鞭の打撃で小便の飛沫があたりに飛び散っていった。

「おぅーーーーーー」

長時間に及ぶ性器への鞭打ちでゆかりは全身を汗と小便で汚し声は枯れ鞭の一撃の度に股間を抉り取られるような激痛に半失神の状態になっていた。それでも、ゆかりの性器に鞭は叩き込まれていく。ただゆかりの性器を痛めつけ、ゆかりを苦しめる事が目的のまさに拷問だった。そのゆかりにさらなる苦痛と絶望を与えるため、ゆかりの口にゆかり自身が穿いていた汚れた下着が詰め込まれ、その上にボールギャグが装着される。そして、今までの鞭に代わり木刀が用意された。ゆかりは涙で滲む目で木刀を確認すると、これから何が起こるのか理解したゆかりは大きく目を見開き哀願するように目で助けを求める。しかし、その目にも黒い目隠しが装着されゆかりは目も口も塞がれてしまった。

「んんんん・・・・」

塞がれた口で必死に許しを請うゆかりの股間の中心に狙いを定めるように木刀が軽く当てられる。そして、そのまま大上段に振りかぶった木刀は一瞬の間をおいてゆかりの性器に思い切り振り下ろされた。

「んんんんんんんんんんーーーーーーー」

性器の肉が潰れる音と共にゆかりの絶叫が口を塞がれてもなお響き渡る。性器鞭打ちが苦痛を与える拷問とすれば、これは性器を叩き潰し破壊する処刑といえた。

「んんんんーーーーーーーっ」

哀願も抵抗も出来ないゆかりの性器に何度となく木刀が叩き込まれる。そして、ゆかりの絶叫に力がなくなってきた頃、股間に血が滲みだしてきた。クリトリスをはじめゆかりの性器が無惨にも叩き潰された証だった。しかし、それでもゆかりが許されることはなく、さらなる打撃が性器に加えられる。

「んんんんっーーーーーーーーーっ」

そして、ついにゆかりの断末魔の悲鳴と股間からの嫌な音と共にゆかりの恥骨が砕け散る。ゆかりの性器処刑もクライマックスを迎えようとしていた。

「んんんんんんんんんーーーーーーー」

恥骨が砕かれた股間に容赦なく打ち込まれる木刀に、塞がれた口でゆかりは絶叫する。そして、性器処刑の最終段階に進むため木刀から再び鞭が用意された。先ほどまでの鞭と異なり表面に無数の針が埋め込まれた処刑用の棘鞭が無様に呻き声を上げるゆかりの性器に狙いが着けられる。いよいよゆかりの性器処刑も最後の段階に進んできた。ゆかりの性器が破壊されるのはもはや時間の問題だった。

「おおおおお・・・・・」

そして、力なく声を上げるゆかりの股間に唸りを上げて棘鞭が容赦なく叩き込まれる。

「んおぉぉぉぉーーーーー」

絶叫したゆかりの股間では、棘鞭の僅か一撃でスクール水着とパンティストッキングが破り取られゆかりの性器が剥き出しになっていた。次の一撃は直接ゆかりの性器に棘鞭が叩き込まれる事になる。それは当然ゆかりの外性器の破壊を意味していた。そして、容赦なく棘鞭が振られる。

ヒュオォー

鋭い風切り音が鳴り、次の瞬間。

ビシィィーーーーッ!!

「んびゃゃぁぁーーーーーーっ!!」

びしゃ、びしゃ、びしゃ

棘鞭がゆかりの性器に叩き込まれ、ゆかりが塞がれた口で絶叫し、ゆかりの股間から血と肉片が飛び散った。ゆかりの性器は棘鞭の一撃で小陰唇をズタズタにされていた。その、ゆかりの性器にさらに棘鞭が容赦なく叩き込まれる。

ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ、ビシィッ!!!

「んぼおぉぉぉーーーーっ!!!」

ゆかりは断末魔の悲鳴を上げると、ビクンビクンと体を大きく痙攣しだした。ゆかりの股間からは大量に血が滴り、ゆかりの外性器は棘鞭の連打で抉られたように完全に消滅していた。性器を壊され血を流すゆかりは、もうそのままでも長くはないが、完全に止めをさすため、ゆかりの残った子宮に爆薬が入れられる。そして、ゆかりの口を塞いでいたギャグや下着が取り除かれると、代わりに口にも爆薬が入れられた。もう意識がないと思われるゆかりであるが、最後に自分の子宮が破壊される事を理解させる為、時間差で導火線に点火された。

シューっ

導火線が短くなっていき膣の中に消える。その次の瞬間。

ボンッ!!

鈍い音が響きゆかりの下腹部が大きく膨らみ、膣から血と肉片となった子宮が噴き出した。そして、数秒後。

ボンッ!!

ゆかりの頭部が爆発する。ゆかりは頭を爆破され、無惨に処刑されてしまった。

ゆかりの自慰

ゆかりの自慰

ゆかりは机に向かうとＰＣの電源を入れた。ＯＳが起動しパスワードの入力を求められる。ゆかりは慣れた手つきでパスワードを入力するとエンターキーを押した。そして、机を離れると衣服を脱ぎ全裸になる。

・・無様な身体・・

姿見に映る自分の姿を見つめゆかりは小さく呟いた。ほとんど膨らみのない小さな胸に寸胴の幼児体型。脱毛処理した恥丘。貧弱な上半身に比較して適度に肉の付いた下半身がアンバランスさを強調する。百五十センチに満たない小さな身体に、三つ編みお下げに眼鏡をかけたゆかりの地味な顔が実際の年齢よりもゆかりを幼く見せていた。とはいえ、すでに二十五を超えたゆかりは自分自身では女としての魅力は自分にはないと思い込んでいた。実際、ゆかりはこれまで異性との交際の経験はなく自慰に耽る毎日を送っていた。そして、二十歳の誕生日に性具を使い自分で処女貫通を行い、その際経験した強烈な痛みがゆかりの性癖を呼び覚まし、以来、自虐行為なしでは興奮できない身体になっていた。。

しばらく、姿見に映る自分の身体を見つめていたゆかりは、自慰の際の道具を入れたボックスから購入したばかりでまだ使用していないアナルプラグを手に取るとその頂点を肛門に当てた。

「まず、ゆかりのおしりの穴を封印します。」

小さく呟くとゆかりは、徐々に力を入れ自分の肛門にアナルプラグを押し込んでいく。

「あっ、い、痛い・・」

円錐状に徐々に太くなっていくアナルプラグでゆかりは肛門が裂けるような痛みに耐えながら力は緩めずに押し込んでいく。

「うっ・・・・」

最大直径部分を越えたアナルプラグは吸い込まれるようにゆかりの肛門に入っていった。

「う、あ・・・」

ゆかりは直径五センチ、長さ十二センチの巨大なアナルプラグで自らの肛門を封印し、その行為に興奮していた。

「ゆかりのおしりの穴から凄く奥まで入っています。怖くて痛いのに気持ちいいです・・」

肛門から奥深く自分の中に入ってきたアナルプラグにゆかりは息を荒くしながら次にやはりまだ未使用の直径八センチ、長さ二十三センチの性具を手にした。

「次にこの性具でゆかりのマンコを封印します・・」

ゆかりはまずそれを口に含もうとしたが思い切り口を拡げてもゆかりの口では先端を僅かに入れるだけで限界だった。

・・こんなに太いの・・怖い・・

ゆかりはその性具の凶悪さに一瞬躊躇したが、そのまま性具を舐め全体を唾液で濡らしていく。そして、性具全体が自分の唾液で光り始めた後、大きく足を開くと自分の性器・膣口に先端を当てた。

「いきます・・・・」

ゆかりは先ほどのアナルプラグのように徐々に力を入れ性具を自分の性器に突き刺していった。

「うっ・・あぁ・痛い・・」

ゆかりは涙を浮かべ歯を食いしばりながら性器が裂けるような激痛にも力を緩めずに自分の性器に性具を押し込んでいく。

「痛い・・痛い・・・・」

ようやく三分の一、約八センチほど性器に挿入したゆかりであったが、そこから先がゆかりの経験のない性器にとって性具のあまりの巨大さに自分の力では挿入不可能な状態に陥っていた。

・・どうしよう・・これ以上入らない・・

ゆかりは回りを見回しＰＣの前の椅子に目をつけた。そして、今度は椅子を跨いだゆかりは両手を頭上に上げ腰を落とし無理矢理自分の性器に性具を押し込んでいく。

「んっんーーっ・・」

ゆかりは慎重にゆっくりと、しかし容赦なく腰を落とし自分の性器に性具を突き刺していった。

「・痛い・・痛い・・・・」

呪文のように呟きながらもゆかりは両手を上げ背筋を伸ばしがに股になりながら自分の性器に性具を突き刺していく。そして、ついに巨大な性具が根本までゆかりの性器に収まってしまった。

「あっあっあっあっ・・・・」

ゆかりは下腹部の激痛に耐えながら椅子から腰を上げると、座面に血が付着しているのを発見した。

「あっっ・・・・」

思わず息を呑んだゆかりは、今まで以上に自分の乳首やクリトリスが固く勃起しているのに気付きさらに興奮する。

「ゆかりはマンコを串刺しにされて血を流しています・・」

ゆかりはもう我慢出来なくなっていた。今まで考えてはいたが実行していなかった行為を実行する時がきたのでは思う。ゆかりは撮影機器の準備を始めた。この行為は絶対撮影して記録に残しておきたい。その思いからゆかりはスマートフォンとカメラ、二台を使って撮影する事にした。入念にチェックを済ませたゆかりは、いよいよ最後の準備に入る。ゆかりは机の上に乗ると足首に足枷を装着し、

そこに３０キロの重さのある鉄球を鎖でカチャカチャと接続する。
そして、口にはボールギャグを押し込み、鼻には鼻フックをかけ、目には目隠しを装着した。手探りで天井の太い梁に結んだロープを自分の首に巻くと、両手を背中に回し手首に付けた枷の金具を左右連結し手を動かせないようにした。

・・覚悟しなさい、ゆかり・・

ゆかりは机から足を下ろした。途端に鉄球の重さでゆかりの体はピーンと一直線になり、ゆかりの首にロープが食い込む。

「おごっ、おごっ」

ゆかりが苦し気に呻く姿が高解像度のカメラで鮮明に記録されている。しばらく呻き声を上げていたゆかりだったが次第に大人しくなっていき、股間からポトポトと尿が漏れ始め、緩んだ肛門からも大便が漏れ始めていた。

ゆかりを訪ねて来る者は一人もなく、ゆかりの体はゆらゆらと揺れながら朽ちていった。

惨めに絶命する沙弥香　前編

前編

・・紗弥香（さやか）の汚い性器や小さな胸なんか見ていただいても詰まらないに決まっている・・

全裸の紗弥香は鏡に映る自分の身体を見つめ考えた。三つ編みにしたお下げ髪に眼鏡をかけた大人しそうな顔。細い腕に僅かに膨らむ胸。腰のくびれのない幼児体型にまだ陰毛すら生えていない恥丘から桜色の割れ目が覗く。十四歳、昨今の中学生とは思えぬほど未発達で貧弱な身体のなか、太ももだけが発達し女の子の脚線を強調していた。

見た目の印象通り引っ込み思案で内向的な紗弥香は今まで異性と口をきいたこともなかったが、逆にそのため性の知識だけは豊富に持っていた。自分の身体が特定の嗜好の人間からは需要があるということは意識していたが、どうしても自信が持てないゆかりは性器を晒すことにためらいがあった。

・・パンティ穿いたほうが中身をいろいろ想像して楽しんでいただけるよね・・

紗弥香は用意されている数十枚の下着の中から臍まで覆う綿の白い下着を選び穿いてみた。下腹部を隠す無地の白い下着によって紗弥香は自分の女の子の身体の幼さが強調されたことに満足した。そして、これは初めから決めていた白のオーバーニーソックスを穿いて

いく。それも、太ももの付け根近くまであるサイハイソックスだ。
鏡で自分の姿を確認した紗弥香は次の部屋のドアに手をかけ開けた。

★　★　★　★

部屋の中央の白い四角い固定台の両脇にいた仮面を着けた全裸の男が二人同時に紗弥香に冷たい視線を浴びせる。

「お・お願いします・・」

紗弥香は顔を赤らめ俯きながら近づくと両腕を背中に回し目を閉じ小さな声で言った。男は無言で紗弥香の両腕を高手後手にきつく縛り上げていく。

「い、痛い・・」

思わず声を上げる紗弥香の両腕は固く拘束されもはや動かすことは出来なかった。両腕を拘束された紗弥香は固定台に腰掛け、そのまま仰向けに寝転がると恥ずかしそうに足を開く。自ら晒した紗弥香の下着の股間部にはすでに染みが出来、乳首は固く勃起していた。

・・紗弥香は頭のおかしな女の子です。もっと、紗弥香のこと虐めてください・・

股間を濡らし乳首を勃起させる紗弥香の太ももが乱暴に掴まれさらに大きく開かされ、拘束具で固定されていく。男は紗弥香の太ももを片側四ヶ所の拘束具で締め付け固定した後、腰と胸部の固定に取りかかった。紗弥香は腰から胸の上部にかけ五ヶ所も拘束具で締め

付けられ、もはや動かせるところは両足の膝から下と頭部のみとなっていた。しかし、その両足も固定台側面の拘束具で固定され、紗弥香の自由はほぼ完全に奪われていった。

「あっあっあっ・・」

大切な股間を無防備に晒す惨めな姿に拘束されながら紗弥香は息を荒くし大量の愛液を溢れさせていた。

「お願いです。紗弥香のパンティ破いて性器を見ていただけるようにしてください・・」

紗弥香は頭を上げ哀願する。

「それから性器を拡げたまま固定してください。恥ずかしい液溢れさせる紗弥香の汚い性器を中身まで御覧になって笑っていただきたいんです・・」

早速紗弥香の愛液でびっしょりと湿った下着の股間部が切り裂かれ性器が露に晒される。そして、紗弥香の太ももの付け根を締め付ける拘束具に、容易に外れないよう噛み合せ部分に針の付いた性器開口用の強力なクリップが取り付けられた。

・・紗弥香、とうとう性器の中身まで見られちゃう・・

興奮する紗弥香の小陰唇が摘まれ千切れるほど引き伸ばされ無造作に開口用クリップで挟まれる。

「痛いぃーーーっ」

クリップ先端の針が小陰唇を貫き紗弥香は悲鳴を上げた。しかし、男は紗弥香の悲鳴など聞こえないかのように事務的に小陰唇をクリップで留めていく。

「あぁぁあぁぁ・・・」

とうとう泣き出した紗弥香の性器は、片側三ヶ所のクリップで小陰唇を留められ、桜色の膣前庭窟内に膣口や尿道口を無様に晒していた。

「あぁあっあっあっ・・」

涙を流して泣き続ける紗弥香の頭が持ち上げられ、もう一人の男が紗弥香の股間に鏡をあてる。

「ありがとうございます・・」

紗弥香は自分の要望通り無様に中身を晒す性器を鏡の中に見つめ涙を流しながら赤面していた。

開脚したまま台上に固定された紗弥香はそのまま会場まで運ばれ口元にマイクが用意された。

「は・はじめまして。これから、く・串刺しにしていただく紗弥香と申します・・」

紗弥香は震える声でなんとか告げた。

「頭のおかしな紗弥香は女の子の大切な性器を串刺しにしていただくことが夢でした。オナニーしか経験のない中学生の紗弥香が串刺

しにされ泣き叫ぶ姿をどうぞお楽しみください・・」

紗弥香が話している間に機器の調整が終わりスポットライトが紗弥香の身体を浮かび上がらせる。そして、紗弥香に自分の身体を貫く直径一センチ、長さ二メートルのニードルが見せられる。

「こ、怖い・・」

凶悪な光を放つニードルに紗弥香は思わず声を上げ足を閉じようとするが、拘束された太ももはもはや紗弥香の意思で動かすことは不可能だった。

「あ、あっ・・」

ニードルを性器から口まで一直線に貫通させるため、紗弥香は眼鏡を外され目隠しを兼ねた固定具で台の側面に頭を倒され固定された。そして、目隠しの上から再び眼鏡がかけられる。見ることも身体を動かすことも出来なくなった紗弥香は恐怖で啜り泣きを始めた。

・・もうすぐ紗弥香、串刺しにされちゃう・・

拘束され恐怖で啜り泣く紗弥香の大きく開く股間にニードルはセットされ、正確に膣口から切っ先を二センチ程挿入される。

「ひぃーーーーーっ」

生まれて初めて自分の膣内に入ってきたニードルの冷たい感触に紗弥香は悲鳴を上げとうとう大声で泣き出した。

「怖い、怖い、怖い、怖いですぅ・・」

唇を震わせ恐怖で号泣しながら紗弥香は優子のことを思い出していた。

優子は紗弥香と同じ嗜好を持ったネットフレンドだった。その優子が暗号化されたメールを送ってきたことが始まりだった。解除キーでデコードしメールを読み始めた紗弥香は興奮で汗ばんでくるのを感じた。メールの内容は「公開串刺しショー」とそのショーに参加する女の子の募集に関することだった。優子はメールの中ですでに自分は串刺しにしていただいた、と書いていた。処刑用の鉄槍よりも数段細いニードルを使用しコンピューター制御で性器から打ち込むため命の危険はないという。しかし、本当に串刺しにされるため恐怖と苦痛は存分に味わうことが出来るというのだ。そして、その串刺しシーンは撮影されビデオに編集後サービスとして女の子本人に寄贈されるという。さらに希望する女の子には性器を調教、拷問された挙句絶命するまで徹底的に容赦なく執行される本当の処刑まで用意されていると興奮した様子で書かれていた。紗弥香はメールを読みながら、串刺しにされる自分の姿を想像し知らず知らず自慰をはじめていた。

そして今、紗弥香は自ら性器を串刺しにしていただくため処刑台上に拘束され幼い性器を晒し号泣していた。

・・紗弥香、本当に串刺しにしていただくの・・

紗弥香は恐怖で泣きながらも興奮で身体が火照り、ニードルを挿入されている膣からは愛液が溢れてくるのを感じた。

・・頭のおかしな紗弥香の性器、早く串刺しにしてください・・

串刺しにされるため台の上に固定されながら、乳首を勃起させ股間

から愛液を溢れさせる自分の哀れで無様な姿を想像し紗弥香はさらに興奮していった。開脚されニードルが突き立てられた紗弥香の股間では想像通り愛液が溢れ出し照明の光で輝いていた。

惨めに絶命する沙弥香　中編（前書き）

今回、ビデオとビデオデッキが出てきます。書いたのが昔なので、ＤＶＤに書き換えようかと思ったのですが、なるべくそのままにしておきたかったので修正しないでおきました。何分、昔の昔書いた物を多少加筆したものなのでご了承下さい。

惨めに絶命する沙弥香　中編

中編

「あっあっあっ・・」

息を荒くする紗弥香の耳にモーターが回り出す音が聞こえ、同時に紗弥香の膣内にニードルが挿入されはじめる。一センチ、二センチと紗弥香の膣内にニードルが消えていくにつれ、紗弥香の呼吸が早くなり再び興奮よりも恐怖が支配し始めた。

「あっ、い、嫌っ・・怖い、怖いですぅっ」

紗弥香は必死に身体を動かし逃れようとするが、厳重に固定された身体は紗弥香の力程度では僅かに動かすことも出来なかった。

「あーーっ許してくださいぃ怖いですぅっ」

必死に哀願する紗弥香の顔は溢れる涙と鼻水で無様に汚れ全身は汗まみれになっていた。

「やぁーーっ怖いよぉ、おしっこ漏れちゃうぅーーーっ」

串刺しにされる恐怖で泣き叫ぶ紗弥香の尿道から湯気を立てて小便が飛び出した。小便を漏らしながら性器を串刺しにされていく紗弥香の哀れな姿がライトの中浮かび上がる。

「あ・・・」

そして、一瞬紗弥香が息を止めた次の瞬間。

「あぁーーーーーーーーーーーーーっ」

この世のものとは思えない凄まじい悲鳴が紗弥香の口から発せられ、ニードルが突き立てられた膣口から血が溢れ出す。

「嫌ぁーーーっ痛いぃーーーーーーっ」

紗弥香は必死に身体を動かし逃れようとするが固定された身体は身動き一つ出来ず、ニードルは紗弥香の子宮をずぶずぶと容赦なく貫いていく。

「本当に痛いですぅーーーーっ許してくださいぃーーーーーっ」

子宮を貫かれた紗弥香は涙と鼻水で顔面を汚し絶叫する。しかし、ニードルは容赦なく小便と血で汚れた紗弥香の性器に突き立てられていく。

「痛いよぉーーっ誰か助けてくださいぃーーーっ」

性器から血を溢れさせ紗弥香は絶叫する。そして、紗弥香が事前にオプション選択していたショートニードルが紗弥香の尿道に当てられ挿入されはじめた。

「あぁーーーーーーーーーーーーーっ」

子宮を貫通される激痛に、さらに尿道を裂かれる激痛が加わわり紗弥香は夥しい涙と鼻水を溢れさせ泣き叫ぶ。

「もう助けてくださいぃぃーーーっ」

紗弥香の哀れな悲鳴が響き渡るなか、ニードルは休むことなく紗弥香の性器から身体を貫いていく。

「助けてぇーー・・げ、げふぅ・・」

泣き叫んでいた紗弥香が口から血を吐いたのが確認され、呼吸用チューブが鼻から挿入される。

「げふ、げふぅ・・」

叫ぶことも出来なくなった紗弥香の股間では悪臭を放ち大便も漏れはじめていた。凄まじい苦痛で肛門の括約筋が緩んだ紗弥香は無様に大便まで垂れ流しはじめたのだ。それは紗弥香が想像を絶する苦痛に苦しんでいる証だった。

「お・お・・・」

そして、とうとう紗弥香の口から血塗れのニードルの先端が顔を出し、それはどんどん紗弥香の口から飛び出していく。性器から口まで完全に串刺しにされた紗弥香は固定された身体をビクンビクンと痙攣させながら、小さな胸の先端で幼い乳首を固く勃起させていた。ニードルは紗弥香の口から三十センチ突き出たところでモーターは止められ、紗弥香の目隠しが外され眼鏡がかけられる。
紗弥香は涙で滲む目で、自分の口から飛び出した血塗れのニードルを確認し、恐怖と絶望で表情を凍りつかせた。本当に自分が串刺し

にされているという事実を残酷に確認させられた紗弥香の目から止めどなく涙が溢れ出す。その紗弥香の顔面に小便が浴びせられ、さらに串刺しにされている性器にも小便が浴びせられた。生暖かい小便を浴びながら紗弥香は身体を痙攣させ意識を失っていった。

★
★
★
★

紗弥香は姿見の前で服を脱ぎ、白いオーバーニーソックスだけの姿になった。そして、両足を開き、両手を上げる。紗弥香の小さな胸の先端で銀色のピアスが輝き、開いた股間でも六個のピアスが光っていた。

ニードルでの串刺しという公開処刑の後、紗弥香は性器開口具で小陰唇に空けられた六つの穴に二度と外せないピアスを装着されていた。そして、二つの乳首にもピアスが装着され、胸と恥丘の三ヶ所にはそれぞれ「さ」「や」「か」と二度と消せない焼き印が押され、さらに紗弥香は口内の全ての歯を抜歯されていた。

・・こんな惨めな身体の中学生の女の子、そんなにいないよ、紗弥香・・

紗弥香は鏡の中の自分の姿を見つめながら息が荒くなってきた。そして、紗弥香の性器に着けられたピアスから糸を引いて透明な液体が滴り落ちる。

・・紗弥香、自分の裸見て興奮してる・・

紗弥香は自分の無様な姿に興奮し、宝物と言っていい自分が串刺しにされるビデオをデッキにセットした。そして、仰向けになり足を

開き腰を持ち上げ右手で性器を刺激する。小便や大便を漏らし泣き叫びながら串刺しにされる自分の姿は何度見ても興奮し、紗弥香は時間がある限りこのビデオを見ながら自慰を繰り返していた。

・・紗弥香、おしっこやうんち漏らしながら串刺しにしていただいたんです・・

紗弥香は自分の口から無残にニードルが飛び出すシーンを見ながら頂点に達しようとしていた。そして、目隠しが外され串刺しにされた自分を自ら認識させられ、恐怖と絶望の表情がアップで映し出された瞬間。

「あぁーっ処刑してくださいぃーーーっ」

紗弥香は頂点に達し力なく腰を落とした。

・・紗弥香、もう処刑していただきたいですぅ・・

紗弥香は今更ながらはっきりと自分の願望が理解できた。紗弥香にとってもはや自分が処刑され絶命すること以外興奮出来なくなっていた。

・・もう少しの辛抱だよ、紗弥香・・

紗弥香は公開処刑を受けた女の子のみに配布される書類を手に取った。

「性器処刑同意書」

それは紗弥香にとって自分の串刺しビデオと並ぶ宝物の一つだった。

「性器処刑同意書

私・藤本紗弥香は性器を処刑していただくことに同意します。

一、私・藤本紗弥香は性器を処刑していただくため性器を含む女の子の身体全てを提供します。

二、性器、および周辺部。また女の子の象徴といえる部分への拷問・切断・摘出など全ての残虐行為を容認いたします。

三、私・藤本紗弥香の人格は処刑執行と同時に破棄され、以降モノとして扱われることに同意します。

四、性器処刑後に私・藤本紗弥香が絶命していない場合、完全に絶命を確認されるまでさらなる処刑を執行していただくことに同意します。

藤本　紗弥香　」

すでに署名捺印した書類を見つめ紗弥香は再び三つの突起を勃起させていた。拘束され徹底的に性器を拷問された挙句処刑されてしまう哀れな自分。紗弥香はそんな姿を思い描き失神しそうなほど興奮していた。

性器処刑同意書。それは、女の子の外性器（クリトリス・小陰唇・膣前庭窟）や膣や子宮などの内性器を調教・拷問していただいた後、徹底的に痛めつけ壊すことに同意する書類だった。それは二度と使用できないといった程度の処刑ではなく、性器が完全に破壊されてしまうことを意味していた。当然、クリトリスや小陰唇は原型がな

くなるまで拷問された挙句切断され、膣もボロボロになるまで拷問された後薬品で溶かされてしまう。そして子宮は摘出され女の子の目の前で切り裂かれ焼却される。女の子として価値がなくなるまで壊される恐ろしい処刑といえるが、今の紗弥香にとっては夢のようなこととといえた。もちろん、これだけ凄まじい性器処刑を受けた女の子は生きていられない。そのまま串刺しにされたり、ノコギリで股裂きにされたりと残酷な処刑で絶命するまで苦しめられるのである。

惨めに絶命する沙弥香　後編

後編

紗弥香が処刑される時がきた。紗弥香は背後の拘束台に大の字に厳重に貼り付けにされている。紗弥香の腕も脚も、もう動かす事は出来なかった。そして、直径八センチ、長さ二十センチほどの膣処刑具が紗弥香の膣口に当てられる。紗弥香の膣が処刑される時が間近に迫っていた。

「おっおっ・・・」

外性器を処刑され嗚咽する紗弥香の膣に処刑具がゆっくりと挿入され始める。

「もう許してぇぇーーーーっ」

泣き叫ぶ紗弥香の膣に容赦なく処刑具は挿入されていく。性経験のない中学生の紗弥香にとってそれだけでも膣を裂かれていくような激痛だった。

「痛いですぅもう助けてぇーーっ」

根元まで紗弥香の膣に挿入された処刑具は実際に紗弥香の膣を切り裂くため拡張スイッチが入れられる。側面が分割し処刑具が拡がるにつれ、紗弥香の膣は容赦なく拡げられていった。中世の欧州で魔

女狩りに使用された拷問具〝苦悩の梨〟に似た処刑具だった。

「嫌ぁーーっ裂けちゃいますぅぅーーーっ」

処刑具を挿入されただけで裂ける寸前だった紗弥香の膣は限界以上に拡げられ、血を吹き出し裂けるまで時間の問題だった。

・・紗弥香の膣、もう裂けちゃう・・

紗弥香はこれから裂かれる自分の膣の激痛に耐えるため脂汗を流しながら身体に力を入れた。紗弥香にとってそれは非常に長い時間に思えたが実際には処刑具のスイッチが入れられてからほんの僅かの時間だった。限界を越えた紗弥香の膣の一ヶ所が裂け血が吹き出す。そして、その裂けた部分から一気に紗弥香の膣壁は裂けていく。

「あぁぁーーーーーーーーーーーっ」

膣を裂かれた紗弥香は絶叫し、連続で放屁する。紗弥香の膣を裂いた処刑具は再び元の太さに戻り、さらに膣を痛めつけ紗弥香に苦痛を与えるため加熱のスイッチが押される。

「あ、熱いっ・・」

号泣していた紗弥香は自分の膣内の処刑具がどんどん熱くなってくるのを感じ恐怖で顔を強張らせた。紗弥香自身、自分の膣壁が裂かれた程度で膣の処刑が終了したなどと考えていなかった。そして、膣を焼かれる拷問は自慰の際何度も想像したことがあったが、実際に自分の膣が焼かれる苦痛は想像を絶するものだった。

「熱いっ熱いですぅーーーーっ」

紗弥香の股間で処刑具が赤くなっていく。それにつれて紗弥香の膣が焼ける臭いが漂いはじめる。

「あぁぁーーーーーーーーーーっ」

紗弥香の股間から煙が立ち焼け焦げた臭いが充満する。紗弥香は必死に腰を動かし膣内の処刑具を抜こうとするが、厳重に拘束された下腹部は僅かに前後に動かせる程度だった。

「あぁぁーーーーーーーーーーっ」

眼鏡の下の両眼から大量に涙を溢れさせ絶叫する紗弥香は、大きく連続で放屁し今度は放屁に続いて大便も漏らしはじめた。股間から立ち上る白煙が多くなっているのは、すでに紗弥香の膣が黒こげになっていることを意味している。中学生の紗弥香が大便を漏らしながら膣を黒こげに焼かれる姿は膣処刑のクライマックスかと思われたが、紗弥香が味わう凄まじい苦痛はその後におとずれた。膣を黒こげにされたまま紗弥香は膣内に挿入されている処刑具が冷えるまで放置され、その哀れな姿を晒される。そして、十分に冷えた処刑具が紗弥香の膣から抜かれはじめた。

「あっあぁぁーーーーーーーーーーっ」

処刑具に焼き付き一体化している紗弥香の膣壁は、処刑具が抜かれるにつれ紗弥香の体内から引き剥がされていく。紗弥香は発狂したように絶叫し口からは泡を吹き始めていた。

「あ・あぁぁーー・・・・・」

生きながら膣壁を剥がされる激痛にとうとう紗弥香は失神した。中学生の紗弥香が過酷な性器処刑にここまで耐えてきたが、その紗弥香も情け容赦なく自分の性器に執行される残酷な処刑に精神も肉体も限界に達しつつあった。

膣処刑途中で失神した紗弥香の胸に注射器で気付薬が注入され、紗弥香の覚醒が確認されると再び膣壁の引き剥がしが再開される。

「あぁぁーーーーーーーーーっ」

自分の性器内部を襲う凄まじい激痛に紗弥香は絶叫し、股間からぼとぼとと血を垂らしながら再び失神した。しかし、紗弥香は、紗弥香の性器から完全に膣壁が引き剥がされるまで失神する度覚醒させられる。そして、生きながら膣壁を剥がされる中学生の女の子にとって過酷過ぎる苦しみを最後まで残酷に味わわされた紗弥香の精神は崩壊寸前になっていた。膣処刑終了後の紗弥香は眼鏡の下の虚ろな眼から涙を流し半開きの口からは無様に涎を垂らしたまま、助けて助けてと呪文のように呟いていた。しかし、紗弥香にはまだこれから子宮を処刑されるという残酷な事実が待っている。

発狂したかのような紗弥香の股間ではすでに子宮処刑のための準備が開始されていた。まず膣壁を剥がされただの穴と化した紗弥香の膣口から焼き鏝が入れられ止血のため焼かれていく。絶叫する紗弥香の股間から再び煙が立ち上り肉が焦げる臭いが辺りに充満する。

そして、紗弥香の恥骨がハンマーで砕かれていく。まるで石を砕くかのように紗弥香の恥丘にハンマーは叩き込まれ、数分後には紗弥香の恥骨は無残に粉砕されていた。

紗弥香は子宮を摘出される。性器処刑の最終段階として僅か十四歳、中学生の紗弥香が生きながら子宮を抜かれていくのだ。紗弥香の股間の穴からは子宮摘出用の処刑具の挿入が終わり子宮固定の作業が進められていた。挿入された処刑具中心から伸びる爪は子宮口から奥深くまで伸び子宮内部にしっかりと爪をかける。

「ひぃぃーーーーーーーーっ」

悲鳴を上げる紗弥香にお構いなく、処刑具周囲の爪は子宮外部に突き刺さり、紗弥香の子宮を厳重にそして確実に固定する。性器内部、女の子の根源と言える部分を、今まさに紗弥香は処刑されようとしていた。

「助けて、助けて・・・」

身体を震わせ嗚咽する紗弥香の股間で躊躇することなく子宮摘出のためのスイッチが入れられる。小さなモーター音と微かな振動を敏感に察知した紗弥香は怯えた表情で息を飲む

「あっあっあっ・・・」

後ろ手に縛られ足を大きく開かされた紗弥香の股間で子宮摘出の処刑が開始された。紗弥香はガチガチと歯を鳴らし小さな身体を恐怖で震わせている。顔面は涙と鼻水と涎で汚れ、全身は汗まみれになっていた。そして、紗弥香の股間でモーター音が一際大きくなった次の瞬間・・

「うっあぁぁーーーーーーーーーっ」

凄まじい悲鳴と共に紗弥香の股間から血が溢れ出し、あまりの苦痛に緩んだ紗弥香の肛門からは液状の便が垂れだした。股間に埋め込まれていた処刑具が徐々に姿を現すにつれ、紗弥香の下腹部が次第に凹んでいき、ついに子宮口が股間から顔を出す。

「あぁうぅぅーーーーーーーーーーっ」

紗弥香は胸や太ももに何本も薬剤を注射され失神することも許されず、自分の子宮が股間から摘出される凄まじい苦しみに絶叫し続けた。しかし、どんなに紗弥香が泣き喚こうと処刑は容赦なく執行されていく。

「あひぃぃーーーーーーーーーーっ」

一際高い悲鳴の後、とうとう紗弥香の股間から激しい出血とともに子宮が引きずり出される。子宮に付いた卵巣は片方は千切れ、もう片方は卵管の途中で千切れてしまっていた。子宮を摘出された紗弥香は身体をビクンビクンと痙攣させ、まるで痴呆のように虚ろな目から涙を流し、開けたままの口からはよだれを垂らしながら意味のない声を漏らしていた。そして、紗弥香の目にガムテープが貼られ目が塞がれる。口にもガムテープが貼られ塞がれた。紗弥香の最後の時がやってきた。紗弥香の胸に心電図のセンサーが貼り付けられ、股間の下に巨大なガスバーナーが設置された。

紗弥香はもう処刑される。だらしなく口を開いた膣から、ガスバーナーの強力な青い炎で性器から体の中を焼かれていくのだ。

準備が整いバーナーが点火される。青い炎は紗弥香の膣から体の中に入っていった。

「ふごぉぉぉーーーーーっ!!!」

紗弥香の最後の絶叫だ。紗弥香は頑丈な拘束台が壊れるのではと思うほど暴れていた。性器から体の中を焼かれているのだ。当然の反応だった。

「ふごぉぉぉーーーーーっ!!!」

しかし、紗弥香の動きはだんだんと力が失くなり、そのうちに動かなくなっていた。心電図がフラットを表示する。紗弥香は苦しみ抜いて絶命していた。

性器を拷問される優子　前編

前編

「あっあーーーーっ、潰れちゃう、潰れちゃいますーーっ」

優子は涙と鼻水で顔面をぐしょぐしょにしながら泣き叫んだ。目隠しされ両腕を後ろ手にきつく縛られ、腰と太股に深く食い込む拘束具のベルトで足を大きく開かされ立ったまま固定された優子に出来ることはただ泣き叫ぶことだけだった。

「もう許してくださいぃーっ」

夥しい涙を流し優子は必死に哀願する。濃紺のスクール水着の股間部分が切り裂かれ、露出した優子の大切な性器に凄まじい拷問が加えられていた。何度も失神し、小便はおろか大便まで漏らしてしまった優子の股間にある敏感な突起は今まさに壊されようとしている。包皮を剥かれ剥き出しにされたクリトリスは媚薬を塗られ優子の意思とは無関係に無理矢理勃起させられた挙句、万力で締め付けられ潰されようとしていた。

「あぁ潰れちゃうよぉーー」

泣き叫ぶ優子の姿を残酷に楽しみながら万力はゆっくりと締められていく。

「痛いぃーーーっ」

自分の大切な突起を壊される恐怖と激痛で失神寸前の優子。その哀れで無様な優子の姿はビデオカメラで鮮明に記録されている。そして、クリトリスを締め付けている万力は優子の苦しみを楽しみながら、とうとうピタリと閉じられてしまった。

プチッ！

「あぁぁぁーーーーーーーーーーっ」

大切なクリトリスを残酷に潰され凄まじい悲鳴をあげる優子。しかし、そんな優子にさらに激しい苦痛を与えるためクリトリスを挟んだまま万力が捻られていく。

「あぁぁーーーーーーーーーーーっ」

悲鳴を上げ続ける優子の股間で容赦なく万力が捻られていく。そして、とうとう優子の股間から血が吹き出した。優子は自分の大切なクリトリスを残酷に捩じ切られた瞬間、無様に口から泡を吹き失神してしまっていた。

★　★　★　★

わずか三時間前、優子はセーラー服が似合い、ミニスカートとニーソックスの間から覗く引き締まった太股が眩しい普通の女子中学生だった。ところが下校途中、急に気が遠くなり、気が付くと小さな部屋の中に転がされていた。そして、起き上がろうとした優子はバ

ランスを崩し無様に転んでしまった。動転していた優子は自分の両腕が背中に回され縛り付けられていたことにさえ気が付かなかったのだ。

・・どうして・・

優子は明らかに自分が普通ではない状態に置かれていることに恐怖を感じはじめた。そして、立ち上がろうともがいていると髪の毛が乱暴に掴まれ、そのまま無理矢理立たされる。

「ひっ・・」

立ち上がった優子は目の前で自分の髪の毛を掴む無機質な白い仮面を付けた人物を見つめ小さく悲鳴を上げた。

「た、助けてください・・」

小柄な優子が爪先立ちでふらふらしながら恐怖に震える声で言った瞬間、仮面の人物は優子の頬を平手で思い切り打っていた。

「痛いっ」

優子は頬が熱くなり涙が滲むのを感じた。仮面の人物は優子のその表情に満足したかのように連続で優子の頬を打ちはじめた。

「やめてくださいー、痛いぃ」

仮面の人物は大声を上げる優子に満足し、さらに激しく頬を打ち続ける。

「嫌ぁ、許してくださいぃ」

とうとう泣き出した優子を容赦なく打ち続けていた仮面の人物は、優子の口から血が滲み出したところでようやく手を止めた。そして優子に足を開いて立つように命令する。

「はい・・」

泣きながら足を開く優子に仮面の人物は、今度は何処を痛め付けてほしいか優子自身が答えるよう残酷に命令した。そして、ミニスカートを捲り上げ、白いパンティに包まれた優子の股間を意味有り気に見詰め続ける。

「もう・許してください・・・」

自分の大切なところを痛め付けてほしいと答えなければいけないと気付きながら優子はあまりの恐ろしさにとても口にすることが出来なかった。

「ひぃっ・・」

そんな優子のスカートが突然切り裂かれ優子は悲鳴を上げる。仮面の人物はナイフで優子のスカートを切り裂き終わると、今度はセーラー服も切り裂き、たちまち優子は白いパンティ一枚とニーソックスだけの姿にされてしまった。そして、恐怖と羞恥で顔を紅潮させ震える優子にさらに大きく足を開くように命令する。

「はい・・」

震えながら思い切り足を開いた優子は、これから自分が何をされる

のか想像し体を強張らせていた。案の定、仮面の人物は残った優子のパンティにナイフを当て切り裂きはじめた。

「あ・・あ・・・」

優子は自分の大切な性器を露に晒され再び小さな声で泣き始めた。仮面の人物は優子の股間に顔を埋めると、桜色の性器を指で拡げ入念に舐めはじめる。

「あぁ、い、嫌・・汚いですぅ・・」

まだ何も知らない十三歳の少女が腕を縛られ足を開かされ泣きながら幼い性器を舐められる。優子は下校途中でまだシャワーも浴びていない自分の汚い性器を舐められながら恐怖で身体の震えが止まらなかった。

「い、痛いっ」

性器を執拗に舐められながら優子はいきなり肛門に性具を入れられ悲鳴を上げた。

「あーっ、怖いーーっ」

何の遠慮もなく肛門から自分の身体の中へ深く押し込まれてくる性具の感覚に優子は恐怖し腰を動かし必死に抵抗した。すると仮面の人物は立ち上がり画鋲を優子に見せると、それを壁に刺すかのように優子の綺麗な恥丘に突き刺した。

「あぁーーーーーーっ」

恥丘に画鋲を刺され悲鳴を上げる優子の腰を押さえ付けた仮面の人物は、続けて六個もの画鋲を優子の恥丘に逆三角形の形に刺していった。

「もう動きませんから許してくださいぃ」

大声で泣きながら哀願する優子のことなどまるで意にかいさず仮面の人物は優子の恥丘に画鋲を刺し続けていく。

性器を拷問される優子　後編

後編

優子は自分が何故こんな事になっているのか、まるで見当がつかなかった。だが自分が非常に不味い事態に巻き込まれているのは理解出来た。

多分、自分はここで犯されるのだろう。中学生の性知識でもそれは想像出来た。しかし、中学生の優子にはそれ以上の想像が働かなかった。事態はもっと悪い方向に向かっていたのだ。オーバーニーソックスだけの姿にされ、肛門に性具を突き入れられ恥丘に画鋲も刺されていながら優子は自分が犯されるだけで済むと考えていたのは、あまりに楽観的過ぎるのだが、その自分の考えが甘過ぎた事に優子はこの後すぐに気付いていく事になる。

優子は足を開かされ立たされた。腕を縛られ抵抗出来ない優子は、想像通り犯されていく事になるが、仮面の男は優子を犯す前に何やらカチャカチャと準備していた。そして、優子の背後に巨大な十字架のような拘束台が運ばれ、その十字架に革のベルトで優子の体が固定されていった。

仮面の男は、手に持った注射器を優子に見せ、優子の股間の前にしゃがみ、優子のクリトリスにズブッと突き刺した。

「痛いぃぃっ　」

優子が悲鳴を上げるが仮面の男は構わず優子のクリトリスに深く針

を突き刺し、注射器の中の液体を注入する。さらに、膣と尿道の間と会陰にも注射器が刺され注入される。それだけではなかった。左右の乳首にも注射器が刺され液体が注入された。しばらくすると優子は自分の胸と性器がたまらなく火照り我慢出来なくなってきた。優子が性器と胸に注入された液体は、即効性の強力な媚薬だった。さらに仮面の男は優子の口を無理矢理開かせると媚薬の錠剤を大量に飲ませる。そして、乳首と性器に浸透性の媚薬を大量に塗布した。

「あわわわわわわわわわっ」

顔が真っ赤になり声を上げ始めた優子は口を半開きにしてだらしなくよだれも垂らしていた。

「マンコ、あついぃぃーーっ　」

優子は性器からも糸を引いて粘液を垂れ流し、太ももの内側まで濡らしていた。そして、その様子を見て、仮面の男は優子の体を留めていたベルトを外し床に寝かせ、足を大きく開かせる。優子の性器からは大量の粘液が流れるように溢れ出していた。仮面の男は自分の大きく勃起した性器の先端を優子の膣に当てる。そして、優子の腰を押さえ付けた。

ズボウォォッ！

仮面の男は優子の膣に自分の性器を突き入れる。優子の処女膜が貫通され破けて血が流れ出した。

「いたあぁぁーーっ　痛い、痛い、痛い」

優子は初めての経験に涙を流すが、媚薬の効果で体は乳首もクリト

リスも固く勃起し膣からは血とともに大量の粘液を分泌し男の性器を受け入れていた。仮面の男は性器を根本まで突き入れ激しく腰を動かし中学生の優子を犯しまくる。

「あばばばばばっ」

優子は男の下に組み敷かれて哀れに声を上げていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

そして、男は優子の中に放出する。まだ中学生の優子が膣の中に精液を大量に放出されていた。仮面の男は射精を済ませすっきりした顔で立ち上がり、また優子を十字架に拘束する。優子にとって地獄の始まりだった。

★
★
★
★

クリトリスを潰された上、引き千切られた優子は口から泡を吹いて気絶していたが、自分の性器に加えられる拷問に覚醒し絶叫していた。優子の性器は無様に小陰唇を拡げられ露になった膣前庭窟が携帯ガスバーナーの青い炎で炙られていた。

「あぢゃぁぁーーーーっ！あぢゃ、あぢゃ、あぢゃぁぁーーーーっ！！」

絶叫する優子に構わず男は優子の性器を焼いていく。優子は狂ったように逃れようとしているが、厳重に革のベルトで拘束された優子の体は動かす事など出来ず、性器をバーナーで焼かれ続けていた。

優子の性器が焼ける臭いと煙が辺りに漂っている。

「あじゃぁぁぁーーーーっ！！！」

絶叫し続けている優子の声はもう掠れてきてしまった。優子の外性器を焼き尽くした男は、黒焦げになった優子の性器を見つめ満足気に頷く。しかし、それで男の優子の性器に対する拷問が終わったわけではない。男は優子の膣と子宮も拷問して破壊するつもりだった。男は力尽きたようにがっくりと項垂れている優子の髪を掴むと頭を上げ優子の顔を確認する。優子は虚ろな瞳から大量に涙を流し、鼻水とよだれでグシャグシャに顔を汚していた。男に捕えられるまでは明るく可愛い表情だった優子の面影がまるでなく、恐怖と苦痛で歪んだ表情で震える唇で、助けて助けてと呟いていた。男は、その優子の顔を見て満足気に笑う。そして、優子の性器を破壊する為、曲面を削り取る丸カンナを手にした。そして、その丸カンナを優子の膣に挿入した。優子はまだ自分の膣が何をされるか理解していないが、自分の膣に入ってきた冷たい器具の感触に泣き出していた。男はそんな優子の反応にも嬉しそうに仮面の下で笑みを浮かべ、カンナをシャッと動かした。

「ひぎゃぁぁぁーーーーーっ！！」

絶叫する優子の膣壁がカンナで削り取られ、肉片が落ち血が噴き出した。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ

「あぎゃぁぁぁーーーーーっ！！！！」

男はリズミカルにカンナを動かし優子の膣壁を削り取っていく。優子の膣口から削り取られた膣壁がボトボトと落ちてくる。

シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ

優子はまた泡を吹いて失神していた。無理もなかった中学生の女子が膣壁を削られているのだ。その地獄の激痛に耐えられるわけがない。しかし、男は優子に失神する事も許さず覚醒剤を優子の乳首に注射する。程なく優子は目を覚まして激痛にまた絶叫する。男は優子が脱いだ下着を丸めると、優子の口に押し込んだ。そして、なんと針と糸を使い優子の唇を縫い合わせていく。

「ふぐうぅぅーーっ」

悲しげに声を上げる優子の縫い合わせた唇の上にさらにガムテープを貼り付け口を塞いだ男は、優子の目の上にもガムテープを貼り付け塞いでいった。優子は目も口も塞がれ、体も拘束されて動く事も出来ず最後の時を待つばかりになっていた。男は膣を削られポッカリと空いた股間の穴から血を流す優子の姿を見て興奮が頂点に達し、我慢できなくなったのか自分の性器をしごき始めた。そして、優子の体に向かって放出する。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

射精して興奮が治まった男は電動のハンディドリルを持ち、優子の股間の前にかがみ込んだ。まず、尿道。男は優子の細い尿道にドリルのスイッチを入れたまま突き入れる。

ギュイーン

「ふぐうぅぅーーーーっ！」

優子の尿道から血と肉片がビチビチと飛び散るが、男は構わず優子の尿道をドリルで拡張し膀胱も串刺しにした。そして、いよいよ子宮破壊に着手する。ドリルの先端を自作した三ツ俣のドリルに付け替え、削り出して穴が空いている膣を覗きこむ。膣の奥に優子の赤黒い子宮を確認し男はドリルのスイッチを入れた。そして、キューンと高速に回転するドリルを優子の膣の中に入れていく。

ギュワァァーーッ！！

「ふがぁぁぁーーーーーっ！！！」

回転音が変わり膣から血と肉片となった子宮が噴き出してきた。男は子宮を完全に破壊する為、さらに奥までドリルを突き入れていく。

ギュバァァァーーーーッ！！

「ふぎゃあぁぁぁーーーーーっ！！！！」

肉片となった優子の子宮がボトボトと飛び出し、優子が断末魔の悲鳴を上げる。男がドリルを止め優子の膣から抜いた時には、優子の子宮は消滅し、優子も絶命していた。

中学生の優子は無惨に性器を破壊されて殺された。仮面の男は絶命した優子を見ながら、また自慰していた。そして、また優子の体に向かって射精する。

「優子ちゃん、最高だったよ　いつも優子ちゃんの事を考えていたんだ」

男は仮面を取ると優子に声をかけていた。優子が生きていれば、その男が同じクラスで隣の席の優子が密かに好意を寄せていた男子であると驚くところであったが、優子はそんな事も知らずに死んでいった。

理津子の性器針山　前編

理津子の性器針山　前編

「さあ、これから、理津子の性器を針山にするよ。」

私は笑みを浮かべ理津子に告げた。セーラー服姿の理津子はぶるぶると震えているが、覚悟を決めたように頷いた。

「サイハイソックス以外、服を全部脱ぎなさい。勿論、下着もだ。」

私は理津子に命令する。

「・・はい・・」

震える声で小さく返事をした理津子は、私の目の前でまずスカートを脱ぎ、次にセーラー服を脱いでいき下着だけの姿になる。理津子は私の想像通り、白いスポーツブラと白い綿の下着を着用していた。そして、その下着も脱いでいき、太ももに食い込む黒いサイハイソックス以外全裸になると、羞恥で顔を真っ赤に染めながら両手を頭上に上げ足を大きく開いた。私は理津子の裸体を舐めるように観察する。ほとんど膨らみのない胸で桜色の乳首が勃起し、脇の下には薄く腋毛が生えている。そして、寸胴の胴体に剃毛処理したつるつるの恥丘。腋毛と、恥丘の剃毛処理は私が理津子に命令し施したものだ。変態で幼児体型の理津子によく似合っている。

「顔を上げろ理津子。不細工な顔もきちんと晒すのだ。」

羞恥で俯いていた理津子は、私の命令に慌てて顔を上げた。三つ編みお下げに太い眉で大きな目の理津子の真面目で大人しそうな顔が真っ赤に染まっている。

「背筋を伸ばして限界まで足を開くのだ、理津子。」

私の命令に理津子は立っていられる限界まで大きく足を開き、さらに背筋を伸ばし僅かに膨らんだ胸を晒す。

「よし、いい格好だ。そのまま動くな、理津子。」

私は理津子に命令すると、長さ十センチ程の針を手に取った。

「まず、この針を理津子の性器に文字通り針山になるまで突き立てていく。覚悟が出来たら言いなさい、理津子。」

「・・はい・・」

私の言葉に理津子は震えながら返事をする。そして、私の持つ針を食い入るように見つめている。理津子の小さな胸で乳首はこれまで以上に固く勃起し、大きく開いた股間でもクリトリスが勃起し輝いているように見える程、理津子の性器は濡れ始めていた。

「ドブスで変態で頭のおかしな理津子は、性経験もないオナニーばかりしている処女のくせにこれから本当に女の子の性器を処刑していただけると想像しただけで恥ずかしい液を垂れ流しています・・」

理津子は命令された姿勢のまま股間を濡らし、自慰の誘惑に耐えて

いるようであった。理津子の息がどんどん荒くなっていく。そして・
・

「り・理津子のせ・性器処刑を執行して下さい・・」

理津子は失神しそうなほど興奮しながら、自分の性器処刑を願い出た。私は残酷な笑みを浮かべると、大きく開いた理津子の股間の前にしゃがみこむ。理津子自身の匂いが強烈に鼻につく。私は無造作にその匂いの元である理津子の性器を指でくぱぁと開いた。

「あっ・・」

小さく声を上げる理津子の固く勃起したクリトリスを摘むと、私はその後ろ側に針の先端を当てた。

「まず、クリトリスの後ろに打ち込むか。」

私の言葉に理津子の呼吸がさらに荒くなっていく。

「は、はい・・お願い致します・理津子の性器に針を突き立ててください・・・」

理津子は震えながらも命令通り姿勢を崩さずに耐えている。

「いい娘だ、理津子。そのまま動かずにいるんだ。」

私は理津子に声を掛けると、ゆっくりと指に力をいれ、理津子の性器に針を突き立てていった。

「うっあぁぁぁぁぁーーーーーーー」

絶叫する理津子の性器に私はわざとゆっくり針を刺していく。一センチ。二センチ・・。

「いだっいだいぃぃーーーっ」

理津子の悲鳴が心地よい。私はちょうど半分、五センチ程理津子の性器に針を刺し込むと二本目の針を手にした。

「さあ二本目だ。次はクリトリスの前に突き刺すよ。」

私は理津子のクリトリスの前部、包皮との間に針先を軽く挿入し理津子の反応を窺った。

「はい・・お願いします・・・」

涙声で答える理津子はそれでも大きく足を開いたまま私の眼前に性器を晒している。私は再びゆっくりと理津子の性器に針を突き刺し始めた。

「いだぁーーっいだいですぅぅーーーっ」

理津子は頭上に上げた両手を握り締め性器に針を刺される激痛に必死に耐えている。私はゆっくりと、そして時折針を回転させながら理津子の性器に針を刺していく。

「いだい・いだい・いだいぃぃーーー・・」

理津子は涙と鼻水で顔面をぐしょぐしょに汚しながらも姿勢を崩さずに耐えていた。

「よく頑張ったな、理津子。」

私は理津子の性器から突き出ている二本の針を眺めながら続けた。

「まだ二本だ。もっともっと苦しんでもらうぞ、理津子。」

三本目を手にした私は今度は理津子の性器の下端、会陰部に針を当てた。

「今度も相当痛いぞ、理津子。」

私は号泣している理津子に告げると指先に力を入れた。

理津子の性器針山　後編

理津子の性器針山　後編

「うっううあああぁぁぁーーーーー」

普段大声など出さないであろう理津子が叫び声を上げる。私はゆっくりと理津子の性器に針を突き刺していく。理津子の悲鳴と、理津子の性器に針を突き刺す感触が私を興奮させる。

「理津子にもっと恐怖と絶望を与えるために理津子の身体を拘束しようか。」

私は理津子に言いながら拘束具を手に取った。

「腕を背中にまわしなさい。」

「はい・・」

理津子は震える声で返事をし両腕を背中にまわす。私は理津子の両腕を拘束具できつく固定し、さらに背後の拘束台から伸びる鉄棒に付いた皮ベルトで理津子の腰と太ももを厳重に固定する。理津子はYの字を逆さまにした状態で完全に固定された。

「さあ、理津子。また、理津子の性器に針を刺していくよ。」

私は理津子に告げると今までより一回り太く倍の長さの針を手に取

った。

「今度はこの太い針で理津子のクリトリスを串刺しにするよ。クリトリスから理津子の内へ深く打ち込むから思う存分泣き叫びなさい。」

私の言葉に理津子の泣き声が大きくなる。

「さあ、いくよ。」

私は理津子の勃起しているクリトリスの頂点に針を当てると慎重に針を突き刺していった。

「うっあぁぁぁぁぁーーーーーーっ」

今までにない理津子の絶叫が響き渡る。

「まだまだ深く刺すよ、理津子。」

私はゆっくりと理津子のクリトリスを串刺しにしていく。

「あぁーーあぁぁーーーっ」

もう十センチ近く理津子の内に針は打ち込まれている。しかし、私は理津子に苦痛を与えるため、さらに深く針を突き刺していった。

「ほら、理津子のクリトリスの串刺し完了だ。」

針は理津子のクリトリスから一センチ程頭を出し、残りは全て理津子の中に突き刺されていた。

号泣する理津子の姿に満足した私は次に直径五ミリ長さ四十センチのニードルを手に取った。

「次はこのニードルで理津子の尿道を壊していくよ。」

私の言葉でその凶悪なニードルを目にした理津子は、さらに大声で泣き始めた。

「尿道だけでは理津子も物足りないだろうから、膀胱も串刺しにするからね。」

私は理津子に言いながら、理津子の口に理津子が穿いていた性器の染みがついた汚れた下着を詰めると、その上からギャグを装着し理津子の口を塞いでいった。

「そうとう痛いだろうから、口を塞いだよ、理津子。」

理津子の怯えた表情に私は笑みを浮かべ、再び座り込むと理津子の尿道口にニードルの先端を当てた。そして、少しずつニードルを突き刺していく。

「おっおぉぉーーーーーっ」

しばらく私は理津子の悲鳴を楽しみながらニードルを上下に動かし理津子の尿道を痛め続けた。そして、十分理津子を痛めつけた後、そのままニードルを理津子の中に突き刺していく。

「おおおおおぉぉぉぉぉぉーーーーっ」

しばらくして理津子の悲鳴の質が変わった。口を塞がれていてもな

お響き渡る絶叫。理津子が凄まじい苦痛を与えられている証だった。
私は理津子の性器を処刑していく行為に最高の興奮を味わっていた。

「ほら、もう理津子の膀胱に入っているよ。もうすぐ、膀胱も串刺しになるね。」

私は興奮で自分のものが固く勃起していた。まだ幼いと云える女子、理津子の膀胱をニードルで串刺しにする。私は興奮しながら少しずつニードルを掌で押し込んでいく。しばらくすると抵抗が強くなりニードルの先端が何かに突き当たったような感覚が伝わってきた。

「じゃあ串刺しにするよ。理津子、覚悟して。」

私は掌で思い切りニードルを押し込んだ。

ズブッッ！！

「ぶごおぅぅぅーーーーっ！！」

理津子が絶叫する。ニードルは根本まで理津子の体の中に打ち込まれ、理津子の膀胱を完全に串刺しにしていた。

「ふごっ、ふごっ、ふごっ、ふごっ」

理津子は情けないほど恐怖と激痛で震えていた。拘束されても分かるほど、ぶるぶると哀れに震えている。

「良いよ、良いよ、理津子。その表情、最高だ」

私は理津子の膣に膣鏡を挿入し最大まで開口する。理津子の膣の奥

でころっとしたピンク色の可愛い子宮が震えている。さあ、次は理津子の大切な子宮だ。私はまたニードルを掴むと笑いが零れてきた。理津子の子宮にニードルを突き刺すかと思うと、嬉しくてどうしても笑いが溢れてしまう。

「さあ、始めるよ。何本刺せるかな」

私は理津子の可愛い子宮にニードルを突き刺そうとして手を止めた。

・・もっと理津子のマンコを痛め付けてやろう。刺すだけじゃなく焼いてやる・・

私はニードルの束をガスバーナーの炎で炙り、真っ赤になったところで改めて理津子の子宮にニードルを突き刺す事にした。

・・これで理津子の女も終わりだね。可哀想に……。マンコを処刑されたいなんて願望を持たなければ気持ち良いことも出来ただろうに、苦痛しか味わえないなんてね。私にしては願ってもない事だけどな・・

私は真っ赤に灼けたニードルを理津子の可愛い子宮に突き刺した。

ブスゥッ!!

「ふんがぁぁぁーーーーっ!!」

理津子の子宮にニードルが突き刺され、さらにジュワーッと焼かれていく。口を塞がれてもなお響き渡る理津子の絶叫が心地好い。

「もっともっと理津子の子宮に刺して焼いてあげるからね」

私は嬉々として二本目のニードルを理津子の子宮に突き刺していく。
再び理津子の絶叫が響き、理津子の子宮の焼ける音と臭いがする。
そして、理津子の苦悶の表情は最高だった。私はもう手を止められず理津子の子宮にニードルを刺し続けていた。１０本、２０本。理津子の子宮が針山になっていく。

「どこまで正気でいられるかな、理津子」

私は理津子が発狂していくのを楽しみに、理津子の子宮にニードルを刺し続けた。

「うびゃぁぁぁーーーーっ！」

理津子の可愛い絶叫が響き渡り、私は興奮しながら理津子の子宮にニードルを刺し続けていると理津子の悲鳴の質が変わってきた。

「あひゃひゃひゃひゃひゃっ」

・・あははっ、ついに発狂したね理津子。ここまで良く頑張ったね。でも、もう終わりだね。無様だね、理津子。マンコ処刑されて発狂するなんて……。ふふっ、ちゃんと絶命するまで処刑してあげるからね・・

私は高らかに笑うと理津子の子宮にニードルを刺し続けた。

拷問処刑される理恵子　前編

拷問処刑される理恵子　前編

「スカートを捲り、足を開くのだ」

男の冷たい口調の命令に理恵子は従い、プリーツのミニスカートを捲ると足を大きく開いた。男の口調からは有無を言わせぬ怖さがあった。もし命令に逆らったら何をされるか分からない。理恵子は震えながら男の命令に従っていた。理恵子の白い下着が露に晒される。男は、顔を覆う銀色の仮面以外全裸で、理恵子の下着を見ている男の股間では性器が固く勃起していた。中学生の理恵子にとって本物の異性の性器を見るのは初めてだった。ついそこに目がいってしまい顔を赤らめている理恵子に男は次の命令を出す。

「セーラー服とスカートを脱ぐのだ」

理恵子は、やっぱりと思った。中学生で性経験のない理恵子だが、自分がこの状態で何をされるかは分かっている。ここで犯されるんだ。理恵子は自分の股間の割れ目の穴に男の性器が入れられると理解していた。

・・あの男の人のチンポが私のマンコの穴に入るんだ。でもあんな大きいの入るの・・

経験のない理恵子には、それがどのようなものか想像出来なかった

が、今まで誰にも見せた事がない性器が見られてしまうのは恥ずかしかったが、大人になれば誰でも経験する事だと思えば正直、その事に対する恐怖はそれほどなかった。それよりも、下手に逆らって暴力を振るわれる事の方が怖い。犯されても殺されてしまうよりは遥かにいい。理恵子は震えながらセーラー服を脱ぎ、次にスカートも脱いだ。理恵子は白いスポーツブラと白い下着、そして白いサイハイソックスだけの姿で、両手を上げ、足を大きく開いて立っていた。男は大きく開いた理恵子の股間を眺めると、そのまま顔を近付けて理恵子の股間の匂いを嗅ぎ始めた。

・・ひぃぃ・・

股間の匂いを嗅がれ理恵子は背筋が凍りついていた。下校途中で拉致された理恵子は丸1日穿いている下着の臭いを嗅がれ、羞恥と恐怖で震えていた。そして、男は理恵子の下着の股間部分をハサミで切り取ると、それを理恵子の見ている前で仮面をずらすと自分の口に入れた。

「ひあっ」

理恵子は思わず声を出してしまったが、男はクチャクチャと味わうように理恵子の汚れた下着を噛んでいる。

・・ひぃぃぃ、この人、おかしいよぉ・・

自分の汚れた下着を口に入れて味わう男の姿に理恵子は恐怖しガタガタと震えていた。相手が狂人では何をされるか分からない。理恵子は逃げ出す方法はないかと考えるが、窓もないこの部屋の唯一の出入り口と思われるドアは男の背後にあるだけである。男は理恵子の下着を噛みながら仮面を元に戻しロープを手にする。理恵子は、

ロープで自分を縛る気だと直感した。縛られてしまったら、もう男のなすがままになってしまう。逃げ出すなら今しかない。が、その一方で理恵子は考える。もし、これで逃げるのが失敗したら、おそらくさらに酷い事をされるだろう。大人しくしていれば許して貰えるかもしれない。理恵子は両方の考えを天秤にかけ、大人しくしている方を選んだ。ドアまではたどり着けるだろう。理恵子は運動神経には自信があった。でも考えてみれば、あのドアには鍵がかかっているのが普通だ。ドアを開けられずに捕まったら殴られるのは勿論、この狂人が相手ではもっと酷い事をされるだろう。それなら、大人しくこの恐怖の時間が過ぎるのを待っていた方が良いのではと考えていた。しかし、理恵子は大きな勘違いをしていた。この男は、理恵子がどんな態度をとろうがはじめから酷い事をしようとしか考えていなかったのである。その為に理恵子を捕えたのだ。この男に捕らえられた時点で理恵子の運命は決まっていたのだ。

男は頭上に上げている理恵子の両手首を天井からのロープでまとめて縛りつける。そして、両足首もまとめて縛ると、そのまま背中の方に持ち上げた。

「ひいぃぃぃっ」

自分の体が宙に浮き理恵子は悲鳴を上げるが、男は理恵子の足首をさらに上げ続け、なんと手首と一緒にまとめて縛ってしまった。理恵子は両手首、両足首を背中側で一点にまとめて縛られ吊るされていた。

「痛いぃぃ、許して下さいぃ」

手足の付け根から千切れそうな激痛に理恵子の瞳から涙がポロポロと零れる。男は吊られている理恵子の下着をハサミで切り裂き、剥ぎ取っていく。これで理恵子はサイハイソックスだけの姿にされて

いた。しかし、理恵子は恥ずかしいと思う羞恥心よりも、体を襲う痛みに耐える事で頭が一杯であった。

「あうぅぅぅっ」

呻き声を上げる理恵子の腰に、男はロープをぐるぐると巻き付けると、次に男はその巻き付けたロープに３０キロもある漬物石をぶら下げた。

「あぎゃあぁぁぁーーーーっ！！」

理恵子が絶叫し、背骨が折れそうな程曲がっている。理恵子は歯を食い縛り激痛に耐えているが、男は理恵子の吊られた体をくるくると回し始めた。そして、充分ロープが捻れたのを確認し手を放す。すると、理恵子の体は独楽のように回転を始めた。

「あぶうぅぅーーーーっ！！」

悲鳴を上げながら理恵子は高速で回転させられていた。回転している理恵子から涙と鼻水が飛び散り、理恵子の顔が赤くなってくる。これは回転の遠心力で理恵子の頭に血流が集中してきた為だった。ようやく回転が止まった時、理恵子の顔は真っ赤になり意識が朦朧としているようだったが、男はまた理恵子の体を回しロープを捻っていく。そして、また手を放した。

「あばばばばばばばばっ」

意味の分からない声を出しながら理恵子はまた独楽のように高速で回転していく。そして、理恵子の顔がさらに赤くなっていった次の瞬間。

「あびゃびゃびゃびゃ、あっびゃぁぁぁっ」

理恵子の目、鼻、耳から血が流れ出していた。高速に回転する遠心力で細く弱い血管が破裂したのだ。男は、その理恵子の姿を笑いながら楽しそうに見ていた。

拷問処刑される理恵子　中編

拷問処刑される理恵子　中編

血の涙を流している理恵子の回転が止まった時、理恵子はもう意識を失ったのかガックリと首を項垂れていた。男は理恵子のポニーテールを乱暴に掴むと理恵子の顔を上げ確認する。理恵子は哀れにも目、鼻、耳から血を流し、失神していた。男は理恵子の口の中に切り裂いた下着を詰めていき、さらに口の上にガムテープを何重にも貼りつけ理恵子の口を封印してしまった。その後、男は左右の壁に付いた滑車にロープを通し、そのロープを理恵子の膝にそれぞれ縛り着けていく。そして、滑車を回し、理恵子の脚を開いていった。理恵子は吊られたままギリギリと大きく足を開かされ、その中心にある股間の割れ目、性器が丸見えになる。男は理恵子の性器を接写したりしながら何枚も撮影すると、いよいよ理恵子の性器破壊に取りかかる。犯されるだけだと考えていた理恵子は、この後凄まじい性器処刑で性器を壊されていき、自分の甘い考えを呪いながら泣き叫ぶ事になるのだ。

男は仮面を外し理恵子の性器に口をつけると入念に舐め始めた。クリトリスの包皮の間、小陰唇の襞の隙間、尿道、膣、会陰。中学生の理恵子の性器は、汗と小便と理恵子の女の味が混じりあい、この年代でしか味わえない絶妙の味がする。男は理恵子の味に興奮し、理恵子の性器を舐めながら、自分の勃起した性器をしごき始めた。

ハァハァハァハァ

男の息が荒くなり、性器をしごく手の動きも早くなる。

「うっ」

男の口から小さく声が漏れる。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は大量の精液を放出していた。男は射精した精液をシリンジに入れると膣鏡を理恵子の膣に入れていく。理恵子の処女膜は、なんの価値もないと言わんばかりに、特別な感情もなく呆気なく貫通された。そして、膣鏡を根元まで入れた男は最大まで開口していく。理恵子の膣の奥には赤黒い子宮が見えている。男はその理恵子の子宮口にカテーテルを入れ、そのカテーテルをシリンジの先端に取り付けるとプランジャを押してシリンジの中に入れた精液を理恵子の子宮の中に注入していく。そして、すべての精液を理恵子の子宮に注入してしまった。理恵子の子宮に精液を注入する作業が終了した男は、カテーテルを抜き、膣鏡も外した。理恵子は失神して本人が知らない間に処女を失い、子宮に精液を注入されていた。男は今度は理恵子の頭を持ち上げ正面を向かせると口を開け、その中に自分の性器を挿入した。すると射精したばかりだというのに、また性器が勃起していく。男は理恵子の頭を両手で押さえ付け、激しく腰を振りだした。

ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ

男が理恵子の喉を犯す音が響き渡る。

「おごおぉぉぉーーーっ」

喉を塞がれ呼吸の出来なくなった理恵子が目が覚まし苦しげに喉を鳴らし、吊られている体を必死に揺らして逃れようとしている。瞳からは涙がぼろぼろ零れ、必死に救いを求めていた。

「ぶはあぁぁぁっ、ぶほっ、ぶほっ、ぶほっ」

男が理恵子の喉から性器を抜くと、理恵子は苦しそうに息をし噎せていた。しかし、男はかまわずまたすぐに理恵子の口に性器を突き入れ喉を犯す。理恵子はまた息が出来なくなり、号泣しながら喉を犯されていた。

ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ、ごきゅっ

理恵子の頭を押さえ付け腰を振っていた男の動きが止まり、理恵子の頭を押さえる手に力が入り男の性器を喉の際奥まで押し込んだ。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男は理恵子の喉奥に射精していた。

「あぼおぉぉぉ、あぼっ、あぼっ」

喉から性器を抜かれた理恵子は涙を流して激しく噎せこんだ。男は、そんな理恵子の髪の毛を掴み顔を上げさせると、理恵子の頬を平手でパンパンと打った。

「せっかく注入したのに吐き出すんじゃないよ」

その男の声に理恵子はどこか聞き覚えがある事に気付いた。そして、涙で滲んだ目で仮面を外した男の顔を見る。

・・えっ・・

そこには見知った顔があった。毎日、学校で見ている顔。同級生で同じクラスの野村健吾の顔があった。

「野村くん、どうして？」

苦しげな声で理恵子が訊くが、健吾はニヤリと笑い残酷に言い放つ。

「まだ、喋れるんだ。錘が足らないかな」

健吾は理恵子の腰に吊るしている錘をさらに追加する。腰から二つに折れてしまいそうな程、理恵子の体が折れ曲がる。

「あびゃあぁぁぁぁーーーっ！！」

絶叫する理恵子の、手足で吊るされ錘を付けられ足を開かされている無様な姿を見て健吾の性器はまた硬く勃起してきていた。

「ああ、やっぱり理恵子の苦しむ顔を見ると興奮するよ。もっと苦しめて壊してあげるからね」

健吾はカテーテルを持つと理恵子の尿道口に先端を当て、尿道の中に突き入れていく。３センチ程カテーテルを入れていくと突き当たるような感触があり、理恵子の膀胱に当たったのだと思った健吾は思い切りカテーテルを突き入れた。

ブスッ！

理恵子の膀胱に入ったカテーテルをさらにズルズルと健吾は押し込んでいく。本来導尿する場合は、膀胱の括約筋をほぐしてから優しくカテーテルを挿入するのが基本であるが、健吾は理恵子の性器を破壊するのが目的であるので、容赦なく膀胱に突き入れていた。当然、理恵子の膀胱の括約筋は壊された上に、膀胱内にカテーテルを押し込まれ膀胱の内壁も傷だらけになっていた。

「ほら、出てきた。理恵子のおしっこだ」

理恵子は導尿され、自分の意思とは関係なく排尿されていた。しかし、導尿程度で健吾の欲求は治まらない。健吾は理恵子の性器を破壊していくつもりなのだ。健吾は、密かに好意を抱いていた理恵子をスカートを捲り、下着を観察し、犯していく様子を想像し、毎日自慰していたのだ。そして、その妄想もだんだんとエスカレートしていき、最近では理恵子の性器を破壊する妄想で自慰をして精液を放出していた。その理恵子の本物の性器を見て味わった健吾は、もう理恵子の性器を破壊したい衝動を抑えられなかった。

「まずは尿道と膀胱を破壊してあげるよ」

健吾は尿を出しきった理恵子の尿道から垂れるカテーテルにシリンジを装着した。

「理恵子がどんな顔をするか、楽しみだよ」

健吾は残酷な笑みを浮かべるとシリンジ内に、ケトルで沸かしていた熱湯を入れていく。シリンジ一杯に熱湯を満たした健吾はプランジャをセットし、理恵子の膀胱に熱湯を注入する準備を整える。

「さあ、思い切り苦しんで絶叫して理恵子」

ぢゅーーーっ！！

「あっびゃあぁぁぁぁーーーーっ！！！」

理恵子は膀胱に熱湯を注入され、白眼を剥いてブクブクと口から泡を吹き哀れにも失神してしまった。理恵子は失神する寸前、自分の体は何かもう取り返しのつかない事をされていると感じながら意識を失っていった。

拷問処刑される理恵子　後編

拷問処刑される理恵子　後編

膀胱に熱湯を注入され失神した理恵子の尿道から熱湯が抜かれていた。カテーテルから熱湯が出なくなると健吾は再びカテーテルにシリンジを装着し新たに沸かした熱湯を満たしプランジャを押し込んで理恵子の膀胱にまた注入する。そして、また注入した熱湯を抜くと、沸かした熱湯を注入する。それを繰り返しているうちに理恵子の尿道から排出される液体が赤くなってきた。それは、理恵子の膀胱は度重なる熱湯責めで焼け爛れ出血が始まった証だった。もう二度と理恵子の膀胱は機能しない。腎臓から繋がっている尿管も焼けて塞がってしまっているだろう。健吾は理恵子の膀胱を破壊した事に満足し、次に尿道を破壊する為、電動ドリルを手に持つ。ドリルを理恵子の尿道に突き入れ、尿道を消滅させるつもりだったが、その前に理恵子の目を覚ましておこうと、理恵子の乳首に注射針を刺し覚醒剤を注入する。覚醒剤を注入された理恵子はビクンと体を動かし目を覚ました。

「あ、あ、あ、あ、あ、あっ」

目を覚ました理恵子は、自分の体がもう取り返しのつかない事になっているのが分かり号泣していた。

「おはよう、理恵子。もう理恵子は、おしっこ出来ない体になっちゃったけど、もっと壊していくからね。楽しみにしてて」

「ひいいいいーーーっ」

健吾は楽しそうに言うが、その手に持っている電動ドリルを見た理恵子は悲鳴を上げていた。

「ああ、このドリルが気になるのかい。理恵子はもうおしっこ出来なくなっちゃったから、おしっこの穴を他の事に使えるようにしようと思ってさ　これで、穴を拡げようと思うんだ」

そう言うと健吾の姿は理恵子の視界から消え、後ろの方でドリルの高速で回転する音が聞こえる。理恵子は身構えたが、それはとても耐えられるような痛みではなかった。

ギュイーーン！

「はっびゃあぁぁぁーーーーーっ！！」

理恵子は涙と鼻水を流して絶叫する。しかし、健吾は理恵子の尿道にドリルを突き入れ楽しそうに尿道を削っていた。理恵子の血と肉片が飛び散り、健吾の顔も血だらけになっているが、構わず健吾は理恵子の尿道を削っていた。そして、理恵子の尿道を削り、ぽっかりと穴を開けた健吾は、その穴へ自分の勃起した性器を突き入れ腰を振り始めた。ドリルで削られた理恵子の尿道が更に裂けていく。

「あぎゃあぁぁぁーーーーっ、もお、だじげでぇぇぇーーーーっ！！」

可哀相に削られた尿道を犯され絶叫する理恵子に構わず健吾は理恵子の脚を抱えこみ激しく腰を振り続ける。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

健吾は理恵子の焼け爛れた膀胱内に精液を放出していた。

「ふぅっ良かったよ、理恵子」

「うっ、うっ、うっ、うっ」

理恵子はもう自分の体が確実に壊されてしまった事に号泣していた。

「ああ、理恵子の泣き顔可愛いよ。最高だ。もう我慢できないから、次は理恵子のマンコの穴壊すね」

「ううっ、嫌だ。お願い、もう許して……」

理恵子は必死に健吾にお願いするが、健吾は聞く耳持たない。カチャカチャと理恵子の性器、膣を破壊する道具を準備している。健吾は理恵子の膣に開口具を挿入し、最大まで開いていく。理恵子の膣は7、8センチにまで開口され、その奥にピンク色の子宮が見えている。そして、理恵子の開かされた脚の間にスタンドに固定されたガスバーナーが置かれた。ガスバーナーの狙いは当然理恵子の膣とその奥に見える子宮だった。吊るされ固定されている理恵子は自分の背後で用意されている物が何かなど分かる筈がないが、それが自分の性器を破壊する物であると敏感に感じ取って号泣していた。

「さあ、それじゃいくよ。理恵子」

健吾はガスバーナーのバルブを開け点火した。青い炎がバーナーの先から噴き出している。それを、容赦なく理恵子の膣に近付けてい

った。

「ふんぎゃあぁぁぁぁーーーーーーーっ！！！」

理恵子の凄まじい絶叫が響き渡り、膣の焼ける音と臭いが充満する。

「おぎゃあぁぁぁぁーーーーーーーっ！！！！」

理恵子は口からブクブクと泡を吹き、白目を剥いて絶叫している。健吾は理恵子の膣が黒焦げになったのを確認し、今度はバーナーを理恵子の膣の中に突き入れた。

「ぶぎゃあぁぁぁぁーーーーーーーっ！！！！」

膣に続いて子宮も焼かれ始め、理恵子の絶叫は止まらない。こんな事をされながら、まだ意識がある理恵子の精神力は素晴らしいといえたが、それも限界にくる。

「あびゃびゃびゃびゃあ、あびゃあっ」

理恵子の目は焦点を失い虚空を彷徨っていた。口からもだらしなくよだれを垂れ流し、哀れにも理恵子は性器を焼かれ発狂してしまっていた。健吾も理恵子の様子に気付き肩をすくめた。

「まだこれからなのに、もう発狂しちゃったのか。つまらないよ、理恵子」

健吾は残念がるが、それでも理恵子の性器を最後まで破壊していこうと作業を継続する。

理恵子の膣と子宮が黒焦げになっているのを楽しそうに撮影しなが

ら健吾はまた自慰をしていた。そして、また大量に精液を放出する。

「あーっすっきりした。もう、早く終わりにしようかな」

健吾はカッターを手に取ると理恵子の小陰唇をびろーんと摘まんで伸ばし切り取り始めた。そして、理恵子の左右の小陰唇を切除してしまう。さらに理恵子のクリトリスの根元にもカッターを当て躊躇なく切除してしまった。もう理恵子の性器は完全に破壊された。それでもまだ健吾は理恵子の性器を破壊しようとしていた。電動で小型軽量の回転ノコギリを持つとスイッチを入れる。

キューーン！

ノコギリの鋭い回転音が響き、それを理恵子の割れ目に近付けていく。

ヂュイィィーーン！！

「あっびゃあぁぁぁーーーーっ、あばばばば、あっびゃあぁぁぁーーーーっ！！！！」

理恵子の割れ目が文字通り切り裂かれ割れていく。夥しい血と肉片が飛び散り周囲は血の海となっていた。しかし、健吾は理恵子の性器をノコギリで裂きながら大声で楽しそうに笑っていた。そして、なんとまた自慰を始めていたのである。健吾は、理恵子の性器をもう恥骨まで切り裂きながら自分の性器を激しくしごいていた。その地獄のような光景は理恵子が絶命してからも終る事はなかった。

桜坂桃子の性癖　前編

桜坂桃子の性癖　前編

控えめなノックの音に続き、一人の娘がドアを開けて入ってきた。

「ご連絡した桜坂桃子と申します。十二才、中学一年生です。あそこの毛はまだ生えていませんが、オナニーの経験はあります。地味でスタイルも悪い桃子ですがよろしくお願い致します……」

娘は俯いたまま小さく震える声で言った。そして、顔を上げ全裸で椅子に座る私を見た瞬間そのまま硬直したように立ちすくんだ。口を半開きにし私の性器を見つめたまま痴呆のように固まっている。白い夏用のセーラー服は襟と袖口が深緑で清楚なイメージが漂っている。プリーツのミニスカートもそれに合わせた深緑色だった。そして、娘は太ももを半分以上覆う白いオーバーニーソックスを穿いていたが、ミニスカートの裾とニーソックスの間に見える太ももは素肌ではなく、どうやらニーソックスの下にさらに黒いパンティストッキングを穿きこんでいるようであった。

「ど、どうか、も、桃子のマ、マンコを処刑してくださいっ……」

ようやく我に返った桃子は顔を真っ赤に染めながら、それでも顔を上げ私を見つめて言った。長い髪を三つ編みお下げにし太い眉に眼鏡をかけた地味な顔は、桃子が真面目で大人しい優等生という印象を与えるが確かに一般的には可愛い顔とはいえなかった。しかし、その地味で垢抜けない桃子の顔はまさに私好みの顔といえた。私は

桃子の顔が涙と鼻水、よだれで汚れ、恐怖と苦痛と後悔で歪むさまを想像し自分のモノが固くなっていくのを感じた。

「桃子は真面目な子と思われていますが、本当は時間があれば変なことを想像してオナニーばかりしている変態中学生です。」

私は赤面しながらも、きちんと背筋を伸ばし両手を揃えて話す桃子に好感を覚えた。この真面目な娘が性器を処刑される事を望んでいる。私は改めて桃子の全身を眺めた。

「スカートを捲くりなさい、桃子」

「は、はい……」

私の命令に桃子はスカートの裾に手をかけるとゆっくりとめくり始めた。黒いストッキングに包まれたゆかりの太ももの隠された部分が徐々に現れ、そして、桃子の下腹部が現れる。桃子はスカートを腰まで捲り上げると、しばらく躊躇した後閉じていた足を大きく開いた。そして、自分の股間部分が私に良く見えるよう軽く膝を曲げ腰を落とす。

私は桃子のその行動に笑みを浮かべ、遠慮なく桃子の股間を見つめた。黒いストッキング越しに見える桃子の下着は白い無地の股上の深いタイプで、その下着の種類も私の好みに合っていた。

「さて……その姿勢のまま詳しく自己紹介しながら自慰してもらおうか、桃子」

「は、はい。分かりました」

桃子は左手でスカートを押さえたまま右手を股間に伸ばし中指で自

分の敏感な部分を刺激し始めた。

「桜坂桃子。十二月一日生まれ、十二歳です……ん、んっ」

桃子はすでに勃起しているクリトリスを下着の上から擦り、摘み、潰しながら自己紹介を始める。

「身長百五十二センチ、体重四十九キロ、バスト七十三のAカップ、ウエスト五十二、ヒップ七十九、胸がなくて寸胴の幼児体型です……ん、ん、ん……」

桃子の息がだんだんと荒くなってくる。

「好きな教科はこ、国語・で・す……」

桃子の顔は汗ばみ、左手はスカートを握り締めている。そして、右手の動きはいっそう早くなっていった。

「おっお……桃子は今……男の人の見ている前でオナニーしています……も、桃子はオナニーしているところを見ていただいて興奮している変態中学生ですぅ……」

大きく開いた桃子の股間で染みが拡がり始めている。

「桃子は今、マンコから恥ずかしい液を垂れ流しています……おぉおー……」

桃子の股間ではストッキングが真っ黒に光り、拡がった染みは太ももの部分まで達していた。

「おっおっおっおっ……」

大人しく真面目な優等生で、やっと小学校を卒業し中学校に入学したばかりのまだ幼い桃子が指先に糸を引きながら股間を刺激し自慰する姿に私は満足した。

「女の子の一番大切なマンコを処刑するのは、きっと楽しいと思います。桃子のオナニーしか知らないマンコを徹底的に痛めつけて壊して下さい。」

私は先ほどとうって変わり興奮して喋る桃子を見つめ笑みを浮かべた。

「マンコを処刑していただいた後、桃子がまだ生きていた場合、桃子が完全に絶命するまで苦痛を与え続けてください。ブスで頭のおかしな桃子は女の子の大切なマンコを処刑され恐怖と苦痛で発狂しながら無様に絶命するのが相応しいんです」

一見真面目に見える桃子の口からでる言葉に私は満足した。その性格も私好みだった。

「跪け、桃子」

私は桃子に命令し、跪いた桃子の口に自分のモノを突き入れた。そして、桃子の頭を両手で押さえ腰を動かす。

「おっ、おぉっ・・」

喉の奥の奥まで突き入れられた桃子は苦しげな声を漏らす。私は構わず腰を動かし桃子の中に放出した。

「全部飲め、桃子」

私の命令に桃子は頷き、生まれて初めて男の精液を飲み干した。

私はそれを確認すると鞭を手に取り、桃子に立ち上がるよう命令した。

「どこを鞭打たれると思う、桃子」

私は桃子の前に立ち質問した。

「桃子のマンコです……」

上気した顔で桃子が答える。

「鞭で打ちやすいようにしなさい」

私は桃子に命じた。

「はい……」

小さく返事した桃子はスカートを大きくたくし上げ、さらに大きく足を開き軽く膝を曲げ股間を前に突き出した。

「そのまま動くな」

私は桃子の無防備に晒された股間に狙いをつけた。

「はい……」

答えた桃子は震えていたが、その股間には染みが広がっていた。私はその染み目掛け思い切り鞭を叩き込んだ。

「あぁぁぁぁーーーーーっ！」

性器を鞭打たれた桃子は絶叫し、ぶぅと大きく放屁した。しかし、それでも桃子は自分の性器を鞭で打ちやすくするため、一層大きく足を開き腰を突き出した。

「痛いか、桃子」

私は鞭打たれるため自ら股間を晒す桃子に尋ねた。

「はい……。とても痛いです……。でも、本当にマンコを鞭で打っていただけて桃子はとても嬉しいです」

桃子は涙声で答える。私は涙と鼻水で汚れる桃子の顔に満足し、再び桃子の股間に鞭を叩き込んだ。

桜坂桃子の性癖　中編

桜坂桃子の性癖　中編

「あぁぁぁぁーーーーーっ」

絶叫する桃子の股間に連続で鞭を叩き込む。そのうちに鞭打たれる桃子の股間から小便が溢れ出した。セーラー服姿の中学生が小便を漏らしながら性器を鞭打たれる。それは桃子が自慰の際、必ず妄想するシーンの一つであった。

「桃子は今、おしっこ漏らしながらマンコを鞭で打たれていますっ」

真面目で大人しい桃子が普段絶対に口にしないであろうことを興奮して叫んでいた。

「桃子は本当にマンコを鞭で打たれてますっ。桃子は自分で足を開いてマンコを鞭打たれているんですぅっ……」

いつしか桃子は私が鞭を叩き込むタイミングに合わせて腰を突き出すようになっていた。私はその桃子の姿に一瞬我を忘れ、桃子の性器にナイフを突き立てそのまま切り裂き子宮を引きずり出したい衝動に駆られていた。

・・桃子の子宮・・

「あ、あぁぁぁーーーーっ」

号泣する桃子の顔と黒いパンストに包まれた太ももの間に浮かぶ白い股間部分が私をさらに刺激する。

・・桃子の割れ目・・

私は自制するためさらに強く桃子の性器に鞭を叩き込んだ。

気が付くと三十分近く私は桃子の性器を鞭で打ち続けていた。私は鞭を置くとナイフを手に取り桃子に近づいた。性器を鞭打たれ嗚咽していた桃子は、私のナイフに気付き怯えたような表情を見せたが、すぐに両手を上げ足を大きく開いた。

「も、桃子の考えました絶対服従の姿勢です。ご遠慮なく桃子のマンコを処刑してお楽しみください……」

桃子は私のナイフを見て、自分の性器が切り裂かれると考えたようであった。私は震える桃子のスカートの中に手を入れ、ナイフで下着とストッキングの股間部を切り裂いた。そして、桃子の性器を確認する。

「ひっ……」

桃子が小さく悲鳴を上げる。私は桃子の性器に顔を近づけた。桃子のまだ幼い性器からは小便と汗と愛液の匂いに混じり血の臭いがした。ライトをあてると鞭打たれた大陰唇の皮膚が破れ血が流れている。私は構わず桃子の性器を開き中身を観察した。中学生の桃子の性器は小陰唇も膣前庭窟も色素沈着がなくきれいな桜色をし、その中で桃子の小さなクリトリスは固く勃起していた。私は桃子の尿道口に口を当て吸ってみた。

「あっ……」

思わず声を出した桃子の小便の味を味わうため、さらに舌で尿道口を刺激していると、まだ膀胱に残っていたらしい尿がチョロチョロと漏れてきた。

「あっ、嫌ぁ……。桃子のおしっこ汚いですぅ……」

思わず失禁してしまった桃子は羞恥の声を上げ腰を引こうとした。しかし、私は桃子の腰を押さえ付け性器に口をつけたまま、桃子の小便を残らず飲み干した。そして次に桃子の膣口を刺激する。

「おっおっおっおっ……」

興奮で声を上げ始めた桃子の性器から愛液が溢れてくる。私はそのまま性器に口を付け桃子の味を味わう。そして、膣内に舌を突き入れた。

「お・おっーーおっおっ……」

さらに強烈に濃くなる桃子の味を存分に味わった私は立ち上がり、固くなっている自分のモノを桃子の膣口にあてがった。

「あっ・・・」

桃子は自分が犯されようとしている事に気付き小さな声を出した。

「嬉しいです。桃子のこと、犯していただけるんですね……」

私が桃子の口に口付けすると、桃子は恐る恐る両手を私の背中にまわし小さな胸を押し付けてきた。私は桃子のスカートをまくり腰を押さえ付けると自分のモノを桃子の中へゆっくりと挿入していった。

「あっ、いっ、痛いですっ……」

桃子の処女膜がミシミシと裂けていく感覚が私のモノに伝わる。

「痛い、痛いよぉ……」

私は桃子の泣き顔を見ながら自分のモノを根本まで突き入れた。そして、私はそのまま桃子を抱きかかえ婦人科の診察台に似た処刑台の上に仰向けにし、桃子の腰をベルトで固定すると、桃子の足首を掴み腰を動かした。

「痛い、痛い……」

腰を固定され逃げることのできない桃子が呪文のように繰り返しつぶやく。私はさらに激しく腰を動かしまだ中学生の桃子の膣内に放出した。

私は放心状態の桃子のスカートをまくり上げそのまま腰をさらに二本のベルトで固定した。そして、太ももも三本のベルトできつく締め上げ、足首も固定する。これで桃子の下半身は、もはや桃子の意志で動かすことは出来なくなった。

「さあ、桃子。これから桃子の性器処刑を執行するよ」

私が桃子の耳元で囁くと、桃子は夢から覚めたように目を見開き自分の下半身が厳重に拘束されていることに気付き震え始めた。

「両手を背中にまわしなさい、桃子」

私の命令に桃子は震えながら両手を背中にまわす。私は拘束具を使い、桃子の腕が二度と動かせないようきつく縛り上げた。そして、大きく開かされたまま固定された桃子の股間部分の下着とパンティストッキングをハサミで切り取り性器部分だけを露出させた。これから、地獄の苦しみを味わい処刑されていくというのに、汗と小便と愛液で汚れた桃子の性器はクリトリスを固く勃起させていた。

「まず、桃子の子宮を焼いて、それから濃硫酸で溶かしてみようか」

私の言葉に桃子は絶句し大きく震えだした。私は残酷な笑みを浮かべると準備のため桃子の性器を覗き込む。

「その前に邪魔なクリトリスと小陰唇を切除するか」

私は桃子に聞こえるように呟くと、桃子のクリトリスを摘み側面に針を当てた。

「ひぃーーーっ、怖い、怖いですぅーーっ」

桃子の悲鳴を楽しみながら私は指に力を入れた。プツッという感覚の後、針が桃子のクリトリスに突き刺さる。

「あぁーーーーっ!!」

私は桃子の苦痛を長引かせるため、わざとゆっくり針を突き刺していった。そして、充分時間をかけて桃子のクリトリスに針を貫通させる。

「さあ二本目だよ、桃子」

私は二本目の針を桃子のクリトリスに突き刺し貫通させた。

「許してくださいぃ、痛いぃぃーーーっ！！」

私は嬉々として桃子のクリトリスに針を刺し続け、十本目の針を貫通させた私は今までよりも長い針を手に取った。

「今度はクリトリスの頂点から桃子の中へ針を深く打ち込むよ」

私は桃子に告げると針を当て力を入れた。

「嫌ぁぁぁーーーーっ！！」

桃子の絶叫を聞きながら私は桃子のクリトリスに針を押し込んでいった。

「あぁぁぁーーーーーっ！！」

クリトリスを串刺しにされ泣き叫ぶ桃子の姿に私は興奮してきた。そして、桃子をさらに苦しめるため、クリトリスの先端に二本目の針を当てるとそのまま突き刺し串刺しにしていった。

「う・あぁぁーーーーっ！！」

普段大声などあげないであろう桃子が絶叫する。私は続けて三本目の針を桃子のクリトリスの先端に当てる。すでに十本の針が貫通し二本の針で串刺しにされている桃子の小さなクリトリスをまだ壊さないよう慎重に針を刺していく。

「あうぅぅーーーーーっ！！」

まだ中学生、セーラー服姿の桃子がクリトリスに十三本もの針を突き立てられ号泣している。針山になった桃子のクリトリスに満足した私はペンチでクリトリスを挟むと根本にカッターを当てた。

「さあ、桃子。まずはクリトリスとお別れだ。」

私の言葉に桃子の泣き声が大きくなる。私は笑いながらカッターを滑らすと少しずつ桃子のクリトリスを抉りとった。

「あぁぁぁぁーーーーーーっ！！」

桃子の絶叫は、こんな小さな身体のどこからでてくるのかと思うほど凄まじかった。私は小さな肉片となった桃子のクリトリスから針を抜き、桃子の口を押さえ付けその中に入れた。

桜坂桃子の性癖　後編

桜坂桃子の性癖　後編

「私がいいと言うまで自分のクリトリスをよく噛んで味わうんだ、桃子」

私の命令に桃子は目を見開き青ざめた。私はそんな桃子を残酷に見下ろす。しばらくして、桃子の口がようやく動き出した。

「自分のクリトリスの味は格別だろう、桃子」

私は泣きながら咀嚼する桃子の顔を見て、笑いながら言った。

「口を開けなさい、桃子」

桃子の口の中を覗くとクリトリスは粉々になり小さな肉片が舌の上に残っているだけだった。私は自分のモノを桃子の口に当てると、桃子の口の中に小便を注ぎ込んだ。

「飲みなさい、桃子」

桃子は咽せることなく、自分のクリトリスもろとも私の小便を飲み干した。次に私は桃子の眼鏡をはずし左目の瞼を押さえ付け目を閉じられないようにすると、そのまま桃子の左目に小便を流し込んだ。

「よく目を動かしなさい、桃子」

私の小便の中、桃子の眼球が動いている。桃子はショック状態なのか、声も出さず私の命令に従っていた。

「次は小陰唇だ、桃子」

私は桃子に眼鏡をかけ、錆びたハサミを眼前に示した。

「もう助けてくださいっ……」

ようやく声を出したセーラー服姿の桃子の姿を私は改めて眺めた。

・・もっと桃子を苦しめたい・・

泣きながら哀願する桃子の声を聞き私は自分の狂気が膨らんでいくのを感じた。そして、桃子の小陰唇を摘むとハサミを当て躊躇なくジョリジョリと切り取っていく。

「あぁぁぁーーーーーーっ!!」

私は時間をかけて桃子の左右の小陰唇を切り取った後、膣鏡を桃子の膣に根本まで挿入し大きく拡げた。さらに子宮口に鉗子を入れ子宮内部を見えるようにする。私は準備を調えると号泣している桃子の頬を打った。

「これから桃子の膣と子宮を完全に破壊する。ここからが本当の性器処刑だ。苦しむ姿を楽しませてもらうよ、桃子」

私の言葉に桃子の泣き声が大きくなる。

「これから桃子が誤って舌をかんでしまわないよう口を塞ぐが、最後に言いたいことがあれば言いなさい」

私は桃子の口元にマイクを近づけた。号泣していた桃子は涙で滲む目で私を見つめ、ようやく覚悟したように口を開いた。

「桃子は今、本当に性器を処刑されています。もう、桃子にはクリトリスも小陰唇もありません。そしてこれから、桃子はマンコの穴と子宮も処刑されるんです……。女の子の一番大事な子宮……。もうすぐ桃子は女の子ではなくなります……。中学生の女の子が、女の子の象徴で女の子の証のマンコを処刑されます……。それは、桃子が毎日オナニーしながら想像してきたこと……。それが今、現実になったんです。そして、桃子は絶命するまで苦痛を与えられ続けるんです……。もう、桃子は逃げられません。このままマンコを処刑されるしかないんです。どれほどの苦痛なのか考えるだけで怖いです。クリトリスに針を刺された時、もの凄い痛みでした。クリトリスや小陰唇を切り取られた時は、もっと凄まじい痛みでした。でもきっと、これから味わう痛みは比べものにならないほど凄まじい痛みに違いありません。それなのに、頭のおかしな桃子は今、マンコを処刑され無様に絶命した自分の姿を想像して興奮しているんです。桃子のマンコにありとあらゆる苦痛を与えてくださいっ。桃子の女の子としての証を全て壊してくださいっ。桃子はマンコを処刑されるために生まれてきたんですっ・・・・・」

号泣し喋れなくなった桃子の口を押さえ付け、私は桃子の口中に開口ギャグを挿入し固定した。そして、私は赤く熱せられた直径五ミリの焼きゴテを桃子に見せる。瞬時にその意味を理解した桃子は嫌々をするように泣きながら首を左右に振る。私は桃子の頭を優しく撫でると、桃子の股間の前にしゃがみこんだ。そして、熱せられた

焼きゴテを桃子の膣内に入れていく。

「おぉおぉおーーーーっ！！」

膣内に入れられた焼きゴテの凄まじい熱気で桃子は恐怖の悲鳴を上げる。しばらく私は、桃子の膣壁に焼きゴテを近づけたり離したりして反応を楽しんだ。そして、桃子に充分恐怖を与えた後、桃子の膣壁に焼きゴテを押し付ける。

「お、ごおぉぉぉーーーーーーーーっ！！！」

口に開口具を入れられてさえ響きわたる桃子の絶叫が心地よい。そして、桃子の膣壁からあがる焼け焦げた臭いが私をさらに興奮させる。私はすぐには焼きゴテを離さずに桃子の膣壁に押し付け続けた。

「おごおおおぉぉぉぉーーーーっ！！」

大切な膣を焼かれる桃子の苦しみは相当なものだろう。桃子は大便まで漏らし始めていた。しかし、私は二本目の焼きゴテを手に取ると、最初の焼きゴテの隣に容赦なく押し当てた。

「おばぁぁぁぁーーーーーーーーっ！！！」

再び桃子の絶叫と異臭が漂う。そのまま私はゆっくりと時間をかけ桃子の膣壁を焼き続け、十三本目の焼きゴテで桃子の膣を一周した。私は焼きゴテが冷めるのを待つ間、次の子宮処刑のための準備を始めた。先端に針の代わりに長い管が付いた注入器の中に硫酸を入れる。私はすぐにでも桃子の子宮を処刑したい衝動を抑えるのに苦労した。なんとか自制した私は桃子の膣壁に焼き付いた焼きゴテが十分冷めた事を確認し膣処刑の最終段階に進むことにした。つい先ほ

ど味わった桃子の膣が消滅する。私は興奮しながら焼きゴテの柄の部分を握り締めた。冷めた焼きゴテはしっかりと桃子の膣壁に焼き付いている。私は力を入れると焼きゴテを引き剥がした。

「おぎゃぁぁーーーーーーっ！！！」

桃子は膣壁を引き剥がされ絶叫する。私は桃子に与える苦痛を長引かせるため、ゆっくりと焼きゴテを引き剥がしていった。最後の焼きゴテを引き剥がし桃子の膣が消滅した時、桃子は虚ろな目をし放心状態になっていた。

桃子の性器処刑もいよいよクライマックスを迎えようとしていた。処刑台から開脚逆さ吊りにされたゆかりの股間を眺めながら私は笑みを浮かべた。小陰唇もクリトリスも切り取られ、膣壁も消滅した桃子の無様な性器・・。その性器の一番奥、最後に残った子宮がこれから処刑される。私は桃子の子宮口に慎重にカテーテルを挿入し、桃子が暴れても容易に抜けないようかなりの長さを子宮内に押し込んだ。

「さあ、桃子。いよいよさよならだ。これから、桃子は絶命するまで苦しみぬくんだ」

私は桃子に告げると、ゆっくりとコックを回した。カテーテルの中を硫酸が流れていく……。そして……。

「おっびゃぁぁぁぁーーーーーーっ！！！」

桃子の絶叫がいつまでも響いていた。

性人形まどか　前編

性人形まどか　前編

まどかは辺りを見渡そうとしたが首が動かなかった。そして、見える範囲に窓はなく壁はコンクリートの打ちっぱなしのようで、まどかの部屋とは違いまるで殺風景な部屋だった。その感じから地下室の様にも思えるが、なぜ自分がそんな所に居るのかまるで思い当たらない。

・・ここは、どこ？・・

それまで自室で自慰に耽っていたまどかは一瞬気が遠くなり気が付くとこの知らない部屋の中にいた。

・・動けない・・

まどかは体を動かそうとしたが、首同様まったく動かすことが出来なかった。ただ椅子の様なものに座っている感覚があった。その時、背後に気配を感じた。

「さあ、まどか。楽しい時間の始まりだ。」

男の声だった。意味が分からずまどかが戸惑っていると、背後から人が動く気配がした。そして、まどかの視界に人の姿が映った。

・・えっ・・

声から男性だとばかり思っていたまどかだったが、目の前に立つ人の姿は黒いセーラー服にやはり黒のプリーツミニスカート、そして、黒のオーバーニーソックスを着用していた。一瞬、女性かと思ったまどかだったが、その体型から女装した男性だと気が付いた。さらに頭部は白いマスクの様なものを被っているのかと思ったが、よく見ると白い綿の女性用の下着を被っているのだと気が付いた。

・・なに、この人・・

まどかは異常なものを感じ逃げようとしたが、やはり身体は動かず声も出なかった。何か薬の様なものを飲まされたのかと思ったが、まどかは自慰する際いつもドアや窓をロックしており不審者が気付かれずに侵入できるとは思えなかった。

・・助けて・・

まどかは、何か良くない事が自分の身に起こるのは間違いないという確信を覚え、助けを呼ぼうとしたが、やはり、声は出ず体を動かす事も出来なかった。
手足を縛られている感覚はないし、口も塞がれている感覚はない。
それでも、声はでないし体も動かせない。
恐怖で怯えるまどかの眼前に男の顔が近付いてくる。そして、男は女性の下着を被ったまま、まどかに口付けた。綿の下着の感触と男の唇の感触がハッキリと分かる。

・・嫌ぁ、やめてぇ・・

まどかは必死に拒もうとしたが体はまったく動かず、男はぐいぐいと唇を押し付けてくる。まどかは、この時男が被っている下着の匂

いに気が付いた。明らかに新品の下着の匂いではなかった。自分が自慰した時の匂いに似ていた。

・・この人が被っているパンティ、女の人が穿いていたパンティだ・・

まどかは、自分が穿いていた下着を被られている様に感じ顔が火照ってきていた。

・・男の人って女の子のパンティ被りたいの・・

まどかは自分の下着も被って貰いたい衝動に駈られ慌てていた。

・・えっ、どうして?・・

まどか自身、信じられないが、確かにまどかは自分の自慰で汚れた下着を男に被って貰いたいと思っていた。

・・まどかの自慰でグショグショになった下着も被ってもらえるのかな・・

こんな理解不能な状況でありながらまどかは興奮してきていた。

・・まどかの臭くて汚いパンティも被ってください・・

まどかは男にお願いしてみるが、やはりそれは伝わらない。そして、まどかにキスしている男の手が、まどかの股間に伸びていき、まどかのクリトリスを刺激し始めた。

まどかは生まれて初めて自分以外の人の手でクリトリスを刺激され下腹部が熱くなってきていた。もう、まどかの性器は激しく濡れて

きている筈であるが、男はまるで、そんな事に気が付かないようにまどかのクリトリスを擦り続ける。

・・おっ、おっ、おっ・・

まどかは声も出し始めていたが、それにも男は気が付かず、まどかのクリトリスを指で潰したり摘まんだりしながら刺激を与え続けていた。そして、指がだんだんと下に移動してきたかと思うと、まどかの膣口の周りをクルクルと刺激してから、膣内に指を入れてきた。

・・あうっ・・

乱暴に膣内に指を入れられ、まどかは思わず悲鳴をあげていたが、やはり男は気付かぬように今度は2本の指を入れてくる。そればかりか、掌を膣に入れようとしている。

・・痛いぃぃ、裂けちゃうぅぅ・・

まどかは絶叫しているが、男は構わずまどかの膣に掌をずっぽりと入れてしまい、そのままなんと、まどかの膣内で拳を握った。

・・いだいぃぃっ、誰か助けてぇぇぇっ！・・

まどかは自分の性器が男に壊されると恐怖した。

・・あぐうぅぅーーーっ！！・・

苦痛の声を上げるまどかを気にする様子も見せず、男はまどかの膣に腕ごと拳を突き入れてくる。そして、男はまどかの子宮に突き当たるまで拳を押し込んでいた。まどかは膣が裂ける激痛に失神寸前

だった。

・・もう、許して下さいぃぃ・・

まどかの必死の願いも男には届かず、男はずぼっとまどかの膣から腕を抜くと嬉しそうに口許に笑みを浮かべていた。

「さあ、まどか。いつものように処刑するよ」

男はロープでまどかの両腕を背中にまわし縛り付ける。そして、声を出せないのに何故か口にガムテープを貼られ塞がれた。

「この上に立ってもらおうか」

男はまどかを椅子の上に立たせ、自分も隣の椅子に乗りまどかの首にロープを巻く。そして、まどかの両足首もロープで縛り錘を付けられた。

・・嘘っ！嘘だよね。そんな事されたら私、死んじゃうよ・・

手も足も縛られ口も塞がれ首にロープを巻かれ椅子の上に立たされている。この状態は間違いなく首吊りにされるという事だ。まどかは半狂乱になって泣き寝入り喚いていたが、男は意に介せず粛々と作業を進めていた。

「準備ＯＫだ。楽しい首吊りいくよ」

男はなんのためらいもなく、まどかの立っている椅子を蹴り飛ばした。

・・ぶぎゃぁぁぁーーっ！・・

錘を付けられたまどかの身体が一気に下がり、まどかの首に激しくロープが食い込む。まどかの身体は、ピーンと一直線になり吊るされている。まどかは首のロープをほどこうと必死に両腕を動かそうとするが、厳重に縛られている両腕は動かす事は出来ない。

「首吊りにされているまどかちゃん、最高だよ。まどかちゃんも自分の首吊り姿、見るかい」

男は楽しそうにまどかの前に全身が映る大きな姿見を置く。そこに映る自分の姿を見てまどかは驚愕した。

・・だ、誰っ・・

鏡の中には見た事もない少女が首吊りにされていた。まどかは薄れていく意識の中で、何が起こっているのか理解しようとするが、考えがまとまる前にまどかの意識は暗い闇に堕ちていった。

性人形まどか　中編

性人形まどか　中編

・・はっ・・

まどかが気が付くと、そこは見慣れた自分の部屋の中だった。自慰していた時のままベッドの上に寝ている。

・・夢、夢だったの・・

それにしてはリアルな夢だったと思う。実際に自分の身に起こった事のように感じられる。首吊りにされた時の恐怖と絶望を思い出すと身体が震えてくる。壁の時計を見ると自分が自慰を始めた時から1時間程経過している。

・・1時間も寝ちゃったの・・

自慰の最中に寝てしまうなど考えられなかったし、自分の性器に違和感がある。性器に何か大きな物が突き入れられていた感覚だ。

・・どういうこと……・・

まどかは自分の性器に触れてみて自分が漏らしてしまっている事に気が付いた。下着がぐっしょりと濡れており、ベッドのシーツにも染みが出来ている。

・・ええっ私、漏らしちゃったの・・

全然覚えがなくまどかは戸惑うことばかりだった。それからも、この変な夢について自分なりに考えてみるが納得のいく結論が浮かばなかった。

・・そういえば、あの最後に鏡に映った人は誰だろう。人というより人形みたいに見えたけど……・・

まどかは考えても分からない為、しょせん夢だよねと考える事にした。

★　★　★　★

翌日、学校から帰ったまどかは自分の部屋でネットで昨日の夢について調べていた。やはり、どうしても気になっていたので、自分と同じ体験をした人がいるだろうかと思ったので夕飯まで調べてみたが、それらしい情報は得られずまどかはモヤモヤした気持ちのままだった。

・・もう、こんな時はオナニーして気持ちよくなるのが一番だよ・・

夕飯を食べ終わったまどかは部屋のドアに鍵をかけ、さらに窓のロックも確認する。

・・ちゃんと鍵閉まっているし、これなら大丈夫だよね・・

まどかは万が一を考えて慎重になっていた。そして、ベッドに横になり足を開き股間に手を当てた。

★　★　★　★

・・えっ……・・

気が付くとそこは昨日と同じ地下室のような部屋の中だった。

・・どうして?また夢なの・・

訳がわからず動揺しているまどかの前に、昨日と同じセーラー服を着た男が現れる。女性の汚れた下着を被っているのも同じだ。

・・なんなのこれ、どうしてこんなにはっきりしてるの・・

まどかはまた声を出そうとしても出せず、動こうとしても動けなかった。まどかは目の前にやって来た男が手に持つ物を見て嫌な予感がした。男の右手には鋭く光る針が握られていた。そして、左手にはその針が大量に納められている箱を持っている。

「今日はまどかちゃんのきれいな胸の膨らみを針山にしてあげるからね。どうせ声は出せないけど口を塞いでおくよ。その方が気分がでるからね」

男はまどかの口に自分が被っていた下着を押し込んで、さらにその上にボールギャグを押し込みベルトできつく固定してしまった。

・・ふぐっ、ふぐうぅぅっ・・

まどかは恐怖で泣いていた。しかし、男は構わず針を持った手を近付けてくる。そして、まずまどかの乳首の横に針先を当てた。

「いくよ、まどか」

男は針先に力を入れていく。

プツッ

・・ふぐうぅぅーーっ！・・

小さな音とともに針がまどかの乳首に突き刺さっていた。そして、男はさらに力を込める。

プツッ

・・ふぐうぅぅーーっ！・・

針先がまどかの乳首の反対側に突き抜けていた。まどかは乳首を針で貫通されていた。しかし、それで終わりではない。男は今度はまどかの乳首に交差するように十字に針を貫通させた。

・・ひぎいぃぃーーっ！・・

男は、まどかの乳首に十字に突き刺さり貫通する針を眺めて楽しそうに笑っている。男はまどかの反対側の乳首にも同じ様に十字に針を貫通させ残酷に微笑んでいた。そして、次の針を持つ。

「さあ今度はまどかちゃんの中へ深く刺し込むよ」

まどかは目を疑った。男はまどかの乳首の頂点に針先を当て突き刺そうとしている。針の長さは5センチ程もある。まどかは、まさかと思ったが男はまどかの想像通りそのまま針を突き刺してきた。

・・ふごうぅぅーーーっ！・・

まどかの乳首の頂点から、まどかの中へ深く針を突き刺していく。

・・痛いぃぃっ、許して下さいぃぃっ！・・

まどかは絶叫するが、男は針を全てまどかの中へ深く突き刺してしまった。焼けるような痛みがまどかを襲うが、男は構わず反対側の乳首にも同じ様に針を刺していく。

・・はっ、ぶうぅぅーーーっ！！・・

まどかの瞳からは涙が大量に流れ出している筈だが、男は気付く様子もなく次の準備にかかっている。

「じゃあ、針山にしていくね」

男はまどかの胸の膨らみに次々に容赦なく針を刺していく。その数はもう十本を優に越えているが男は執拗にまどかの胸に針を刺し続ける。そして、数十本の針を刺されたまどかの胸の膨らみは、文字通り針山になっていた。

・・誰かぁ、助けてぇぇ・・

二つの胸の膨らみを針山にされたまどかは号泣しているが、男のまどかに対する拷問はまだ終わらない。男はまどかの足を開かせ、閉じられないように固定する。そして、針の入った箱を持ったま、まどかの股間の前にしゃがみこむ。男の狙いは明らかだった。

・・ひいぃぃーーっ、お願いします。そこは許して下さいぃぃっ・・

まどかは必死に願うが、当然、男はまどかの願いなど気付きもしない。

「次はここだ。胸の倍は針を刺してあげるからね」

男は楽しそうに笑うが、まどかは大きくぶるぶると震えていた。これだけまどかの体が震えていれば当然男は気付くものと思われるが、男は一切気付いた様子もなくまどかの性器をくぱぁと開ける。

「動画なんかでは小陰唇に針を刺しているけど、それだけじゃ詰まらないから、膣前庭窟からまどかの中に深く針を刺すよ」

男はまどかの膣と尿道の間に針先を当てると押し込んでいった。

・・ひぎぃぃぃーーーっ!!・・

男は針を根本までまどかの性器に突き刺してしまう。

・・お願いします。何でもしますから本当にもう許してください・・

まどかは泣きながら懇願するが、男は2本目の針をまどかの膣前庭窟に突き刺していく。そして、続けて3本、4本、5本。容赦がなかった。男はまどかの性器を胸以上の針山にしていく。

・・あっ、びゃあぁぁぁーーーーっ！！！・・

まどかは膣前庭窟だけでなく、尿道や膣の中にも針を刺され絶叫し続けている。そして、男は箱の中にあった１００本以上の針をまどかの性器に全て突き刺していた。

・・あうぅぅぅーーーっ・・

まどかは胸と性器を針山にされた無惨な姿で呻き声をあげているが、男はそんなまどかの姿を興奮したように眺め、自分の硬く勃起した性器をしごいていた。

「ああ、まどかちゃんのその姿、最高だよ。ああ、もう出ちゃうよ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

男の性器から飛び出した精液がまどかの顔にかかるが、まどかは自分の胸と性器のやけつく痛みにそれどころではなかった。

「まどかちゃん、まだ終わりじゃないよ。もっと酷い事をしてあげるからね」

そう言うと男はまどかの体を軽々と持ち上げ運んでいく。まどかの涙で霞む目に三角木馬の鋭い鋭角が映った。普通に跨がらせられても相当な拷問であるのに、まさかこの針山にされた性器のまま……。まどかは必死に暴れて逃げようとするが、やはり体は動かず、男に三角木馬に跨がらせられてしまった。まどかの針山の性器の割れ目に三角木馬の鋭い鋭角が激しく食い込む。

・・あっ、びゃあぁぁぁーーーっ、ぢぬうぅぅーーーーっ！！・・

股間から脳天に突き抜ける激痛にまどかは小便だけでなく大便まで漏らしていた。が、男はそれで終わりにせず、まどかの足首に錘を取り付けていく。一つ１０キロの錘をそれぞれまどかの両足にぶら下げ、さらに錘を追加していった。まどかは片足に計３０キロもの錘を付けられ、まどかの性器に三角木馬の鋭角が激しく食い込んでいる。まどかはもう白眼を剥いて失神寸前だった。

「あはは、いいねぇ。まどかちゃんのマンコに凄く食い込んでいるよ。胸の方も、もっと痛め付けてあげるからね」

男は鞭を持つとまどかの針山にされた胸に強烈な一撃を叩き込んだ。そして、容赦なく続けて鞭を叩き込む。

バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ、バシィッ！！！

針山にされた性器で三角木馬に跨がらせられ錘も付けられ、さらに針山にされた胸を激しく鞭で打たれ、まどかの意識は遠くなっていった。

性人形まどか　後編

性人形まどか　後編

まどかは自分が小便と大便を漏らしている事に気がついて茫然としていた。

・・またあの変な夢見て漏らしちゃった・・

まどかは、あれを変な夢だと思っていた。妙にリアルであるが、殺されたと思った自分がこうして生きていること事態が、夢であることのなによりの証拠である。そう信じていた。

・・なんで、こんな変な夢を見るようになったんだろう・・

まどかは夢を見始めてからの事を考えるが、思い当たる事はなかった。

★　★　★　★

まどかは戸締りをしっかり確認し、また自慰に耽っていた。すると、また意識がすうーっと遠くなる。

・・今日もまたあの夢なの・・

まどかは、もうすっかり慣れてしまっていた。そして、まどかの予想通り、何時もの殺風景な部屋の中でまどかは動けずにいた。今回は開脚されて逆さに吊られているようだった。そして、女装したいつもの男が現れる。女性の下着を被っているのも同じだ。

・・また私を痛めつけるつもりなんだ・・

まどかは覚悟したが、その一方で今夜はどんな風に私を処刑するんだろうと期待している自分に気付き、ぎょっとした。

・・嘘だよ。私、期待なんてしていない。処刑されるの期待するなんてあり得ないよ・・

まどかは自分で自分を否定するが、男は充電式の電動チェーンソーを手に持って近付いて来る。

・・あれで私のマンコ切断するつもりなのかな・・

開脚逆さ吊りにされている事からまどかは、性器をチェーンソーで切断される自分を想像していた。

・・マンコ切断されるって、どれくらい痛いんだろう・・

そんな想像をしているうちに、まどかは自分の性器が熱くなり濡れてきているのを感じていた。

・・違う、嘘。私、マンコ濡らしてなんかないよ・・

まどかは自分がこんな事で性器を濡らすなど信じたくなかった。し

かし、まどかの本能は男に早く性器を切断して貰いたくて疼いていた。そして、まどかの気持ちも、だんだん侵食されてくる。

・・いひっ、いひっ、マンコ斬って、早くそれで私のマンコ切断して下さい・・

まどかは腰を突き出して、男に早く性器を切断して貰いたいという意思表示をしようとしたが、いつものように体は動かなかった。男はそんなまどかの気持ちなど気付く気配もなく、ゆっくりと近付き、まどかの正面に姿見を立てる。鏡の中には全裸の少女が開脚逆さ吊りにされている姿が映っているが、それはやはりまどかではなかった。それどころか、まどかが良く見ると、その少女は人間ではない。リアルに作製された人形であった。

・・えっ……。人形……・・

前に見た時も人形のようだと感じていたまどかだったが、本当に自分が人形になっている事に驚愕していた。

・・夢の中で私は人形になっているの？・・

まどかが戸惑っていると、男が前のように被っていた下着を取りまどかの口に押し込んでくる。さらに例によってガムテープで念入りに口を塞ぐ。人形であるまどかが声を出せる筈がない。それでも口を塞ぐのは男の趣味以外の何者でもないとまどかは感じた。その男の顔がまどかの目の前にある。まどかは男の顔が目に焼き付いていた。そして、男はまどかの背後にまわると、まどかの性器の上にチェーンソーを構えスイッチを入れた。

キュイーーン

チェーンソーの刃が高速で回転しまどかの性器に迫ってくる。

・・ふごっ、ふごっ、ふごっ・・

鏡の中で自分の性器に迫ってくるチェーンソーを見ているまどかの息が荒くなってきていた。そして……。

・・ふんがぁぁぁーーーーーっ!!!・・

まどかは絶叫していた。チェーンソーがまどかの割れ目に食い込みバリバリと切断していく。その激痛は筆舌に尽くしがたい。性器を切断されるのだ。それも当然といえた。もう、クリトリスも会陰も真っ二つに裂かれ、まどかの割れ目は本当の割れ目になっていく。

・・ひぎゃぁぁぁぁーーーーーっ!!!・・

まどかは性器から切断されていく激痛に発狂したように絶叫していた。それはもうとても耐えられる苦痛ではない。まどかの膣も尿道も肛門も全て切断され、もうチェーンソーはまどかの恥丘まで切断していた。

・・あぶぶぶぶぶぶぶぶぶぅぅぅぅっ・・

まどかの意識はだんだんと遠くなっていく。もう、まどかは子宮まで真っ二つに切断されてしまい、ビクンビクンと激しく死の痙攣を始めていた。

・・あぴゃぁぁぁっ・・

胸まで切断されたまどかは、そこで意識を失ったが男はそのままどかを切断していく。そして、頭まで完全に真っ二つに切断してしまった。

「ほら、まどかちゃん。マンコから真っ二つになったよ。嬉しいかい」

男は左右に別れてぶらぶらと揺れているまどかの体を見ながら、自分の性器をしごいていた。そして、ドピュッドピュッと切断されたまどかの体に精液を飛ばし、満足気に残酷な笑みを浮かべていた。

★
★
★
★

まどかはベッドの上で気が付いた。体はべっとりと汗で濡れている。凄まじい夢を見たとまどかは感じて、まどかの体はまだぶるぶると震えていた。本当に自分の体が性器から切断されたような感覚がまだ残っている。まどかは自分の股間に手を当て、そこにある性器を確認していた。

・・本当にマンコから切断されて処刑されたようなのに、マンコは無事だよね。あまりにリアル過ぎて怖いよ。まさか正夢なんて事ないよね。もし、正夢なら私、マンコから切断されて殺されちゃうんだ・・

そんな想像をしているうちに、まどかの性器は濡れ始めていた。

「あっ……」

まどかは、たった今の性器から切断される夢の激痛を思い出しながら自慰を始めていた。

★　★　★　★

学校からの帰宅途中、駅の西口の階段を降りたロータリーでまどかは驚愕していた。バスを降りまどかの方に歩いてくる人波の中に忘れられない顔を発見したのである。そう、あの夢に出てくる女装した下着を被った男である。下着を取った男の顔が目に焼き付いているまどかは自分の目を疑った。

・・あれは夢だよね。なのにどうして実際にあの時の男の人がいるの・・

男は立ち尽くしているまどかの顔を邪魔だというようにチラリと見たが、そのまま脇を通り過ぎていった。

帰宅したまどかは自分の部屋に入り考える。
―あまりにリアルな夢―
―夢と同じ顔の男が現実に存在するー
―男は人形を〝まどか〟と呼んでいたー
そこで、まどかは仮説をたてた。あれは夢ではなく実際に行われていた事ではないか。まどかと同じ名前で呼ばれていた人形に、まどかの意識が入り込んでしまった。男は人形に対してあのような酷い行為をして興奮していたのではないか。そう思うと声も出せず体も動かせない事も納得がいく。どのような〝力〟が働いたのか定かではないが、きっとそういう事だとまどかは確信した。

まどかは、その日は自慰をせずに過ごし次の日に行う計画を考えていた。

翌日、駅の西口の階段を降りたまどかは、バスから降りてきた男に声をかける。男は驚いていたが、まどかのあなたの秘密を知っていますという言葉で顔がひきつり、まどかの言うがままに近くの公園まで着いてきていた。こうして大人しく着いてくること自体、やましい事のある証拠だろうとまどかは確信した。
公園のベンチに座ったまどかは単刀直入に話し出す。

「あなたの変態行為はみんな知っています。それを誰にも言わない代わりに私の言うことをきいて下さい」

まどかは男がどう答えるのかドキドキしていた。

「僕の何を知っているのですか」

案の定、男はまどかの言葉をそこまで信じてはいないようだった。

「知っていますよ。あの窓のない殺風景な部屋であなたが何をしているのか。セーラー服、似合いますね。それに、女の子の下着の匂い、好きなんですね」

男の顔に恐怖の色が浮かんでいた。誰も知らない筈の自分の秘密をなぜこの女子高生は知っているのか。男は口を開けたまま言葉が出せなかった。まどかはニヤリと笑みを浮かべていた。やはり現実にこの男はあの変態行為を行っていたのだ。まどかの意識が人形に宿っていたとも知らずに、人形に変態行為を行っていた。まどかは男にされた行為を思い出し性器が濡れてきていた。

「私の命令に従えば、あなたの秘密は誰にも言いませんよ。でも、従わないならネットに拡散します。どうなるか、分かりますよね」

青ざめた顔で頷く男にまどかは微笑みながら命令する。

★
★
★
★

それから、まどかは男の地下室で自分の性器を調教してもらい絶頂に達する日々を過ごしていた。

「あひゅ、あひゅ。もっとマンコを鞭で打って」

「まどかちゃん、このスマホに僕の秘密が全て書かれているんだね」

「そうよ、分かったら早くマンコ鞭で打ちなさいよ」

男はニヤリと笑うと、まどかのクリトリスに用意していた注射器の針を突き刺し薬を注入する。

「うひいぃぃぃーーーっ」

まどかはクリトリスに針を刺され絶頂を迎えて潮を吹くと失神してしまった。

「あれっ、失神するなら薬射たなくても良かったな」

男は頭を掻きながらまどかの手足を縛り、目と口も塞ぎスーツケースに入れ鍵をかけた。そして、どこかに電話すると、しばらくして

現れた男にスーツケース毎まどかを手渡していた。

「バカな女だ。秘密の在処を喋ったらダメだろう。そんなにマンコ痛め付けて欲しいなら、それにふさわしい処に送ってやるよ。そこで、マンコ壊してもらいな。もう二度と会うことはないだろうね。僕の大好きなまどかちゃんは、我が儘など言わない大人しい良い娘だからね」

男は、ドールのまどかを抱き寄せると口づけしていた。そして、嬉しそうにドールのまどかの性器に針を刺していた。

★
★
★
★

まどかが気が付くと全然知らない場所にいた。あの殺風景な地下室と異なり、豪華で広い部屋の中だ。まどかが周囲を見回していると数人の男が入ってきてまどかを立たせ足を開かせて押さえつける。そこへ無表情なメイドも入ってきた。まどかは、ここがどこで、自分が何をされるかも分からず、声も出せずにいたが、入ってきたメイドはまどかの前にしゃがみこむ。

「番号札を付けさせて貰います。かなり、痛いですよ。暴れるといけないので皆さん、よく押さえつけておいて下さいね」

メイドの言葉の後にまどかのクリトリスに激痛がはしった。

「あびゃあぁぁぁーーーーっ！！」

メイドはまどかのクリトリスに安全ピンを突き立てていた。そして、

そのまま安全ピンでクリトリスを貫いていく。

プツゥッ

小さな音がして安全ピンは反対側に突き抜け、まどかのクリトリスは貫通されていた。

「ひぐっ、ひぐっ」

まどかは涙を流し泣いているが、まどかのクリトリスを貫通した安全ピンには番号札が下げられており、その番号札には”６７”と大きく書かれていた……。

性人形まどか　後編（後書き）

クリトリスに番号札を付けられてしまったまどか。
これから、どうなるのか。
６７番という数字にピンときた方は、この後まどかがどうなるか想像出来ると思います。
もう、まどかは……。

図書委員真由子の最後　1

図書委員真由子の最後　1

三つ編みお下げを左右に二本たらした黒く長い髪、広い額に太い眉、メタルフレームの眼鏡の下には一重瞼の伏せ眼がちの目。全体的に地味で大人しそうな顔。襟と袖口だけ深緑の白い半袖の夏服セーラー服に、同じく深緑でプリーツの入った膝上三十センチはあるミニスカート。そして、夏だというのに黒いパンティストッキングを穿き、さらにその上に太ももまで覆う白いオーバーニーソックスを穿いた真由子。通っている全寮制の女子中学校では図書委員を務めいつも本に囲まれており、寮の個室でも本を読んだり自分で小説を書き部屋からほとんど出ないという真由子。私の真由子に対する第一印象は、優等生だが運動や人付き合いは苦手で親しい友人もおらずいつも一人で本を読んでいるのが好きな真面目で大人しい文学少女というものだったが、真由子はまさに印象通りの娘であった。初めて対面した真由子は俯きながら私に自分の書いた小説の原稿を恥ずかしそうに手渡した。

「真由子の書いた恥ずかしい小説です。絶対服従をお誓いした支配者様にお見せするために今まで書きためた小説の中から一番本当の真由子が解っていただけると思うものを持ってきました。真由子の書く小説は全て真由子自身が登場して、その時の真由子の気持をそのまま書いていきます。ですから、真由子がどんなに変態で頭がおかしくて生きている価値のない女の子なのか、お読みになればご確認できると思います。」

私は真由子から手渡された原稿のタイトルを見た。

【超変態女子中学生性処刑願望白書
ー眼鏡ブス娘真由子の女性器完全破壊ー】

タイトルだけでもこの小説が尋常ではない作品であることを物語っている。私は、耳まで赤くし身体を細かく震わせながら、姿勢を正しきちんと揃えた膝の上に両手を置き椅子に座っている真由子を一瞥した。どこから見ても不細工だが真面目で大人しい優等生に見える真由子が、その心の中には極度の変態性を隠しこのような小説を書いている。それはまさに私にとって好みの容姿と性格であった。私は真由子を見つめながら自分のものが固くなっていくのを感じながらページをめくった。

★
★
★
★

序章　変態眼鏡娘真由子の独白

真由子はブスで性格も暗くスタイルも悪いうえに頭もおかしな中学生の女の子です。学校では真面目で大人しく目立たない生徒と思われていますが、それは真由子が本当の姿を隠すために演じているだけで、実際は時間がある限り変な行為を妄想してオナニーばかりしている変態中学生です。この小説は私・真由子がオナニーの時はもちろん、常日頃から妄想している願望を活字化したものです。頭のおかしな真由子がどんな妄想をし、女の子の敏感な三つの突起を固く勃起させ性器から恥ずかしい液を垂れ流しおしっこまで漏らしているのか・・。きっと読み進むにつれ、真由子が生きている価値が

ない処刑されるべき女の子であることがはっきりわかる事と思います。

以下に真由子の嘘偽りのない特徴・性癖を記しておきます。

頭部・・髪は黒くて長いです。常に三つ編みお下げにしています。ブスで根暗の真由子にはこの髪型が一番だと信じています。丸顔で眉毛が太くて眼鏡をかけ一重の目に小さな鼻と口、お化粧が似合わない野暮ったい顔です。そして、童顔のうえ、いつもオドオドしたブス顔だと思います。

身体・・腕は細くて胸も膨らんでいません。そのうえ寸胴で下腹が膨らんでいます。お尻は小さく、足は太めというブスの真由子に相応しい無様で惨めな身体です。

身長も百四十三㎝と小さいので中学校のセーラー服を着ていても小学生と思われてしまいます。幼児体型と言えば聞こえはいいですが、とにかくブスな真由子の場合、ブス顔に合わせた未成熟の身体です。

服装・・頭のおかしな真由子にとって、まるで処刑される時の制服のように感じられるセーラー服は大好きです。真由子の貧弱で無様な体型を強調してくれるレオタードやスクール水着も大好きです。身体のラインをそのまま出すので、真由子の成長していない惨めな身体を笑っていただけるようで興奮してしまいます。さらに真由子はわざと小さめのサイズを購入して身体を締め付ける拘束感に興奮しています。

レオタードやスクール水着は真由子がオナニーする時の服装です。そして、どちらの時もパンティストッキングは必ず着用します。色はほとんど黒ですが、たまに白も着用します。そして、真由子はレオタードやスクール水着の上に下着を穿くんです。真由子の変態さが強調されるようで好きなんです。

ブラは白いスポーツブラです。真由子は胸が膨らんでいないため普

通のブラは着けられないんです。そして、パンツ。ゆかりは綿１００％で白くて無地のロリータパンツしか穿きません。おへその下まで覆うこの大きなパンツが真由子の無様な体型には一番似合うと思います。

自慰・・真由子は本当に毎日時間がある限り何度もオナニーしています。オナニーしながら妄想をどんどん膨らませていくことがブスで誰にも相手にされない真由子には一番楽しいことなんです。

前述のようにオナニーする時はパンティストッキングとレオタードやスクール水着を着用し、その上にパンツを穿きオーバーニーソックスも身につけます。そして、それまで穿いていた汚れて染みが付いたパンツのクロッチ部が鼻と口に当たる様にしてパンツを被り、両腕を後ろ手に自縛します。その時の気分で汚れた下着を口に押し込んでからパンツを被る場合もあります。これだけでも真由子は股間に恥ずかしい染みを作ってしまいますが、部屋に渡した結び目を作ったオナニー用のロープに跨り、自分の惨めな姿や処刑される姿を妄想しながら歩きます。あまりの刺激にお漏らししてしまったり、失神してしまった事もあります。失神から気付いた時は、このまま自分が意識を回復しないでこの姿のまま発見されたらどうしようと考え、またオナニーしたくなりロープに跨ってしまいました。

性格・・真由子の本質は陰険で陰湿、残酷で淫乱のうえ、被虐願望や処刑願望を持つ生きている価値がない性格です。それを隠す為、学校では真面目なふりをしています。もし、処刑の願いが叶わなかった場合は、女の子として人間としての人格・尊厳を全て破棄され性処理の道具として扱われるのがいいなと考えたりします。例えばこの様な扱いになります。まず真由子は歯を全て抜かれ乳首とクリトリスと小陰唇にピアスを装着されます。さらに胸と恥丘とおしりに焼き印を押され手足も切断された真由子は、ロボトミー手術も施され脳も弄られてしまいます。そして、口と性器とおしりの穴を毎

日休む間もなく犯され続けます。それで、そのうち飽きられてしまった真由子はゴミと一緒に焼却場に投げ込まれ焼却されます。頭のおかしな真由子はこんな事ばかり考えているんです。

性器・・真由子にとっても女の子にとっても一番大切で大事なところです。真由子の未成熟な身体の中で性器だけは女の子として発育しているように感じます。真由子の性器の中身ははまだ桜色ですが毎日オナニーしおしっこを漏らしたりしているため臭くて汚いです。パンツにもイヤらしい染みがすぐできてしまいます。でも、ブスで暗くて誰からも相手にされない真由子にとって性器は唯一つ価値がある場所だと思います。真由子の望みはこの大切な性器を残酷に処刑していただいて、真由子が恐怖と苦痛と絶望で身体をビクンビクンと痙攣させながら絶命する姿を楽しんでいただくことです。真由子の唯一の希望である女の子の証の性器を徹底的に処刑していただく。真由子は性器と女の子の身体を提供し処刑を楽しんでいただくために生まれてきたのだと思います。

そこでいわゆる序章は終わっていた。その後には、ワープロで作成したと思われる書類が、章の間に挟まれていた。

《性器処刑同意書》

そう、印字されていた。

図書委員真由子の最後　2

図書委員真由子の最後　2

私は、その挟まれている用紙にも目を通してみた。
用紙の下部には注釈と、印字ではない直筆のサインと印が捺してある。その注釈は下記のようなものだった。

（注）この同意書は間違いなく武藤真由子本人が作成記入したものになります。

そして、その注釈の下にサインと印がある。私は改めてワープロで作成された書類を確認した。

《性器処刑同意書》

一、私、武藤真由子は性器を処刑していただく事に同意致します。

一、性器とはクリトリス・小陰唇などの外性器、膣・子宮・膀胱などの内性器、その他真由子の女の子の証といえる全ての部分を含みます。

一、本同意書提出後、真由子の人格は破棄され、女の子の形をしたモノとして扱われる事に同意します。

一、性器処刑執行後真由子が絶命していない場合、さらなる処刑が執行され、真由子が完全に絶命するまで女の子の身体を破壊され続ける事に同意します。

以上。

★　★　★　★

私は目の前の真由子を再び見つめた。この野暮ったく真面目な優等生に見える真由子の中にある狂気。真由子の願望であり本心であるというこの小説。私は当初あまり期待していなかったがどうやら楽しむことができそうだと感じ嬉しくなった。まったく一体どうしたら、ここまで変態の女子が出来上がるのか。私は、ふとそんな考えが頭に浮かんだが、すぐに頭から追い出した。そんな事はどうでも良い。私の目の前の女子が、それを望んでいる変態女子という事だけで充分だ。私は真由子の書いたという作品に目を通した。

★　★　★　★

一章　真由子膣爆破

オナニーしか経験のないまだ十三才、中学生の真由子がとうとう処女膜を破壊されることになりました。太ももまで覆う白いオーバーニーソックス以外全裸にされた真由子の両腕が背中にまわされきつく縛り付けられます。そのまま真由子は性具として提供され処女膜を貫通される予定でしたが、ブスで頭のおかしな真由子に普通の女

の子と同じ行為をする価値はないという事になりました。そして、真由子の処女膜は爆竹で破壊することに決まり、両腕を縛られたまま立ち上がった真由子に、足を大きく開くよう命令されます。そして、震える真由子の膣口から爆竹が挿入され導火線が垂れ下がります。

「火を点けろ。」

冷酷な命令で躊躇無く導火線に点火され、同時に真由子には膣に力を入れ爆竹を落とさないよう命令されます。

「あ、あっ・・・」

恐怖で泣き出している真由子におかまいなく導火線はどんどん短くなっていき、ついにパンッという音とともに膣内の爆竹が破裂します。

「おぉぉーーーっ！」

絶叫した真由子の股間から煙が立ちのぼり辺りに火薬臭が漂いますが、意外にも真由子の性器から出血はありませんでした。そこで、今度は二本の爆竹が膣に入れられ点火されます。

パンッ！！

再び鋭い音が響いた瞬間……。

「おおぉぉーーーーっ」

真由子がまた絶叫し、今度は性器から血が滲み出します。しかし、

この程度で真由子が許されることはありません。処女膜破壊と共に真由子の性器を痛めつけることが面白いのですから、恐怖と苦痛で号泣し暴れる真由子の身体が押さえつけられ、いよいよ三本の爆竹が真由子の膣内に挿入されます。

「うわぁーーーっ」

涙と鼻水で顔を汚し号泣する真由子の姿を楽しみながら、導火線に火が点けられます。髪を掴まれ晒された真由子の顔は恐怖で歪みながら小さな胸では左右の乳首が固く勃起しています。その哀れな真由子の股間で三本の爆竹が破裂します。

パァーーーン!!

「うぎゃーーーーーっ」

文字通り絶叫した真由子は口から泡を吹いて失神し、性器から血が流れ出しました。

失神した真由子は仰向けに寝かされ足を開かされ性器の状態を確認されます。真由子の膣口は連続で爆破された影響で口を開けたまま煙があがり血が流れ出しています。性器の状態を確認された真由子はさらに性器を痛めつけられる事になりました。まず、失神している真由子の顔に小便が浴びせられます。覚醒した真由子にそのまま小便を飲むよう命令され、仰向けで大きく開いた真由子の口へ小便が注ぎ込まれます。咽せながらもようやく小便を飲み干した真由子の膣へ今度は五本の爆竹が入れられ、さらに尿道と肛門にも爆竹が入れられてしまいます。

「怖いですぅ、助けてくださいぃっ」

真由子は必死に哀願し抵抗しますが押さえ付けられた身体は真由子の力では動かす事ができません。そんな真由子の姿を楽しむ様に導火線に点火され、まず肛門が爆破されます。次に尿道が爆破され尿道口からおしっこが溢れ出します。そのおしっこで膣の導火線の火が消えるかと思いきや一瞬早く点火され鈍い音とともに膣が爆破されてしまいます。

「あ・びゃあぁぁーーーーーっ」

真由子の絶叫と共に膣から血が溢れ出します。真由子は虚ろな目から涙を溢れさせ口からはだらしなくよだれを垂らしたまま幼い身体をビクンビクンと痙攣させています。放心状態の真由子は、さらに大きく足を開かされ爆破され血を流す性器を晒されます。そして、真由子の性器はまだ爆破される事になりました。今度は真由子の体を十字架のような拘束台に、厳重に拘束していきます。たちまち真由子は〝人〟の字のように拘束され動けなくなりました。そして、真由子の開脚された中心、性器に膣を開口させる膣鏡が挿入されてしまいます。まだ、自分が何をされるか分からない真由子は、膣に挿入された膣鏡の金属の冷たさに息を呑んでいます。そして、それは真由子の膣の最奥まで挿入され、ネジを締められると最大に開口されてしまいます。真由子の膣の奥にはコロリとしたピンク色の子宮が顔を覗かせていました。ここまできてようやく次に爆竹で爆破される箇所を理解した真由子は哀れに泣き叫び始めました。

「お願いしますぅ。そこは許してくださいっ。何でもしますから、許してくださいぃぃっ」

しかし、真由子が許される事はありません。泣き叫ぶ真由子の子宮口に、鉗子を使い爆竹が入れられていきます。1本、2本、3本……。真由子の子宮に爆竹が5本も詰められ、導火線が捩られ真由子

の股間から垂れ下がっています。

「助けてぇぇぇっ！お願いしますぅ、死んじゃうよぉぉぉっ！！」

その号泣する真由子の泣き顔を楽しむように、膣から垂れる導火線に無情にも点火されてしまいました。

図書委員真由子の最後　3

図書委員真由子の最後　3

拘束されて子宮に爆竹を詰められた真由子の膣から垂れ下がる導火線に無情にも点火されてしまいます。真由子は狂ったように泣き叫んでいますが、導火線はどんどん短くなっていき、膣の中に消えていきます。そして……。

ボスゥウッ！！

「あっばぁぁぁぁーーーーっ！！」

鈍い音と共に真由子の下腹部が一瞬膨れ上がり、真由子の絶叫が響き渡ります。真由子の膣からは煙と血が流れ出しています。真由子は子宮を爆破されて、天を仰いだまま放心状態になっていましたが、その真由子の哀れで無様な姿が好評で、真由子はもう一度子宮を爆破される事になりました。早速、真由子の子宮に爆竹が入れられていき、今度は倍の１０本もの爆竹が入れられてしまいます。そして、今度は子宮だけでなく膣にも爆竹が入れられます。それも、１０本。それだけではありません。真由子はおしっこの穴にも３本、おしりの穴にも５本もの爆竹を入れられてしまいました。

「あばばばばばっ」

もう真由子は恐怖で喋る事も出来なくなっていました。その哀れな

真由子の姿は記念に撮影され引き伸ばされる事になっています。そして、いよいよ導火線に点火されます。

「怖いよぉ、誰か、助けてぇぇぇーーーっ！」

真由子は泣きながら必死に救いを求めますが、ついに同時に真由子の膣、子宮、尿道、肛門が爆破されてしまいます。

バスウゥゥゥッ！！

「あっびゃあぁぁぁぁーーーーーーっ！！！」

真由子はマンコを爆破され、断末魔のような悲鳴をあげると、体をビクンビクンと痙攣させ口からブクブクと惨めに泡を吹き白眼を剥いて失神してしまいました。真由子のマンコからは激しく血が滴り、煙と火薬臭が辺りに漂っています。その真由子の哀れな姿は高解像度の撮影機器で鮮明に撮影されていました。そして、真由子の頬が叩かれ覚醒させられます。

「マンコ、爆破されて嬉しいだろう。早く礼を言うのだ」

真由子は激痛がはしる下腹部の痛みに耐えながら口を開きます。

「真由子のマンコを爆破して頂きありがとうございました。とても嬉しいです。頭のおかしい真由子はマンコを処刑して頂く事が夢でした。本当にありがとうございました」

泣きながら告げる真由子だが、真由子のマンコはまだ容赦なく壊され続け、徹底的に破壊されたマンコは消滅してしまう事になります。そして、最後には真由子自身も残酷に処刑されてしまうのです。

★　★　★　★

「立ちなさい。」

私はいったん原稿から目を離すと真由子に命令した。

「はい・・」

真由子は小さな声で答え、立ち上がる。

「この作品はどのようなコンセプトで書いているのかな」

私の問いに真由子は少し言い淀んでいたが、小さな声だがはっきりと答えた。

「はい、変態で頭のおかしい真由子という主人公が容赦なく徹底的にマンコを壊されていき無様に泣き喚く姿を書きたいと思って書きました。もちろんそれは私の願望でもあります。私自身がこうされたら嬉しいなと思っている事を書きました」

「そうか……」

私は頷き、再び真由子に命令した。

「スカートを捲り、足を大きく開きなさい。」

私は真由子に命令する。

「・・はい・・」

消え入りそうな声で答えた後、真由子はプリーツスカートの裾に手をかけゆっくりとめくっていく。真由子の手が上がるにつれ太ももが晒され次に白い綿の下着が露わになっていく。そして、ストッキングの上に穿いたへその下まである大きな白い綿の下着が私の目の前に晒される。その子供の穿くような下着が小説内で真由子自身が語っているように真面目な真由子には似合っていた。

スカートをめくり上げた真由子はゆっくりと足を開きはじめ、立っていられる限界まで大きく足を開いた。私は真由子の股間に顔を近づけ、真由子の臭いを嗅ぐ。小便と汗の臭いに混じり、まさに真由子の臭いが私の鼻を突く。その匂いは非常に好みの匂いだった。私はそのまま真由子の下着のクロッチ部をめくってみた。

「あっ・・・」

真由子は小さく声を出し、わずかに腰を引いたがすぐ元の姿勢に戻った。

黒いパンティストッキング越しに見える真由子の性器。私はストッキングを破くことを躊躇したが、真由子の味を味わいたい衝動に駆られ慎重に真由子の性器だけが露出するようストッキングを切り裂いた。私は真由子の桜色の小陰唇を指で開き、真由子の性器の中身を観察する。小陰唇同様まだ桜色の膣前庭窟の上部で真由子の敏感な突起が固く勃起している。そして、真由子の二つの穴、尿道口・膣口ともまだきれいな状態だった。私は真由子の性器に口を付け溢れ出した真由子の愛液をすすった。

「あっいやっ。汚いですっ。真由子のマンコ、汚いですぅっ」

真由子は自分の性器を舐められた驚きで腰を引こうとした。こういうところはまだ中学生だと感じる。私は真由子の性器から口を離すと立ち上がり、顔をまっ赤に染めている真由子の頬を打った。そして、真由子の眼鏡をはずすとさらに強く真由子の頬を打つ。

「ひぃぃっ・・」

怯える真由子の髪を掴み、私は真由子の頬を打ち続けた。真由子の目からは涙が溢れ出ている。いつしか私は真由子の泣き顔に興奮し、平手ではなく拳で殴りつけていた。真由子は左頬が腫れあがり、鼻と口からは血を流している。

「可愛いよ、真由子。」

私は真由子の無様な姿がたまらなく愛しくなってきた。そして、私が真由子の口に口吻すると、真由子は私に全てを捧げるように抱きついてきた。

「さあ、真由子。両手を上げ、大きく足を開きなさい。そして、何があっても動かないように。」

私は真由子を離し、眼鏡をかけてやると命令した。

「は、はい・・。申し訳ありません・・。真由子、女の子のマンコを味わっていただく事は大事な事だと分かっていたのに、真由子の汚いマンコを味わっていただけるなんて想像もしていなかったんです・・」

真由子は泣き声で言うと私の命令通りスカートから手を離し、大きく足を開いた。私はスカートの中に頭を入れると再び真由子の性器

を味わう。
私はゆっくりと時間をかけ、クリトリスを舐め吸い噛み、尿道口を舌で刺激し膣口には舌を突き入れ真由子の性器を、真由子の味を味わった。

「お、お、お、お……」

真由子は初めての経験に声を上げ始めている。私は立ち上がると真由子の膣口から膣内に自分の持ってきたある物を入れた。

「あっ……」

真由子は自分の膣内にいきなり入ってきたモノに驚き声を上げた。
私は真由子に見えるように左手で摘んだ細い糸状のモノを見せた。
真由子はそれが何かわからず困惑している。私はさらに右手に持ったライターを見せ、ライターの火を点けた。それにしても、こんな偶然もあるものなのだ。私が用意していた物が、この真由子の書いた作品の中に登場してくるとは……。この偶然に私は運命を感じずにはいられなかった。

「う、うそですぅ……」

真由子はようやく自分の膣内に入れられたモノが何かわかり震えだした。

「最初は一本だ。何も心配しなくていい。そうだろう、真由子。真由子も書いているじゃないか。それにこれは真由子も望んでいた事だろう」

青ざめる真由子に私は命令する。

「そのままの姿勢で動かないで膣に力をいれなさい。入れられた物を落とさないようにな」

「うっ、うっ、うっ、うっ……」

ぶるぶると震えながら泣き出した真由子にかまわず私は導火線に点火した。そして、震えながらも自分の体に起きる衝撃に耐えようと上げた両手を固く握りしめて立っている健気な真由子の姿を眺めていた。

図書委員真由子の最後　４

図書委員真由子の最後　４

泣き出した真由子にかまわず私は導火線に点火した。真由子は頭上に上げた両手を固く握りしめ両目をつむり泣いている。真由子の開いた足の中心にぶら下がった導火線が短くなっていきスカートの中に消えた。その次の瞬間。

パンッ！！

「あぁぁーーーーっ！」

爆竹が破裂した乾いた音に続き真由子の悲鳴が響き渡った。私が真由子のスカートをまくってみると、真由子の股間から煙が上がり火薬臭が鼻をついた。

「これで終わりじゃないぞ、真由子。分かっているだろう」

私は次に三本の爆竹を揃えて真由子の膣内に挿入しようとしたが、性経験のない真由子の膣内にはなかなか入らない。

「痛い、痛いですぅ・・」

真由子は無理矢理挿入される爆竹に声を上げる。

「四つん這いになり尻を突き出しなさい、真由子。」

私は真由子に命令し、四つん這いなった真由子のスカートをまくり一本ずつ真由子の膣内に爆竹を入れていった。そして、三本だと隙間ができたので四本の爆竹を真由子の膣内に挿入した。

「立ちなさい、真由子。」

私は立ち上がった真由子の両腕を高手後手に縛りあげ、足を大きく開くよう命令する。

「怖い、怖いですぅ・・」

震える真由子の姿を楽しみながら私は導火線に火を点けた。

「いやぁーこわいですぅーーっ」

悲鳴を上げた真由子の股間から湯気を立てて透明な液体が溢れ出す。真由子は恐怖のあまり失禁していた。私は真面目で優等生の真由子が小便を漏らす姿に見入っていた。小便はセーラー服のスカートやストッキング、オーバーニーソックスを濡らし、真由子の足下に溜まっている。導火線の火は消え、おそらく爆竹の火薬も濡れているだろう。

「も、申し訳ありません・・。せっかく楽しんでいただいていたところでしたのに・・」

真由子は涙が溢れる目で私を見つめ謝罪した。私はそんな真由子の眼前に直径一㎝ほどある大きな爆竹を見せた。一本で通常の爆竹の五本分の火力はある。

「ひっ・・」

思わず真由子が息をのむ。私は笑みを浮かべ真由子のスカートをまくると湿った爆竹を膣から取り出し、新しい爆竹を防水紙に包み真由子の膣口に当てた。そして、一㎝程度膣口から頭を出す位置まで挿入した。

「今度は小便で消せないな、真由子。」

私は恐怖で言葉もない真由子に声をかけ点火した。

「あ・あ・あ・あ・・」

遠目からでもわかる程震える真由子の股間に向けて導火線がどんどん短くなっていく。そして、スカートの中に消えていった。

バンッ!!

「おぉおおぉーーーーーーっ」

真由子は絶叫し、床に転がると両足をばたつかせ転がり廻った。

「あうぅぅーーー」

呻き声を上げ床を転がる真由子の上に後ろ向きに馬乗りになった私は、真由子のスカートをまくり股間の状態を確認する。真由子の性器からは煙と共に血が流れ出していた。

「さて、これから先は場所を変えようか」

私は両腕を縛ったままの真由子に首輪を付け、首輪に付いたロープを引く。

「立ち上がって私について来なさい」

首輪のロープを引かれ真由子はヨタヨタと歩いている。私は、真由子を地下室に連れ込み下着とスカートを脱がせ拘束台に固定していった。そして、真由子の性器が露出するように大きく足を開かせて縛りつける。真由子の性器は隠すものがなくなり、その割れ目を晒していた。私は涙を流している真由子の口に、私の汚れた下着を詰め込み、さらにその上からボールギャグを噛ませ口を塞いだ。そして、真由子から脱がせた下着を真由子の頭に被せる。

「いい格好だよ、真由子　誰が見ても変態の姿だ」

「ふごっ、ふごっ」

真由子は何か言っているが、私はかまわず次の準備に入った。真由子も自分で書いた小説だ、当然次に自分が何をされるか理解しているだろう。その期待にはしっかり答えてあげないといけないな。私は残酷な笑みを浮かべ、真由子の細い尿道に爆竹を入れる。

「ふごおぉぉぉーーーーっ！！」

わかっていたとはいえ、実際に尿道に爆竹を入れられる痛みと恐怖で、真由子は塞がれた口で絶叫する。しかし、私はかまわず真由子の尿道に爆竹を入れ、その後肛門にも爆竹を入れた。もちろん、膣にも忘れずに爆竹を入れる。真由子は自分の書いた小説と同じ様に、股間の３つの穴に爆竹を入れられていた。真由子は瞳からポロポロ

涙を溢して号泣している。私は真由子の尿道、膣、肛門からのびる導火線に、真由子の目の前で点火した。忽ち燃えて短くなっていく導火線を見て、真由子は泣くことも忘れ、息を止めて見つめていた。

「ふうっ、ふうっ、ふうっ、ふうっ」

真由子の鼻息が荒くなってくる。シューーッと導火線は短くなっていく。

パァンッ、パァンッ、パンッッ!!

「ふんごおぉぉぉーーーーっ!!」

真由子は絶叫すると、性器を爆破された激痛とショックで白目を剥いて失神してしまっていた。私が失神した真由子の性器を確認すると、尿道と膣から血が流れていた。

・・いい様だな、真由子・・

私は真由子をそのまま放置して、原稿の続きを読み始めた。

★　★　★　★

二章　真由子変態自慰

処女膜を爆破していただいた真由子は性器処刑執行までのあいだに、処刑時にショック死しないよう性器を調教され苦痛に慣らされることになりました。

スクール水着に黒いパンティストッキング。そして、水着の上に穿いた白い綿の子供ぱんつとストッキングの上に着用した白いオーバーニーソックス。

「真由子は学校では真面目で大人しい女の子と思われています。でも本当はこんな姿で毎日オナニーしている変態中学生なんです。」

自慰する姿を披露することになった真由子は、いつもの服装に着替えた後、自分の汚れた下着を口に押し込みます。そして、さらに汚れた下着を頭に被り、自分の惨めさを強調させます。この後、ふだんは両腕を自縛する真由子ですが今回は専門の係が真由子の腕を背中にまわし、真由子が悲鳴を上げるほどきつく拘束します。この戒めに真由子は興奮し、頭に被った下着の下で顔を紅潮させ性器からは恥ずかしい液を垂れ流し始めます。

「お、お、お・・」

すでに小さく声を出し始めている真由子は、ようやくオナニー用にピンと張ったロープに跨りますが、当然このロープの高さもいつもより高められており真由子の性器に容赦なく食い込んできます。ここで真由子の惨めさをさらに強調するため乳首に名札が付けられることになりました。大きな安全ピンのしたに「武藤真由子」と大きく本名を書いた布が付けられ、スクール水着越しに勃起している真由子の左乳首が摘まれ針先が当てられます。そして、なんの躊躇もなく太い針が真由子の乳首を貫きます。

「お、おぉぉーーーーっ」

真由子に苦痛を与えるため針はわざとゆっくり押し込まれ時間をかけて貫通されます。そして、右の乳首には真由子が通っている中学

校の校章がやはりピンを乳首に貫通させ留めされました。真由子は本名と学校名を公開されたままオナニーする姿を晒されるわけです。真由子は自分の惨めな姿に失神しそうなほど興奮してロープが食い込む性器から恥ずかしい液を垂れ流しています。そして、真由子の乳首に付けられた校章が大画面のモニターにアップで映し出された瞬間、どよめきが起こります。この頭のおかしい変態娘の真由子が有名なお嬢様学校で進学校の生徒であることが判明したからです。

図書委員真由子の最後　5（前書き）

このエピソードの最終話となります。
真由子は残酷に処刑されていきます。

図書委員真由子の最後　5

図書委員真由子の最後　５

私は真由子の書いた小説を最後まで読んで、思わず笑みが浮かんできていた。

・・この女は本当に頭がおかしいのだろう。自分をモデルにしているこの自作小説で、自分のマンコを破壊して処刑している。これが、望みと言っていたが、それなら望み通りにマンコ壊して処刑してやろう・・

私は性器を爆竹で爆破され失神している真由子の頬を叩き、覚醒させた。

「う、うぅっ」

真由子は涙が溢れる目で私を見つめる。

「本当にマンコを爆破された気分はどうだい、真由子。これから、真由子の望み通りマンコを処刑してあげるよ」

私は真由子に言いながら、真由子の塞がれた口の上に更にガムテープを貼り付けていく。

「ここは地下室で防音もしっかりしているから、いくら真由子が叫

ぼうと関係ないがね。私が五月蝿く感じるから念入りに口を塞がせてもらったよ。それと目も塞いでおこうか。そうそう、君が書いた小説に男の性器が見たいような記述があったから最後に見せてあげるよ。これでマンコ破壊されて処刑されれば思い残す事はないだろう。幸せだね」

私は真由子の前で服を脱いで全裸になる。処刑する時には全裸になるのが都合がいい。後でシャワーを浴びるだけで済むからだ。なので元々全裸になるつもりだった私はさっさと服を脱ぎ真由子の前に立つ。そして、階段状の踏み台を持ってくるとそれに乗り、拘束されている真由子の顔の正面に自分の性器がくるようにして立った。

「ほら、これが男のチンポだ。もう、最後だからじっくりと見て良いぞ」

私は、真由子の眼前で性器を晒しながら、あるアイデアが浮かんだ。

「真面目な中学女子の真由子は見た事がないかも知れないから、目隠しする前に見せてあげよう。男の自慰だ」

私は真由子の眼前で陰茎をしごき出した。これから真由子を処刑するかと思うと私のモノは既に固く勃起しており、陰茎をしごく手がどんどん速くなっていく。その時、私は真由子の口を塞ぐ前に、真由子の喉を犯しておけば良かったと思ったが、早く処刑したいとの意識の方が勝ち、私は真由子の顔面に射精していた。

「どうだ、最後に男の精液をかけられて嬉しいだろう。それでは、目を塞ぐとするよ」

私は、まず真由子の目の上にガムテープを貼り付けた後、その上に

布を何重にもぐるぐると巻き真由子の視覚を完全に遮断した。真由子は目も口も塞がれ、全身を拘束され動く事も出来ない状態で、体をブルブルと細かく震わせていた。

「怖いだろう、真由子。でもこれは真由子自身が望んだ事なんだよ。大丈夫、もう少しすれば恐怖や苦痛から解放されて楽になるからね」

私の、この言葉の意味が分かったのか真由子は、うぅっうぅっと声を出しながら更に激しく震えていた。私は、さっそく太い五寸釘を手に取ると真由子のつるつるの恥丘に釘を当てる。目を塞がれている真由子は自分が今何をされるのか分からないだろう。私は真由子の恥丘に五寸釘を打ち込むつもりだった。私は、金槌を手にすると思い切り五寸釘を真由子の恥丘に打ち込んだ。

ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ！

「ふごおぉぉーーーーっ！！」

口を塞がれた真由子の悲鳴が響く。それが、なかなか心地よい。私は真由子の絶叫をバックに気持ちよく真由子の恥丘に五寸釘を打ち付けていた。そして、釘の根本まで真由子の恥丘に打ち込んでいた。しかし、一本では私の興奮は収まらない。二本目の五寸釘を真由子の恥丘に当てると金槌で打ちだした。

ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ、ガンッ！

「ふごおおぉぉぉぉぉーーーーっ！！」

つるつるの恥丘から体の中に打ち込まれる太い五寸釘の激痛に真由子は絶叫する。私はきれいな真由子の恥丘に無惨にも打ち込まれた

二本の釘を見て、記念に撮影していた。真由子は呻き声をあげ苦しんでいる。膣や直腸を貫通しているのは勿論だが、膀胱や子宮も貫通しているかも知れない。そう思うと私のものは固く勃起していた。

「苦しいだろう、真由子。それじゃ釘を抜いてあげるね」

私は釘抜きを真由子の恥丘に当て、ズボッと釘を抜いた。

「ふごおおぉぉぉーーーーっ！！」

当然、抜く時にも相当の痛みがある。真由子は絶叫していた。そして、釘を抜いた穴から血と共に小便がチョロチョロと垂れていた。どうやら、上手いこと真由子の膀胱を貫通していたようだ。恥丘に空けられた穴から小便を漏らす真由子の無様な姿を私は、笑みを浮かべて観察していた。

・・ふふふ、真由子。お前が書いた小説のように処刑してあげるからな。満足して逝ってくれ・・

私は、真由子の書いたラストシーンを思い出していた。

★　★　★　★

最終章　変態真由子の最後

真由子のマンコは容赦なく処刑されていき、もう小陰唇は切除され、真由子の小さな敏感な突起クリトリスにも数え切れない程の針が刺されていた。真由子は目も口も塞がれていたが、激しく号泣してい

るのは遠目にも分かる。真由子は開脚逆さ吊りで完全に拘束されており、体を動かして抵抗する事は不可能で、ただ泣く事しか出来なかったのだ。その無数の針が突き刺さる真由子のクリトリスの根元に鋭いメスの刃が当てられる。目を塞がれている真由子には自分が何をされるか分からないが、周囲の雰囲気から酷い事をされると気が付いて、さらに激しく泣き出していた。しかし、それで手心が加えられる事は絶対に有り得ない。真由子のマンコを破壊するのが楽しいのだから、メスは容赦なく動かされた。

スパッ！

「ぶっ、ぶうううぅーーーっ！」

絶叫する真由子のクリトリスが抉るように根元から切除された。真由子は、その激痛に失神してしまったのか、大人しくぶらんと吊られていた。しかし、失神した程度で真由子が許される事はない。真由子のマンコは徹底的に壊され、全てが破壊されるのだ。小陰唇とクリトリスが消滅した真由子のマンコが、くぱぁと開いたまま固定される。そして、針、鞭、蝋燭で徹底的にマンコを責められる。真由子のマンコは形がなくなる程責められ、次におしっこの穴と、マンコの穴が責められ破壊されていく。どちらも切り裂かれズタズタにされた。最後に残った子宮も無事ではすまない。真由子のマンコは全て破壊されるのだ。子宮は数えきれない程のニードルで串刺しにされ、バーナーで焼かれてしまう。その後、残酷に摘出され肉片になるまでぐちゃぐちゃにされた。

マンコを破壊された真由子は、もう用済みなので廃棄される事になる。四肢を切断され、まだ生きたまま焼却炉に投げ込まれ、灰にされてしまった。

……了

後書き

いかがでしょうか。真由子の願望が詰まった作品です。こんな風に処刑されたいという思いから書いてしまいました。理解してくれる方がいてくれれば嬉しいです。
それでは、いつの日か本当にマンコを処刑される日を夢見て筆を置きたいと思います。

武藤真由子

図書委員真由子の最後　5（後書き）

真由子の最後の一行。
ある意味、夢が叶って良かったと思うしかないですね。

絶命ブランデー浣腸

絶命ブランデー浣腸

性奴隷のまゆみを購入してからしばらくたつが、非常に良い買い物だったと私は満足した。確かに高額であったが、十三年物で外見も私の好みであった。黒髪を三つ編みお下げにし太い眉に眼鏡をかけた地味な顔。ほぼ膨らみのない胸に桃色の乳首、そして、寸胴の幼児体型につるつるの恥丘、適度に肉の付いた太もも。あまりに私の好みなので、毎日処刑したい欲望を抑えるのに苦労している。

今日も私は、まゆみのスカートの中に頭を突っ込み、まゆみの股間の匂いを嗅いでいた。まゆみは足を大きく開き、私が股間の匂いを嗅ぎやすいようにしている。

今日のまゆみのコスチュームは上半身はジュニア用の白いスポーツブラのみ、下半身は白のスコートの下には女児用の股上の深い綿のやはり白無地のパンティを穿かせている。そして、太ももの付け根まである黒に白いラインが三本入ったサイハイソックスを穿き、足には女子学生用の黒いパンプスを履かせている。私にとって全裸よりも、遥かに刺激的な格好だ。そんなまゆみのスカートの中、私はまゆみの性器から発する匂いに興奮していた。

・・いい匂いだ・・

まゆみの匂いは私好みの匂いだった。私はまゆみの太ももを抱きかかえるようにして股間に鼻をつけ、その匂いを味わっていた。ま

ゆみの匂いを嗅ぐだけで私のものは硬く勃起していく。そして、匂いを満喫した後、まゆみの綿の白いパンティのクロッチ部を捲る。クロッチの下から桜色の割れ目が現れ、匂いが一層強くなる。私は我慢しきれず指でまゆみの性器を拡げ、舌でまゆみの性器を舐めた。まゆみの味も私好みだ。私はさらに、まゆみの性器を舌で舐め回した。尿道の辺りはまゆみの小便の味と匂いがして、私はさらに興奮する。その後、膣口から舌を突き入れ、まゆみの性器を存分に味わい一旦スカートから頭を出し、まゆみに私が性器に口を付けたら小便を漏らすよう命令した。

そして、再びスカートの中に頭を突っ込みクロッチを捲り、まゆみの性器に口を付ける。まゆみは私の命令通りチョロチョロと小便を漏らし始めた。私はまゆみの小便を味わいながらゆっくりと飲んだ。そして、まゆみの膀胱に溜まっていた小便をすべて飲み干す。

・・いい味だ・・

私の興奮はもう抑えきれなくなっていたので、まゆみを跪かせると口を開くよう命令する。そして、まゆみの頭を両手で押さえると、まゆみの喉奥まで自分の性器を突き刺した。苦しさで涙を流すまゆみの顔に、さらに興奮した私は、そのままゆみの頭を押さえつけ腰を激しく振る。

「げひっ、げひっ・・」

まゆみの口からおかしな声と涎が溢れ出る。

・・溜まらんなっ・・

私は口元に笑みを浮かべながら腰を振る。喉奥まで犯され、あまりの苦しさにまゆみは逃れようとするが、正座させられ両腕は後ろ

手に縛られ頭を押さえつけられている為逃げることは出来ない。私は容赦なく腰を振り、まゆみの喉奥に射精した。

まゆみの口から性器を抜いた私は、まゆみの涙と鼻水と涎で汚れた無様な泣き顔を見て再び興奮してきた。泣いているまゆみの髪の毛を左手で鷲掴みにすると右手でまゆみの頬を激しく打つ。パーンという頬打つ音と、ヒーッというまゆみの悲鳴が響き渡る。私は続けて二発三発とまゆみの頬を平手打ちしたが、まゆみの無様な姿を見てさらに興奮し、拳でまゆみの顔面を殴りつけた。まゆみは、ぎゃふぅという無様な声を出して後ろに転がる。そして、起き上がろうとするが両手を縛られている為もがくだけで起き上がれない。仰向けに転がったままもがくまゆみを私はうつ伏せにすると、尻を上げるよう命令する。そして、膝を曲げ尻を上げ突き出したまゆみのスカートを捲くるとパンティを下ろした。まゆみの性器と肛門が、私の前に晒される。

・・いい眺めだ・・

私は笑みを浮かべながら、まゆみの肛門に指を突っ込んだ。

「ふぎゃっ　」

まゆみはまたおかしな声を出す。私はかねてからやりたかった事を実行する事にした。早速、準備を整えまゆみに腿枷を装着し、その腿枷の間に丈夫な鉄のパイプを取り付け、まゆみの脚が閉じられないようにした。そして、用意したイルリガートルから延びるゴム菅の先端をまゆみの肛門に挿入していく。まゆみの直腸のかなり奥までゴム菅を挿入した私は、イルリガートルに高級ブランデーを惜しげもなくどぼどぼ空けた。ブランデー浣腸、どうやら一番苦しい浣腸らしい。当然だ。直接ブランデーを肛門から注入されるのだ。腹の中がアルコールで焼かれ、その激痛は筆舌に尽くしがたいとい

う。私は、まゆみの苦しむ姿を想像しながら後ろ向きにまゆみの背中に馬乗りになり、ゴム菅についているコックを開けた。イルリガートルに満たしたブランデーが、まゆみの中に流れ込んでいく。

「いだあぁぁーーーっ、ぢぬうぅぅっ、だじげでえぇぇぇーーーっ！！」

まゆみが絶叫し暴れるが、私はまゆみの体を馬乗りになったまま押さえつける。まゆみは、どこにそんな力があったのかと思えるほど激しく暴れ、私も必死になってまゆみの体を押さえていた。

「あばばばばばばばばば、あっばあぁっ！」

どうやらまゆみは白眼を剥いて泡を吹いているようだ。私は、まゆみのその反応に満足していた。そうしているうちに、暴れていたまゆみの体が動かなくなる。

・・失神したか・・

私は、構わずまゆみの中にイルリガートルに満たしたブランデー二本分を全て注入した。そして、イルリガートルが空になったのを確認し、ゴム菅を抜いた。まゆみの肛門から激しく注入されたブランデーと大便が噴き出すかと思っていたが、緩んだ肛門からブランデーが漏れてくるだけだった。まゆみはグタッと横たわっている。私は少し失望していた。もっと激しく苦しみ続けるまゆみの姿を想像していたのだ。そう、肛門からブランデーと大便を噴き出しのたうち回るまゆみの姿を……。

気を取り直して私はまゆみを覚醒させようと、薬剤を注射器で注入した。しかし、まゆみの反応はない。そこで私もおかしいと気が付いた。

まゆみは、失神ではなく絶命していた。

ブランデー浣腸は危険な行為だと認識があったが、配慮が足りなかったようだ。まだ十三年物に直接ブランデーを注入したのがいけなかった。それに薄めずに原液をそのまま注入してしまった。せめて、希釈したブランデーを注入するべきだった。

私は、高額で購入したまゆみを失い後悔していた。もっともっとまゆみを痛め付けて楽しみたかった。

・・仕方がない、自分が悪いのだ・・

私は、まゆみの体が硬く冷たくなる前にやっておこうと、まゆみの脚を大きく開いた。そして、まゆみの膣に自分の勃起したものを突き刺すと激しく腰を動かし、もう動かないまゆみの中に射精した。

私は動かなくなったまゆみの膣に自分のものを入れたまま何度も何度も犯し、まゆみの中に放出し続けた……。

女性器虐待、そして処刑　前編

女性器虐待、そして処刑　前編

とうとう確保した僕好みの女子。制服姿のまま大の字に縛り付けてある。黒髪のポニーテールで太い眉に大きな瞳。貧乳と言っていい小さな胸に寸胴の体型。僕好みの女子だ。これで制服を脱がしてみて、見た目だけでなくその実際の体も僕好みだったらいうことない。

「うーん……」

小さな声を上げて女子が気付いた。自分が縛られている事に驚いた表情をする。そして、僕の姿に気付いた。

「ひっ！」

また小さな声を出す。なかなか良い。大声を出す女子は嫌いだ。大声は僕に激しくマンコを調教されて絶叫するときだけにして欲しい。僕は全裸に女子用の綿の薄い緑の縞柄のパンティを穿き、白いサイハイソックス、白いスポーツブラも身に付けていた。そうそう頭にも当然女子用のパンティを被っている。この異常な僕の姿を見て、真由子は震えている。当然だろう。これから良いことが起こるとは到底思えない。

今、大の字に拘束されているのは女子は大内真由子、１３歳だ。

「僕の言う事をきちんときいていれば助かるかも知れないよ。いい

かい？」

真由子は小さく頷く。僕は真由子の拘束を解くと改めて両腕を後ろ手にきつく縛り付ける。そして、真由子を正座させると頭を押さえて頬を平手で打つ。

パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン、パン

小気味良い音が響き、真由子の目から涙が溢れだし頬が赤く腫れ上がる。これでもかなり手加減したつもりだったけど真由子は泣き出している。

「うっ、うっ、うっ、うっ」

静かに泣く真由子に僕は興奮してきた。

・・いいぞ、いいぞ。もっと痛め付けてやる・・

「喉が渇いただろう。飲み物を口に入れてやるから口を開けろ。溢すんじゃないぞ」

はいと頷いた真由子は従順に大きく口を開く。僕は真由子の前に立つと穿いているパンティを降ろした。勃起している僕のものが真由子の目の前にある。

「よし、そのまま上を向け」

上を向いた真由子の口の中に僕は放尿した。ジョーッと真由子の口の中に僕の小便が溜まっていく。

「飲めっ！」

僕の命令で真由子は口を閉じ、口中に溜まった僕の小便をごくりと飲み干した。そして、また上を向いて口を開く。この女、なかなか分かっている。僕はまた真由子の口の中に放尿した。真由子は泣きながら僕の小便を飲んでいる。

・・ああ、もう我慢出来ない・・

僕は真由子を残酷に見つめた。

・・真由子のマンコ、徹底的に壊してやろう・・

僕は、頭の中で想像してきた事を色々と思いだし興奮してきた。さっそく真由子のマンコ処刑を開始しよう。

・・おっと、壊してしまう前に味わっておかないとな・・

僕ははやる気持ちを抑え、真由子を四つん這いの格好にさせ、ミニスカートをまくり上げた。両腕を縛られ胸を床につけている真由子は必然的に尻を突き上げる形になる。真由子の白い下着に包まれた股間が露になる。

「よし、そのまま動くなっ」

僕の命令に真由子は、はいっと小さく答える。僕は真由子の白い下着を脱がすと匂いを嗅いだ。僕の好きな乳製品のような匂いに混じり小便の匂いがする。僕は我慢できず下着のクロッチ部を舐めていた。

・・ああ、美味い……。たまらないな・・

僕は被っていたパンティを取り、真由子から脱がしたばかりの下着を頭に被った。当然、クロッチ部が鼻と口に当たるようにする。真由子の匂いに包まれ僕は興奮していた。

「これから、何をされるか分かるか真由子？」

僕の問いに真由子は小さくはいっと頷く。いくら１３歳の真由子でも、下着を脱がされこんな格好をさせられては、次に何をされるか分かるのだろう。

「それでは、何をされるか言って貰おうか」

「はい、真由子のオマンコとおしりの穴を犯して頂けるのだと思います。おしりの穴は汚いので浣腸してきれいにしてから犯されて、オマンコは犯されてから蝋燭や針で調教して頂けるのだと思います」

想定外の答えに僕は驚いていた。どうやら、この女子、僕の思った以上にその性癖も僕好みのようだ。

「少し違うな、真由子。君のマンコは処刑されるんだ。無茶苦茶に壊されて消滅する。思い切り泣き叫んで良いからな、真由子」

真由子は、ひっと小さく声を上げるが何かそれは期待しているかのような感じを僕に与えた。僕は真由子の期待通りシリンジを用意するとグリセリン液の原液で満たした。そして、真由子の小さな肛門にシリンジの先を突き刺す。

「ひえっ」

真由子が小さく悲鳴を上げるが、僕はかまわずシリンジのシリンダーを押し真由子の中にグリセリン液を注入する。

ヂュウゥーーッ

僕は、シリンジ内の５００ミリのグリセリンを全て注入した。そして、僕はすぐにまたシリンジにグリセリンを満たし、真由子の中に注入する。

ヂュウゥーーッ

「く、苦しい……」

当然だ。１リットルものグリセリンを注入されているのだ。でも、それで終わりにしない。真由子を苦しませるのが楽しいのだ。僕はまたシリンジにグリセリンを満たす。

ヂュウゥーーッ、ヂュウゥーーッ、ヂュウゥーーッ、ヂュウゥーーッ

「うぐうぅぅーーっ」

連続で真由子の肛門からグリセリンを注入する。３リットルのグリセリンを注入すると、真由子の下腹部は膨れ上がり、真由子は苦しさで呻き声を上げる。なかなか興奮する姿だ。僕は、もうしばらく真由子を苦しめようと直径５センチのアナルプラグを用意した。

「これで栓をしてあげるからね。もっと苦しむ姿を楽しませてもらうよ」

僕は真由子の肛門にアナルプラグを無理矢理押し込んでいく。真由子の肛門がミシミシと音を立て拡がっていった。そして、最大直径を越えたところでアナルプラグはにゅるりと真由子の肛門に吸い込まれるように納まった。これで真由子は自分でこのアナルプラグを抜く事は出来なくなった。

「ふふん、じゃあこのまま犯してあげるよ。大量浣腸されたまま犯されるのは苦しくて辛いだろう。でも君には嬉しいのかな」

僕は真由子の膣が濡れているのを確認し、自分のものを突き入れた。

「ふぎぃぃぃぃーーっ、痛い、痛い、痛いぃぃーーっ」

真由子は処女か、経験があまりないのだろう。痛い痛いと悲鳴を上げる。僕はかなりきつかったが根本まで突き入れていた。そして、真由子の浣腸で膨らんでいる下腹部を押しながら激しく腰を振る。

「苦しめ真由子。ほら、泣くんだよ。許して下さいと泣くんだよ」

「ひぎぃぃぃーーっ、痛いぃ、苦しいぃ、許して下さいぃぃぃっ」

「いいぞ、真由子。もっと苦しめ、もっと泣けっ」

僕は真由子の苦しむ姿に頂点に達しようとしていた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

僕は真由子の中に大量に射精した。

「苦しいぃぃっ、もう許してえぇぇぇっ」

僕は真由子の号泣する姿を見て、また硬く大きくなってきていた。
そして、僕は自分の気が済むまで何度も何度も号泣する真由子を犯し続けた。

女性器虐待、そして処刑　後編

女性器虐待、そして処刑　後編

真由子のマンコを散々犯した僕は、真由子の肛門を塞いでいるアナルプラグを掴むとズボッと引き抜いた。途端に真由子の肛門から噴水のようにグリセリン液が噴き出す。その中には固形の大便も混じっていた。制服姿で拘束され、惨めに肛門から大便を噴き出す真由子の姿に僕はまた興奮してきていた。

・・いい様だ、真由子。今度は尻の穴を犯してやるからな・・

僕は、真由子の排泄が終わった後、さらにもう一度浣腸し排泄させてから、真由子の肛門に自分のモノを突き刺した。

「ふ、えええぇぇっ」

真由子はおかしな声を出すが僕はかまわずに真由子の肛門に根元まで突き刺していた。入れ始めこそ少しきつかったが、最初が入ってしまえば後はするりと楽なものだった。

・・真由子、尻の穴も犯されて嬉しいだろう・・

僕は真由子の腰を両手で押さえると激しく腰を振りだした。

「ううぅぅっ」

真由子は泣きながら僕に肛門を犯されていた。それでも真由子も興奮しているようで、触ってみると真由子の割れ目はぐっしょりと濡れていた。

・・マンコの穴とは、また違う気持ちよさがあるな・・

僕は、真由子の肛門を犯しながら、どうせなら三つの穴全部犯してやろうと考えていたが、そんな事を考えていると堪らなく興奮が高なり僕は発射寸前になっていた。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

さらに真由子の泣き声が僕を興奮させる。

「うっ」

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

僕は真由子の直腸内に激しく放出していた。そして、僕は急いで泣いている真由子を立たせると机の上に仰向けに寝かせる。そのまま、真由子の頭を机の端から出し口を閉じられないように開口ギャグを装着する。

「さあ、今度はこの穴だ」

僕は真由子の口腔に、自分の真由子の肛門を犯したままの汚れた性器を突き刺した。そして、喉奥まで入れていく。

「あがっ、あがっ、あがっ、あがっ」

真由子はおかしな声を出し涙を流して苦しむが、僕はかまわず腰を振りだした。真由子の喉の中を僕の性器が激しく上下に動いているのが見える。

「おぼっ、おぼっ、おぼっ、おぼっ」

真由子は、あまりの苦しさに尿を漏らしていた。制服のスカートを濡らし、机の上に尿が拡がっていく。その真由子の無様な姿に僕は興奮していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

僕は真由子の喉奥に放出していた。そして、３つの穴を犯し終わった僕は、いよいよ真由子の性器破壊に着手する。まず真由子を机から下ろし、両足首にロープを巻き、滑車を使い逆さに吊り上げた。真由子の制服のスカートが捲れ、股間が露になる。真由子は開脚逆さ吊りでぶらーんと揺れている。

「おごっ、おごっ、おごっ、おごっ」

真由子は逆さに吊られて恐怖で泣いているが、開口ギャグの中に僕のコレクションの女児用下着を詰め、ギャグの蓋を閉めてしまった。これで真由子は喋る事が出来なくなった。そして、真由子の目に黒い厚い布をぐるぐると巻いていく。真由子は視覚も僕に奪われた。

・・暗闇の恐怖に怯えるといい・・

僕は、これから真由子に行う事を想像し興奮してきていた。まず、真由子の小陰唇を切断する。マンコのビラビラを切断するのは、前

からやりたかった行為だ。やっと現実に出来る。僕は、ウキウキと鋏を持つと、ジョキジョキと真由子の小陰唇を切っていった。手に伝わる真由子の小陰唇が切れていく感覚が素晴らしい。真由子の小陰唇を切断しながら、僕の性器はまた硬く勃起していた。そして、真由子の小陰唇を切断し終わった僕は、今度はカッターに持ち変えた。真由子は塞がれた口で絶叫しているようだ。

・・まだまだ元気で嬉しいよ・・

僕は真由子のクリトリスの包皮を摘まみ、カッターで切除していきクリトリスを剥き出しにする。

「さあ、お目当ての部分が姿を現したよ」

僕は真由子のクリトリスを刺激し勃起させる。その目的は言わずもがなだろう。僕は真由子の小さな突起を摘まみ、その根本にカッターの刃を当てた。そして、そのまま根本から抉るように真由子のクリトリスを切断していく。

「ふごおぉぉーーーーっ!!!」

真由子が激しく絶叫するが、僕はかまわず真由子のクリトリスを切除した。そして、僕はすぐに真由子の血を流すマンコに焼けた鉄の棒を押し当てた。

ジュウゥゥゥッ

「ふごおぉぉぉーーーーっ!!」

また真由子が絶叫する。僕はしばらく真由子のマンコに棒を押し当

て焼き潰していた。絶叫していた真由子だったが、意識を失ったのか、がっくりと力なく垂れ下がり動かなくなっていた。

・・さて、次は何をして楽しもうか・・

僕は、やりたい事を整理してノートにでも書いておけば良かったと後悔した。咄嗟に頭に浮かんでくる事が多すぎて、どれをやろうか判断に迷ってしまう。

・・まあ、また別のモノを確保すればいいか・・

僕は取り敢えず頭に浮かんだ事をやろうと、釣り用の三本針を用意する。これは大物を狙って釣り上げる釣り針だ。これに付いているテグスも当然大物用で切れる事はまずない。僕は膣鏡で真由子の膣を拡げ、真由子の膣の奥にある子宮口に三本針を無理矢理挿入した。そして、しっかりと針がかかった事を確認する。

・・準備ＯＫ・・

僕は所定の位置につき釣竿を持つとリールを巻き始めた。カラカラとリールを巻いていくと、そのうちに手応えが伝わってくる。僕は腕に力を入れ、竿を立てリールを回し続けた。すると、真由子の膣口から子宮頸部が飛び出してきた。

・・あはは、子宮釣り、楽しいっ・・

真由子は途中で気が付いたのか再び絶叫している。僕はリールを巻き続け、真由子の子宮を半分近く体外に露出させた。そして、竿とリールを固定して真由子の前に立った。真由子のヌメヌメとした赤黒い子宮が目の前にある。僕は、バーナーに着火すると真由子の子

宮を焼き始めた。青白い炎が真由子の子宮を焼き、黒焦げにしていく。真由子の子宮が焼ける異臭が辺りに漂っていた。そして、真由子はいつの間にか静かになっていた。

・・いけない、もっと楽しんでから絶命させようと思ったのに・・

僕は、やはりきちんと計画しておくべきだと改めて思ったが、もう後の祭りだった。真由子は哀れにも子宮を黒焦げにされた激痛で絶命してしまっていた。僕は、もう物言わぬ物体となった真由子をバラバラに切断すると、記念に頭だけ残し、あとは焼却炉に投げ込んだ。

・・さあ、次の獲物を探そうか・・

僕は、笑みを浮かべて街に繰り出して行った。

公開処刑される少女　前編

公開処刑される少女　前編

今日、私はマンコ処刑される。私の１３年の命が終わる。月に一度開催される処刑ショーについに私の順番が回ってきたのだ。先月は１０歳の女の子が処刑された。毎月、処刑される女子が発表され、自分の名前でなかった事に安堵し、１ヶ月を過ごす。そして、また違う名前であれば次の一月も無事に過ごす事が出来る。毎日の厳しい調教。でも、それは命の危険はない。あくまでも調教の範囲だ。マンコを鞭で打たれたり、蝋燭を足らされたり、時には針を刺される事もある。厳しい調教であるが、それでも処刑に比べれば何でもない事であった。調教される以外の時は、私たちは一つの広く暗い大広間のようなところで両腕は拘束され、両足も開いたまま固定される。そして、首輪に付けられた鎖で動く事もままならない。つまり、オナニーする事も出来ないのだ。以前は、このような毎日に精神を病み発狂してしまう女子も多くいたようだ。発狂してしまった女子は、どこかに連れていかれる。噂では体を改造されて、生体性具として売り出されているようだ。発狂して性具として売り出されるのが良いのか、大勢の前で処刑されるのが幸せなのか、どちらが良いのか分からないが、私たちの未来はその二択のどちらかに絞られる。他には選択肢はないのだ。

発狂する女子が多発してから、その対策として毎日調教以外に媚薬や性具を使いイカせてくれるようになった。私たちは拘束され動けない体で、毎日その時を待ちわびていた。そのイカされる時だけが

唯一幸せを感じる事が出来るのだ。その絶頂に登り詰める気持ち良さは、もしかしたら私たちだけが感じられる特権なのかも知れない。でも、ついに私の名前が選ばれた。処刑が決まった者は、それからは唯一の悦びといえた、この媚薬と性具による愛撫も対象外となってしまう。処刑されるまでの間、自分の性欲を満たしてくれるものは失くなるのだ。さらに処刑対象になった女子は、それまでの大部屋から個室に移される。個室といっても豪華なものではない。狭く何もない独房のようなものだ。これは、処刑の決まった者が他の者の協力を得て逃げ出す事や自殺をを防ぐ為だと聞いた。

そんなわけで私は、一人で毎日処刑の恐怖に怯え震えていた。そして、処刑執行日の3日前、私自身に処刑の方法を選択するよう指示があった。

〝爆破〟、〝串刺し〟、〝燃焼〟、〝切断〟。この四項目の中から自分が処刑されたい方法を選べというのである。私は、泣きながら考えた。燃焼と切断は、すぐには死ねなくて長く苦しむ事になる。爆破は一瞬で死ねるだろうが、私のマンコやその周辺は粉々の肉片となってしまうだろう。私は処刑されても自分の体の形を残しておきたかった。それが、せめてもの思いだった。それで、残ったのは串刺しだ。説明を見ると、マンコから口まで串刺しにされ処刑されるようだ。これなら、体はきれいに残るだろう。私は、串刺しを選択した。それから私は自分の最後ばかりを想像し恐怖で震え泣いていた。今まで、この独房に入れられ処刑されるのを待っていた女たちは何を思っていたのだろう。確実に訪れる処刑、死の恐怖に一人で耐えなくてはならないのだ。逃げる事も死ぬ事も出来ない。大勢の人の前で好奇の視線に晒され、苦しみながら絶命するのだ。

そして、今日がきた。泣いても笑っても私の最後の日だ。今日が終わる時には私はもうこの世にいない。私は、処刑場に引き出される前に洗浄された。体中をきれいに洗われ、髪も整えられた。もちろん、マンコの穴もおしりの穴の中も洗浄された。お客様の前に出さ

れるのだ。独房につながれて糞尿やオリモノで汚れた体で出るわけにはいかない。入念に洗浄された後、私の両腕が高手後手に厳重に拘束される。足首にも枷が装着され、その足枷には鎖で１０キロある鉄球がつながれていた。もう、万が一にも逃げる事は出来ない。そして、私は首輪に付けられた鎖に引かれ、よろよろと泣きながら歩かされていた。

・・怖い、怖い、怖い、怖いいいっ・・

シャァァーーッ

私は、これから処刑されるという恐怖でせっかく洗浄してもらった体を尿を漏らして汚してしまった。止めようと思っても止められない。私の尿道から尿が溢れ、私の瞳からは涙が溢れていた。

「ううぅっ」

・・助けてっ、死にたくない・・

私は、漏らしたまま脚が震えて歩けなくなっていた。それでも、首輪に付けられた鎖が引かれ私は無様に転んでいた。

「ひぐうぅぅっ」

私は大声で泣きながら起き上がれずにいた。両腕を縛られている上に、足枷に錘も付けられている。そんな状態で起き上がるのは私でなくても至難の業だ。

「早く起きろっ！お客様がお前の処刑を待っている。ぐずぐずするなっ！それにその汚い小便を止めろっ！」

私の鎖を持っている体の大きな男の人に怒鳴られ、必死におしっこを止めようとするけど、止められない。すると、もう一人私の逃亡防止に後ろから着いてきていた男の人が私の足を開くと、尿を漏らしている私の尿道に何かを突っ込んできた。

「痛いいいいっ！」

私は叫んでいたが、構わずにグリグリと尿道に何かを入れられる。

「締まりのねえ穴だから栓しておいたぞ。早く立てっ」

私は抱えられ無理矢理立たされていた。そして、またよろよろと歩く。目の前に重く頑丈そうな鉄の扉がある。その扉の向こうが処刑場だ。私は、また脚がガクガクと震えてきた。

「まったく、みっともねえ女だ。この前のガキの方がよほど落ち着いてたぜ」

そんな事を言われても処刑されるのは怖い。私は、この後、マンコから串刺しにされて処刑される。

・・嫌だ、このまま時間が止まってほしい・・

私は祈るように目を閉じたが、鉄の扉が開くと、ワーッという歓声が飛び込んできた。そして、扉の外に出されると、そこには私の処刑を見に来た大勢の人の姿があった。

公開処刑される少女　後編

公開処刑される少女　後編

私は完全に怯えていた。私がマンコ処刑され絶命する姿を楽しみに見に来ている人たち。そんな人がこんなに大勢いるとは思いもしなかった。

「助けて……。助けて……」

私は泣きながら鉄球を引き摺り、首輪の鎖に引かれてヨロヨロと歩いている。両腕を縛られ処刑台に向かって歩かされている私の惨めな姿を見て観客席から、さらに大きな歓声が沸き起こった。それに、答えるように歩いている私の体に一本鞭が叩き込まれる。胸に、背中に、太ももに、そして、下腹部に、容赦ない鞭の嵐が私を襲う。私は号泣し、涙と鼻水とよだれを垂らしながら、処刑台に向かって歩かされていた。

その処刑場の中央に私を串刺しにする処刑具が設置されている。階段を何段が上がった台の中心に円筒状のパイプが1メートル程突き出ている。

シュッ、シュッ、シュッ！

何の音かと思ったら、その処刑台に近付いて行くと私にも分かった。突き出たパイプの中から鋭いニードルが勢いよく何度も飛び出しているのだ。ニードルは高速で飛び出し、次に引っ込んでいる。それ

が繰り返される音が響いていたのだ。私は間近にそれを見て、足が止まってしまっていた。

・・あのパイプが私のマンコの穴に入れられる。そして、飛び出したニードルで串刺しにされるんだ。怖い、怖いよぉぉ・・

恐怖で足が止まってしまった私に激しく鞭が叩き込まれ、早く進むよう促される。私は、泣きながらまたヨロヨロと歩き出した。

・・嫌だ。あそこに行きたくない。誰か、助けてぇ・・

私は鞭で打たれ、首輪の鎖で引かれながらノロノロと歩いていた。少しでも処刑台に到着するのを遅らせる為に……。でも、そんな私に観客席から、早くしろと罵声が浴びせられる。それでも遅々として進まない私の歩みに、首輪の鎖を引いていた男は次の手に出る。彼は丈夫なテグスの付いた釣り針を手にすると、鞭を打っていた男に私の体を動かないよう押さえつけさせる。そして、私の右の乳首に釣り針を突き刺され貫通された。

プツッ！

「いだあぁぁぁっ、いだいぃぃぃっ！」

私は絶叫していた。涙がポロポロ零れるが反対側の乳首にも釣り針が貫通される。

「いだいよぉぉっ、ゆるじでえぇぇっ！」

私は両乳首に釣り針を貫通され泣き叫ぶが、その私の姿は撮影され巨大なマルチビジョンに映しだされ観客の興奮を煽っていた。そし

て、私は足を開かされ、腰を前に突き出すようにして男たちに押さえつけられる。

「えっ……」

私は、まさかと思っていたけど、私の予想通り私の割れ目がくぱぁと開かれる。そして、私のクリが摘まれ強力な媚薬が塗られる。私のクリは忽ち硬く大きく勃起し、マンコはグショグショに濡れ始めた。

「ハァハァ、ハァハァ」

息が荒くなる私の勃起したクリに釣り針を持った男の手が迫る。

「やめりぇえぇえっ」

喘ぎながら叫ぶ私の言葉など同前ながらまるで無視され、私のクリに釣り針が刺される。

プツゥゥッ！

「ひぎぃぃぃぃーーーっ！」

私の脚はガクガクと震えていたが、二本目の釣り針がまた私のクリに貫通された。

プツゥゥッ！！

「ひぃっぎぃぃぃぃーーーっ！！」

私は天を仰いで絶叫していた。そして、私の乳首とクリに付けられたテグスが強く引かれる。

「あ、ぎいいいいーーーっ、ちぎれりゅうっ！！」

私は乳首とクリを引かれて歩かされていた。その私の惨めな姿を見て、観客席から大きな笑い声が湧き起こり盛り上がっていた。

「ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ、ひぐっ」

私は千切れそうな程、乳首とクリを引かれ、泣きながら無理矢理歩かされ、ついに処刑台の上に登らされてしまった。目の前に、私を処刑、串刺しにするパイプがある。近くで良く見るとパイプの上端には赤黒い汚れがこびり付いている。私は、それを見てゾッとした。今まで数え切れない程の女子のマンコを串刺しにしてきたのだろう。串刺しにされた女子のマンコから流れた血が、取れない汚れになっているのだ。

「許して下さいっ、許して下さいっ、許して下さいっ」

泣きながら呪文のように私は繰り返すが、私の顔が上げられ頬が激しく打たれる。

パアンンッ！！

会場中に響き渡るほどの音が鳴り、口の中を切った私は血を流していた。そんな私の口に錠剤が入れられ、飲み込むように指示される。そして、私の割れ目がくぱぁと開かれると媚薬を塗り付けられた。どうやら飲まされた錠剤も媚薬だったようだ。私は体の中から火照り、マンコからは大量の粘液を垂らしていた。が、それで終わりで

はなかった。注射器を持った男が私のマンコの会陰に針を深く突き刺しヂューッと媚薬を注入する。それと同時に私のおしっこの穴にもカテーテルが挿入され、そこにも媚薬が注入されていた。その間、私のマンコには数えられない程の場所に注射器が突き刺され媚薬が注入される。クリの周りはもちろん、マンコの穴の周り、マンコの穴の中にも針が刺され注入された。

「あ、ぶうぅぅーーーっ！」

約1ヶ月、自慰する事も許されずにいた私は媚薬を飲まされ、注射され、注入され、もう何も考えられなくなっていた。早くマンコの穴に入れて貰いたい。それだけだった。

「早く、いりぇて、いりぇてくだちゃい。マンコの穴、太いのいりぇてえぇぇっ！！」

狂ったように叫ぶ私の体が背後から持ち上げられる。女児におしっこをさせるような姿勢で盛り上げられた私のマンコの穴に、パイプの先端が当てられ、そのままズリュッとマンコの中に入れられた。

「いひっ、いひっ、いひっ、いひっ」

無様に喘ぎ声を上げる私の体が拘束されていく。背後に太い鉄棒が用意され、私の体は真っ直ぐ直立したまま固定された。そして、私の顔が上を向くように頭を倒され、口には顎が外れそうな程大きな開口ギャグが装着された。

「ご来場の皆様、お待たせしました。準備が整いましたので処刑を執行します。後ろのオーロラビジョンにカウントダウンが表示されますのでお楽しみ下さい」

アンウンスが終わると、背後のオーロラビジョンに大きく〝１０〟と表示された。観客もカウントダウンに合わせて声を出している。

「１０……、９……、８……」

私は、その観客の声で自分の命が残り数秒であると感じながら、マンコから大量の汁を垂れ流していた。

「３……、２……、１……」

・・くりゅっっ！！！・・

私は目を瞑っていた。

「ゼロォォォッ！！」

会場全体から大きな声が聞こえた瞬間……。

パシュッッッ！

「は、ぶうぅぅーーーーっ！！！」

経験した事のない激痛が私のマンコから体の中心を突き抜けていた。私が目を開けると、私の口から突き出た血塗れのニードルの先端が目に映った。

・・ほ、本当に串刺しにされている。なのにどうして私、死んでないの。もう早く死にたい。このまま放置されるのは嫌。早く私を殺して・・

一瞬で死ねると思っていた私は、その思惑が外れ動揺していた。一瞬で串刺しにされ、麻痺していたような痛覚が覚醒したように私を襲ってくる。それは、とても耐えられる痛みではなかった。

「おぼおぉおぉぉーーーーーっ！！！！」

私はニードルが突き出た口で、ごぼごぼと血を吐きながら絶叫していた。すると、私を串刺しにしているニードルが高速で回転を始めた。

「んんぼおうぅぅぅーーーーっ！！！」

私の体の中がニードルで削られる。私は絶叫しながら、意識が薄くなっていった。最後に私が思ったのは、観客席からの大勢のたのしそうな声が聞こえ、私の処刑を観て楽しんで貰えて嬉しいという事だった……。

穂乃果からの手紙

穂乃果からの手紙

水野真理は自分に届いた手紙を見て驚いていた。今時、電子メールではなく手紙というのにも驚いたが、その差出人が同級生の蔵満穂乃果であるのが更に驚きを増幅させていた。

蔵満穂乃果は、今、中学校を欠席していて、もう1ヶ月近くになる。担任は、病気欠席と言っているが、噂では蔵満穂乃果の家族から、警察に捜索願いが出ているらしいと誠しなやかに言われていた。どうやら、穂乃果は突然家を出て戻らないらしい。家出なのか、なんらかの事件に巻き込まれたのか、あるいは何処かで事故にあったのか、警察が捜索したが未だに行方不明となっていた。その、穂乃果からの手紙である。真理が驚くのも無理はなかった。真理は手紙の封を切りながら考える。なぜ自分なのかと……。とりたて仲が良い訳でも、よく話していたという訳でもない。思い返しても穂乃果から手紙を貰うような覚えはなかった。

手紙を広げてみると和紙の便箋にびっしり文字が書かれている。真理は、穂乃果からの手紙を読んでいった。

★　★　★　★

こんにちは。突然の手紙で驚いたと思いますが、水野さんに是非私の事を知って貰いたくて手紙を書きました。電子メールの方が簡単

ですが、やはり直筆で書いた方が水野さんも信じてくれると思ったので乱筆ですいませんが、一生懸命書きました。この手紙は間違いなく私、蔵満穂乃果が書いたものです。最後まで読んでくれれば嬉しいです。

なお、この手紙が水野さんに着く頃には、私は処刑されてしまっていると思うので、もし私を探している人がいたならば止めるよう伝えて下さい。無駄な努力になりますので……。

私は処刑される為に自ら家を出ました。私は幼い頃から処刑や拷問に興味を持っていました。鉄の処女や串刺し、リッサの鉄棺、牛裂き、ギロチン等々、眩暈がするほど憧れていたのです。自分が処刑される身になったらと妄想するのが私の毎日のオナニー時のベーシックでした。

どんな妄想をするか書いておきますね。これを読めば水野さんも私を見る目が変わるでしょう。

まず私のマンコを〝苦悩の梨〟で壊されます。膣を裂かれ子宮を串刺しにされるのです。それから、本格的にマンコから口まで完全に串刺しにされます。泣き叫び命乞いをする私の体が押さえつけられ、2メートルはある鉄串の切っ先が私のマンコの穴に入れられ容赦なく突き入れられます。

グチョ、グチョ

嫌な音を出しながら鉄串は私の体を貫いていき、私の血と共にその切っ先を口から出してきます。私はマンコから口まで完全に串刺しにされ、体をビクビク痙攣させていますが、これで終わりではありません。私の体が仰向けでギロチン台にセットされます。と同時に私の足首にもそれぞれ丈夫なロープが結びつけられました。このロープは左右別の牛に繋がれています。そう〝牛裂き〟の処刑です。苦悩の梨でマンコを壊され串刺しにされた私は、ギロチンで斬首さ

れ、牛裂きで股を裂かれ絶命するのです。あぁ、私はこんな妄想を毎日しながらオナニーして激しく潮を吹いてしまっているのです。

私の異常さが分かってもらえましたでしょうか。私はもうオナニーだけでは我慢出来なくなり、本当に処刑される為に家を出ました。そこで、私が何故水野さんに手紙を書いたのか。それは水野さんが私と同類と感じたからです。直感とでも言いましょうか。それでも間違いなく水野さんは私と同じ異常性欲の持ち主でしょう。ここまで私の手紙を読んだ今、マンコに触ってみて下さい。間違いなく大量に濡れていると私は確信しています。手紙を書いた理由。それは水野さんに、こういった道もあると知って貰いたかったからです。これから一生我慢して生き続けるか、自分の隠された欲望を解放する勇気を持つか。その選択肢を与えてあげたかったのです。

長くなりましたが、これで筆を置きます。本当は誰にも知られずに処刑されるのが良かったのかも知れませんが、私もマンコを徹底的に壊されて処刑されるという夢が叶い興奮しているのでしょう。誰かにこの喜びを知って貰いたかったのです。

それでは、水野真理さん。さようなら。あなたの夢も叶いますように……。

蔵満穂乃果

★ ★ ★ ★

穂乃果の通っていた中学校で、穂乃果の凄惨な死体が発見されたのは、真理が手紙を受け取ってから僅か一週間後だった。

穂乃果の死体は校庭の外れの銀杏の木から開脚され逆さに吊されていた。太ももの付け根に食い込む黒いサイハイソックス以外全裸にされた穂乃果の身体は大きく開脚され性器部分を晒す状態で吊され、両腕と頭部は切断されていた。頭部がないこの死体が穂乃果であると判明したのは下腹部にくっきりと焼き印された「ほのか」という文字と同じ名前の女子が学校も欠席し行方不明になっており、ＤＮＡ鑑定の結果この遺体が穂乃果であると確認されたのであった。その後、両腕と頭部は穂乃果の死後切断されたものと判明し、穂乃果の死因はその女性器部分に加えられた残虐な破壊行為によるショックと失血が原因と推測された。穂乃果の性器は全てが破壊されていた。外性器はクリトリス、小陰唇とも切除され尿道から太さ一センチもあるニードルが突き刺され膀胱を串刺しにした後穂乃果の下腹部を突き破りその先端を見せている。股間の中心では膣壁が抉られたように無くなっておりポッカリと穴が開いていた。それはドリルのような物で膣を削り取られたのではと推測された。そして、その奥にあるべき子宮までも穂乃果の身体の中から失われていた。さらに卵巣まで摘出されてしまっていた。穂乃果は生きたまま残酷に容赦なく性器を破壊されていき、最後に子宮と卵巣を摘出されそのショックと出血により絶命したのだ。穂乃果の直接の死因は性器破壊に間違いないが、その他にも穂乃果の身体には執拗に残虐行為が加えられていた。身体全体、特に股間部分大陰唇と太ももも内側に顕著に残る蚯蚓腫れは穂乃果が鞭による激しい打撃を性器中心に受けていた証拠であり、ほとんど膨らみのない穂乃果の胸は十字に切り裂かれ乳首は抉り取られていた。そして、恥丘には太い五寸釘が何本も打ち込まれ大陰唇や膣前庭窟には無数の針が根本まで突き刺されている。肛門も例外ではなく直径五センチ程もある木製の杭が深く打ち込まれておりＳ字結腸を突き抜けていた。そして、肛門括約筋にも太い針がぐるりと突き刺されている。

いったい何故穂乃果がこれほど残虐な行為を受けたのか。異常なまでに女性器が破壊されている。よほどの執着が女性器にあるのか。

それは、これを行った犯人が捕らえられるまで真相は闇の中であるが、ただ一人、水野真理だけはその真相を知っていた。真理は、穂乃果の凄惨な遺体の様子が耳に入ると、穂乃果は満足して処刑されたのだと理解した。性器を徹底的に壊され処刑される。穂乃果の夢が叶ったのだ。きっと穂乃果は幸せだったのだろう。真理は教室から、校庭の外れの規制線の貼られた銀杏の木を見る。

・・私の処女マンコも徹底的に壊して処刑してくれる人がいるかなぁ・・

銀杏の木を、ぼんやりと見つめながら真理は、まるでお漏らししたように座っている椅子の座面まで濡らしてしまうほど激しく性器を濡らしてしまっていた。中学1年生の真理がどんな未来を迎えるのか。それはまだ真理自身にも分からない事だった。ただ一つ確かなのは真理の中で、今まで抑えつけられていた性癖がはっきりと目覚めてしまったという事だった……。そして、真理はふと思い出した。

・・隣のクラスでメス奴隷になった人、誰だっけ……。その人もいなくなってるよね・・

真理は、そのメス奴隷になった女子も穂乃果と同じだったのでは考える。そして自分も同じ道を辿るのではと考えていた。

同級生女子の性器破壊　1

同級生女子の性器破壊　1

かねてからの計画を実行に移す時がきた。ターゲットは僕と同じクラスの女子、山内篤子だ。中学に入学して以来ずっと気になっていた女子である。三つ編みお下げに眼鏡をかけた真面目で大人しそうな顔は可愛いとは言えないが、その野暮ったさが僕の心を妙に惹き付ける。親しい友人がいないのかいつも一人でいることが多く、他の女子が制服のスカートを短くしている中で校則通り膝上丈のスカートを着用している姿も僕には逆に惹き付けられてしまう。が、僕は山内篤子と真面目に交際したいなどと考えている訳ではない。もちろん、篤子には好意を持っており、僕にとって理想の女子といえる。しかし、僕はこの篤子を徹底的に辱め痛めつけ苦しめ、泣き叫び哀願する姿を想像しながら毎日自慰をしてきた。僕は篤子が苦しむ姿を楽しみたいのだ。そして、絶望の中、篤子が完全に絶命する姿を想像すると……。

★　★　★　★

捕獲した篤子が目を覚ましたようだ。不安げに周りを見回し、僕の姿を見つけ目を見開き息を呑む。僕は全裸で女子の下着を頭に被り篤子の前に立っていた。篤子は目の前に全裸で立つ僕の異常さに胸に手を合わせたまま声も出せずにいた。

「立ちなさい。」

僕は篤子に命令する。篤子はあきらかにまだ何が起きているのか認識できていない状態で僕に命令されるままヨロヨロと立ち上がった。

「両手を上げ、足を開くのだ。」

篤子は再び命令されたまま、両手を高く上げ足を開いた。セーラー服姿の篤子が私の目の前で命令通りの姿勢でいる。

「もっと大きく。限界まで足を開くのだ。」

篤子はビクッと身体を震わせると、慌てて立っていられる限界まで足を大きく開く。僕はそこで頭に被っていた下着を取った。そして、篤子は僕に気付いたようだった。

「ユ、ユウキくん・・？」

驚いたように問いかける。

「どうして・・？」

篤子の怯えた顔が僕を興奮させる。

「篤子のことが好きで好きで我慢できない。篤子を自分だけのモノにしたいんだ。」

それでも命令通りの姿勢を崩さずにいる篤子に笑みを浮かべながら僕は自分の本心を伝えた。

「わたしのことを・・・」

篤子は顔を紅潮させ、僕の勃起しているチンポを見て、さらに顔を赤く染めた。

「毎日、篤子のことばかり考えて自慰していて、もう何も手につかない・・」

間違いなく勘違いしている篤子に、僕はまた本心を吐露した。そう、嘘偽りない本心だ。この、篤子が苦痛で泣き叫ぶ姿を想像すると僕のチンポは我慢できないほど硬くなっていく。

「わたし、ブスでスタイルも悪いし・・。」

篤子は小さな声で呟く。

「かわいいよ、篤子。篤子のことを思うだけで僕のチンポはこんなになってしまうんだ。」

篤子は目のやり場に困るように俯いた。

「嫌かい、篤子?」

僕はわざと声を落として元気を失くしたように言う。

「ごめんなさいっ・・。私、男の人にこんなことを言ってもらったのも、男の人のチンチンを見るのも初めてなんです。だから、どうしていいか分からなくて・・」

篤子は慌てて答える。

「そんな篤子が好きなんだ。篤子は僕のこと・・」

僕はまたわざと言葉を切った。

「嬉しいです。私もユウキくんのこと好き・・」

篤子は耳まで真っ赤にして答える。馬鹿な女だ。自分が拉致されたことさえ忘れている。僕は早速次の段階に進むことにした。

「ありがとう。僕も嬉しいよ、篤子。」

篤子は上気した顔で僕を見つめている。

「篤子も僕みたいに自慰とかしたりするの?篤子は真面目だからそんなことしないか・・」

僕は篤子の瞳を見つめながら言った。

「わ、私もしてます・・。ユウキくんは私のこと真面目な女の子と思っているみたいだけど本当は変態でエッチな女の子なんです・・」

篤子は顔を赤く染めたまま続ける。

「毎日、時間があると変なこと考えてオナニーばかりしています。だから、学校では普通の女の子と思われるように真面目な振りをしているんです・・」

篤子の目に涙が滲み始める。

「ユウキくん、ごめんなさい、真面目な女の子じゃなくて。でも、嫌いにならないで下さい、ユウキくんの言うことなら何でもききますから・・・。私もユウキくんにならマンコ見せるのも平気です・・・」

篤子はいつの間にか目に涙をためて必死に訴えた。

「ありがとう。大丈夫だよ、篤子。今だって真面目に答えてくれたじゃないか。篤子のそういうところ好きなんだ。」

緊張して力の入っていた篤子の身体から安心して力が抜けるのが分かった。

「お願いがあるんだ、篤子。」

「はい・・」

「その姿勢のままスカートを捲って、篤子。」

「はい・・・」

篤子はスカートの裾に手をかけると一瞬躊躇した後ゆっくりとスカートを捲り上げた。篤子は太ももの付け根近くに食い込む黒いサイハイソックスの下に黒いパンティストッキングを重ね履きしていた。そして、腰までたくし上げたスカートの下から濃紺のブルマに包まれた篤子の下腹部が現れる。

「ユウキくん、恥ずかしい・・」

僕は篤子の形のいい太ももと、匂い立つような恥丘と股間を舐めるように見つめた。

「もっと腰を突き出して股間を見せて、そして背筋も伸ばして顔を上げて、篤子。」

篤子は大きく足を開いたまま腰を突き出すと背筋を伸ばし、俯いていた顔を上げる。

「恥ずかしいけどユウキくんに喜んでもらえると嬉しい・・・」

篤子は僕の前にスカートの下を晒したまま健気に言う。僕はさらに篤子を辱めるため次の命令を言った。

「そのまま放尿して、篤子。」

「えっ・・・」

さすがに篤子は躊躇した。

「だめかな、篤子。大好きな篤子のおしっこ漏らす姿が見たいんだ。」

「だ、大丈夫です。ユウキくんに喜んでもらえるなら私、このままおしっこします・・」

僕が落胆した表情をみせると、篤子は慌てて承諾する。そして、下腹部に力を入れた。

「あっ……ユウキくん、出ます・・・」

大きく開いた篤子の股間から湯気を立てて小便が溢れ出した。

「ゆっくり出して、篤子。」

「はい・・・」

篤子の小便は、篤子のブルマをパンストをサイハイソックスを濡らし汚していく。

「篤子・・」

僕は立ったまま股を開いてお漏らしする篤子を見ながら自慰していた。自分の好みの女子が目の前でお漏らしするリアルな姿に僕は爆発寸前だった。

「篤子、跪いてっ」

僕の言葉に篤子は小便を漏らしながら慌てて跪いていた。

「口を開けて、篤子。」

僕は篤子の口に自分のチンポを突き入れた。驚いた篤子が両手で僕の足をつかみ抵抗したが、構わず僕は篤子の頭を押さえつけ喉の奥まで突き入れる。そして、そのまま篤子の口の中、喉奥に射精していた。

ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ、ドピュッ

「おごごうぅぅっ」

苦しげな声を上げる篤子に僕は命令する。

「全部飲み込むんだ、篤子」

僕がチンポを篤子の口から抜くと、篤子は口を押さえ僕の精液を溢さないように飲み込んでいた。

同級生女子の性器破壊　2

同級生女子の性器破壊　2

「ごほっ・・ごほ・・」

篤子は咽せ込みながらも僕の出したモノを全て飲み込んだ。

「苦しかったかい、篤子。」

「大丈夫です・・ユウキくんが私のお漏らしする姿に興奮してくれたと思うと嬉しくて・・・」

篤子は涙が滲む目で僕を見上げて言う。

「ありがとう、篤子。じゃあ、両手を背中にまわして口を大きく開いて・・。」

篤子は僕に言われるまま見上げた状態で口を大きく開けた。僕は自分のモノを掴むと篤子の口に狙いをつける。僕は僕のモノを見つめる篤子の表情から、篤子はこれから自分が何をされるのか間違いなく理解していると感じた。そして、理解していながらそれを待っている篤子に興奮する。

「動かないで、篤子。」

僕は篤子の口の中目がけて放尿した。篤子の口が僕の小便ですぐに一杯になる。篤子は小便が自分の口に注がれた瞬間目を閉じたが、すぐに目を開け次の命令を待っていた。

「全部飲んで、篤子。」

僕は篤子に、篤子が想像し待ちかねているだろう命令を下した。篤子はそのままこぼさないように口を閉じると僕の小便を残さず飲み干し、当たり前のようにまた口を開ける。そこに僕もまた当然のように小便を注ぎ込んだ。

「ごぼっ・・ごぼっ・・・」

篤子は従順に僕の小便を飲み続ける。そして、とうとう僕の膀胱に貯まっていた小便全てを篤子に飲ませていた。

「ユウキくんのおしっこ、苦いけど美味しいです・・それに、篤子・・ユウキくんのモノになったみたいで嬉しい・・・」

僕の小便を全て飲み干した篤子は興奮した表情で言う。

「遠慮なく篤子を調教して、ユウキくんのモノとして扱ってください・・・」

僕の小便を飲んだことで、篤子は何か変わったように口調まで変化していた。僕も好きな女子を服従させ自分の小便を飲ませるという行為に興奮し、僕の股間は再び固くなっていく。

「わかったよ、篤子。これから、篤子は僕のモノだ。」

「はい・・これから篤子はユウキくんのモノとなります・・篤子の人格など全て無視してモノとして扱ってください・・・」

しかし、あまりに僕の思い通りに進むことに多少疑問を覚えた僕は篤子を試してみることにした。

「眼鏡を外せ、篤子。」

篤子に合わせて僕も口調を変える。

「はい・・ご、ご主人様・・・」

それに答えた篤子は命令通り眼鏡を外すときちんと正座し両手を膝に当てる。僕は見上げる篤子の頬を平手で打った。

「あっ・・・」

篤子は小さく声を上げたがそのまま姿勢を崩さずにいる。僕は続けて篤子の頬を打った。

「あ、うっ・・・」

篤子は僕に頬を打たれるまま抵抗せずにいる。目から涙を流し、頬は赤く染まってきた。中学生の、しかも真面目な女子がこんなに激しく頬を打たれることは有り得ないことだろう。篤子は小さな声で泣き出していた。しかし、その篤子の泣き顔が僕を興奮させる。この泣き顔が見たかったのだ。僕は片手で篤子の髪の毛を掴むと拳で篤子を殴り始めていた。

「うあぁぁぁーーーーー・・・」

気が付くと篤子は鼻と口から血を流し号泣していた。それでも、抵抗せずに僕に殴られるままになっている。僕は腫れ上がった篤子の顔面を見て、手を止めた。

「眼鏡をかけて立ちなさい、篤子。」

篤子は泣きながら立ち上がると当たり前のようにスカートの裾を捲り上げると足を大きく拡げ自ら僕の前に股間を晒す。

「後悔しているか、篤子。」

僕は篤子の涙と鼻水で汚れ頬が赤く腫れ上がった顔を見つめながら言った

「い、いえ・・大丈夫です・・ユウキくんが本当に篤子をモノとして扱ってくれたので嬉しいです・・・」

篤子は泣き声で続ける。

「ユウキくんの好きなように篤子を痛めつけて徹底的に調教してください・・篤子の性器もユウキくんになら調教してもらって壊されてもいいです・・・・」

篤子は腫れ上がった顔を赤く染め、羞恥からかだんだんと声が小さくなっていく。

「そうか・・。よし、そのまま背筋を伸ばし顔を上げるのだ、篤子。」

篤子は僕の命令通り背筋を伸ばし顔を上げる。

「そのまま、動くな、篤子。」

僕は笑みを浮かべ、篤子の下腹部と股間を観察した。篤子はまだ何か言いたそうに半開きの唇を細かく震わせている。

「これから何をされるか分かるか、篤子。」

僕は篤子の股間から目を離さずに言った。

「は・はい・・・あ、篤子の性器を調教していただけるのだと思います・・・・」

篤子は、その震える唇から声を出した。そして、期待を込めた目で僕を見つめる。

「これから、ゆっくり時間をかけて篤子の性器を徹底的に痛めつけて壊していく・・。」

僕は一旦言葉を切って篤子の反応を待った。

「はい・・・・ユウキくんに篤子の臭くて汚い性器を処刑してもらえると思うと嬉しくて下腹部が熱くなっています・・・・」

言葉とは裏腹に再び今にも泣き出しそうな声で篤子は言う。僕は篤子の横に机を動かし、その上に予てから用意してあった器材を並べていく。

何種類もの鞭、大小様々な蝋燭、太さや長さの違う数え切れない程の針、カテーテル、浣腸器、膣鏡、鉗子類、拘束具、開口具、ロー

ター・ディルドゥ等の性具、エトセトラエトセトラ・・。
ありとあらゆるものを使って篤子の性器を二度と使用できないように残酷に壊していく。おそらく漠然と予期していただろう篤子は、涙を滲ませながら机の上に並べられる器材を見つめ遠目にも分かるほど震え始めた。

「怖いか、篤子。」

大好きな篤子の性器をついに処刑出来ると思うと、僕は篤子とは違う興奮で身体が震えてきた。

「こ、怖いです・・でもユウキくんに喜んでもらえるなら・・・・」

僕は逸る気持ちを抑え拘束具を手にすると篤子に命令した。

「スカートを脱ぎなさい、篤子。」

「はい・・・・」

篤子はホックを外しファスナーを開けるとスカートを脱ぎ、それを畳んで脇に置くと今度は両手を上げ足を大きく開いた。僕は濃紺のブルマに包まれた匂い立つような篤子の下腹部と黒いストッキングにサイハイソックスが食い込む太股をしばらく見つめた後、次の命令を告げた。

「両手を後ろにまわして、篤子。」

「はい・・・・」

篤子は上げていた両手を背中にまわす。僕はその篤子の両腕を拘束

具で厳重に固定した。

「あっ・・痛いっ・・・・・・」

高手後手にきつく両腕を拘束された篤子は小さく声を上げる。僕は構わず篤子の首に皮の首輪を付け、さらに腰にも皮のベルトを装着した。そして、頑丈な鉄のパイプを篤子の背中に通し首輪と腰のベルトで固定する。

「あっ・あっ・あっ・・・・・」

両腕も動かせず、鉄パイプで背筋を伸ばし胸を突き出した状態で拘束された篤子はまた小さな声で泣き始めた。

同級生女子の性器破壊　3

同級生女子の性器破壊　3

「可愛いよ、篤子。」

僕は震えながら泣いている篤子に近づくと腰を屈めて篤子の唇に自分の唇を重ねた。そして、右手を篤子の股間に当てる。篤子はビクッと身体を大きく震わせたが、そのまま目を閉じ足を開いた状態で僕のされるがままになっていた。

「んっ・・んっ・・・・。」

だんだんと篤子の息が荒くなっていく。僕は篤子のセーラー服を捲るとパンティストッキングの下、さらに下着の中に右手を滑り込ませた。そして、すでに固く勃起している篤子のクリトリスを刺激する。

「んっんっーーーーーー・・」

僕は人差し指と薬指で篤子の性器を開くと、中指を篤子の膣に突き入れた。何を想像しているのかすでに激しく濡れている篤子の性器は何の抵抗もなく僕の指を根本まで受け入れた。僕はそのまま篤子の膣壁を激しく擦り、指先で篤子の子宮を確認する。

「んぁぁーーーーー・・・・。」

大好きな篤子の性器の中に本当に指を入れている。僕も興奮で息が苦しくなってきた。と同時に僕のモノも我慢できないほど固くなってきた。僕は一旦、右手を抜くと篤子にキスしたまま両手で篤子のブルマ、パンスト、下着を太ももまで下ろした。そして、口を離して篤子の股間を覗き込む。篤子の恥丘はまだ陰毛が生えておらずつるつるの状態でその下に、篤子のまだ桜色の性器が僅かに見える。僕は篤子の小陰唇を指で拡げ性器の中身を確認した。クリトリスが固く勃起し桜色の膣前庭窟に尿道口と膣口が見える。そして、強烈な篤子の匂いが僕を興奮させる。

「ユウキくん・・恥ずかしい・・・篤子、性器や性器の中身を観察していただくの生まれて初めてなんです・・・でも、ユウキくんに見てもらえて嬉しい・・・」

僕も教室で篤子を見た時や、自慰の際にいつも妄想していた篤子の性器を間近で見て我慢できなくなっていた。

「篤子の性器、想像通り綺麗だよ。」

僕は篤子に言うと、篤子の液が糸を引く性器に口を付け夢に見た篤子の性器を味わった。

「あっ・・ユウキくん、汚いです・・・」

篤子は腰を引こうとしたが、僕は篤子の腰を抱えるように押さえ付け篤子の性器を味わう。

「篤子のこと好きだから汚いなんて思わないよ。」

「ユウキくん、嬉しいです・・こんな、ドブスの篤子の臭くて汚い性器をまさかユウキくんに舐めていただけるなんて・・・・」

僕は篤子のクリトリス・尿道口・膣口そして、会陰部や肛門まで舐め吸い、膣と肛門には舌を突き入れた。

「あぁっ・ユウキくん・お尻の穴まで・・」

僕も初めての女子の性器の匂いと味を存分に味わった。

「篤子、ユウキくんに性器を舐めていただいて気持ちよくなっています・・・おっ・・おっ・・・・」

真面目で大人しい優等生の篤子が僕に性器を舐められ声を漏らしている。

「大好きだよ、篤子。」

僕は篤子の性器から口を離して言った。そして、立ち上がると自分のモノの先端を篤子の性器・膣口に当てる。

「ユウキくん・・・・」

篤子がまるで夢見ているように呟く。僕は篤子の腰を押さえ付けると、篤子の中に自分のモノを突き入れていった。

「ユウキくん・・痛いっ痛いっ・・・・」

さすがに指とは違い篤子が悲鳴を上げる。しかし、その篤子の表情が篤子を犯しているという意識を刺激し僕をさらに興奮させる。

「痛いっ・・ユウキくん、痛いよぅ・・」

篤子が痛がるほど僕の中で残虐な気持ちが膨れ上がり興奮していく。僕は自分のモノを篤子の中に根本まで突き入れていた。

「全部入ったよ、篤子。」

「あっ・・はい・・。篤子の中にユウキくんのモノが入っているのが分かります・・オナニーと違って痛いけど、篤子とユウキくんが繋がっているのが何かとても嬉しいです・・きっとユウキくんだから・・・篤子も本当にユウキくんが大好きです・・・」

篤子は初めての性体験で何かが変化したのか健気にも自分の気持ちを告白してきた。

「嬉しいよ、篤子。このまま、篤子の中に出すからね。」

僕は篤子の腰を押さえ付けたまま、腰をゆっくりと上下に動かし始めた。

「あっ・・・いっ・・・・・」

再び篤子が顔を歪める。しかし、僕は構わずに徐々に腰を早く動かしていく。今まで自慰の際の妄想でしかなかった篤子を本当に犯している。僕は目の前の篤子の性器に本当に突き刺している感覚に興奮し、篤子もまた本当に自分の性器が犯されている感覚にまるで痴呆のようになっていた。

「ユウキくんっ・・ユウキくんっ・・・・」

篤子が僕の名を連呼しながら、自分でも腰を上下に動かし始めた。

「ユウキくんっ・・もうダメぇーーーーっ」

篤子がまるで断末魔のように絶叫し、同時に失神したように篤子の身体から力が抜ける。そして、その瞬間、僕も篤子の中に射精していた。

「あっ・・・・」

しばらくして覚醒した篤子は、自分が拘束されていることを忘れて起きあがろうとし無様に転んでいた。僕は篤子に手を貸し立ち上がらせる。

「ユウキくん、ごめんさい・・馬鹿な篤子はユウキくんに犯していただいて自分だけいい気持ちになってしまいました・・」

篤子はまた泣き出しそうな顔で言う。

「ドブスでスタイルも悪くて性格も暗くて女の子の魅力なんてない篤子の事をユウキくんが好きと言ってくれて、篤子がおしっこする姿を喜んでくれて、ユウキくんのおしっこ飲ませてくれて・・そして、キスもしてくれて性器まで舐めてくれて、そして・・・」

篤子は話しながら、ついに泣き出してしまっていた。

同級生女子の性器破壊　４

同級生女子の性器破壊　４

「篤子の性器を犯してくれたのに・・ユウキくん、篤子のことを嫌いにならないでください・・ユウキくんに嫌われたら篤子もう生きていけない・・・・」

篤子ｔは必死に哀願する。

「大丈夫だよ、篤子。見てごらん。」

僕は篤子の泣き顔を見て再び固くなっている自分のモノを示した。

「他の女子じゃこんな風にならない。大好きな篤子だから・・」

僕が言うと篤子は感動で言葉を失っているようだった。

「・・・・嬉しい・・幸せです・・・・・」

篤子は感無量の表情で呟いた。そして、言葉を続ける。

「篤子もこれからユウキくんに性器を処刑してもらえると思うとまた恥ずかしい液が出てきています・・ユウキくんだから怖いけど嬉しいです・・・・」

どうやら篤子は本当に僕が願望として思っていた通りの女子のようだ。僕は心の中で残酷な笑みを浮かべると、これからこの真面目で大人しい篤子が大声で泣き叫ぶ姿を想像し興奮してきた。

「これから篤子の性器を処刑していただくとき、もし篤子が許しを願っても絶対に無視してください・・篤子tの性器を壊していくのがユウキくんの目的で楽しみなのだから情け容赦なく処刑を執行してください・・本当に篤子、ユウキくんに性器を壊していただくのが嬉しいんです・・・・」

篤子のこの健気さが僕の残虐心を加速させる。

「これが何か分かるか、篤子?」

僕は篤子の傍らに用意してある物を指差して聞いた。

「・三角木馬・・です・・・・

「使い方も分かるかな?」

名前を知っているということは使い方も分かっていると思うが、篤子自身の口からそれを聞くため僕は言った。

「はい・・女の子を跨らせ女の子の性器を痛めつける拷問具・・です・・・・」

「さっそく跨ってもらおうか、篤子。」

「はい・・・・」

篤子は踏み台に登ると三角木馬に跨りゆっくりと腰を下ろしていく。そして、自分の股間の中心を慎重に三角木馬の頂点に当て徐々に体重をかけていった。

「・あっ・・痛いっ・・・・・」

僕は篤子が三角木馬に跨ったのを確認し踏み台を抜いた。篤子は両足を木馬の側面に当て少しでも自分の性器に食い込む木馬の激痛から逃れようと必死になっていた。僕はそんな篤子の両足首に皮のベルトを装着し、そこに片側十キロの錘をぶら下げた。

「んっ・・あぁぁぁぁぁーーーーーー」

足や膝で僅かでも支えていた自分の全体重と錘の重さが一気に性器に加わり篤子は悲鳴を上げる。僕はさらに片側十キロずつの錘を篤子tの足首に追加した。

「・・い、痛いです・・ユウキくん、痛い・・もう許してください・・・・」

合わせて四十キロ。自分の体重ほどの錘を吊された篤子は泣きながら哀願する。拷問のための器具である。篤子に与えられた苦痛は凄まじいものであると想像できた。しかし、当然ながら篤子をこの程度で許す気持ちは僕にない。篤子の両足にさらに錘を追加した。

「あっうぅぅぅぅーーーーーーー」

片側三十キロ、計六十キロ。篤子は太ももから足首までピンと伸ばしたまま足を動かすことも出来ずにいる。篤子の股間に三角木馬の頂点が激しく食い込み、その篤子の無様な姿に僕はたまらなく興奮

した。

「・痛いぃぃ・・許して・ユウキくん、許して・・・・」

篤子の哀願が心地よい。僕は残っていた四個の錘を二個ずつまとめて篤子の両足首に追加した。

「・おぉぉぉぉぉぉーーーーーーー」

篤子が絶叫する。片足五十キロ。百キロの錘を付けられた篤子の両足は伸びきり関節がミシミシと音を出している。三角木馬が食い込む恥骨も割れる寸前なのは疑いようもなかった。

「あぁぁぁぁぁーーーっユウキくん、許してっ・許してくださいいいいいっ・・・・」

篤子は号泣しながら許しを請う。僕はその篤子の姿を楽しみながら自慰をした。

「ユウキくん、許して・・許して・・・・」

篤子の可愛い泣き声で呪文のように繰り返す言葉が心地よく僕を興奮させ、忽ち僕は射精していた。

「可愛いよ、篤子。」

セーラー服とブルマにニーソックス姿で背筋を伸ばしたまま拘束され、三角木馬に跨がされ両足に合計百キロの錘を付けられ号泣しながら哀願する篤子。僕はこのまま篤子を処刑してしまいたい気持ちを必死に抑え、篤子の足から錘を外した。そして、篤子を抱え三角

木馬から下ろし拘束具も外す。

「あうぅぅぅーーーーーっ・・・・・」

床に仰向けになったまま両手で性器を押さえ号泣する篤子を跨いだ僕はそのまま篤子の顔面目掛けて放尿した。同じクラスの女子の顔を便器として扱う行為に僕の征服感が満たされる。

「・・ユウキくん・・ごほっ・・・・・」

ようやく我に返った篤子が鼻の中に小便を注がれ咽せる。

「自慰しろ、篤子。」

「はいっ・・ユウキくん・・」

篤子は僕の小便を浴びながら足を開き右手を股間の中心に当てゆっくりと擦り始める。そして、左手はセーラー服の中に入れ乳首を刺激する。

「篤子は今・ユウキくんのおしっこかけてもらいながら・オナニーしています・・・」

篤子は僕の小便を浴びながらの自慰行為に興奮し、爪先立ちになり腰を持ち上げると激しく性器を刺激しだした。

「ユウキくん・・ユウキくん・・好きです・・あぁぁぁーーーーーーーー・・・・」

大きく声を上げた篤子は身体を硬直させた後、放心したように崩れ

落ちる。

「ユウキくん・ごめんなさい・・篤子、また一人で気持ちよくなってしまいました・・・・」

しばらくして覚醒した篤子は僕の顔を見つめ泣き出しそうな表情で言う。

「大丈夫だよ、篤子・・。」

僕はセーラー服姿の篤子を見つめながら言う。

「セーラー服姿の篤子、可愛くて大好きなんだけど、もっともっと篤子を痛めつけたいから服を全部脱いでもらおうかな。」

「はい・・・」

篤子は小さく返事をすると、眼鏡を外しセーラー服を脱いでいく。そして、ブルマ・ニーソックス・ストッキングと脱いでいき下着だけの姿となった。

「恥ずかしいです・・」

僕に性器を舐められ犯されていながらも、篤子は顔を赤らめ俯きながら躊躇していた。しかし、意を決したように顔を上げると下着に手をかけ脱いでいく。そして、最後に残ったスポーツブラに手をかけるとそれも脱ぎ、眼鏡をかけると両手を大きく上げ背筋を伸ばし足を大きく開いた。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n3095ja/

少女無惨　ー処刑される少女たちー

2025年9月19日01時46分発行